



研究プロジェクト一覧（平成26年度）

教員提案型連携プロジェクト

大区分	研究課題	プロジェクト代表者
からだ	身体疾患・症状に関する心理療法の研究	河合俊雄
	遂行機能の実行に関わる前頭葉ネットワークの解明	船橋新太郎
	対人相互作用に関わる認知・感情機能	吉川左紀子
	不正直な行動の神経生物学的基盤の研究	阿部修士
	連携MRI研究施設における認知神経科学の教育事業の展開	阿部修士
	環境要因が潜在的認知に及ぼす影響	上田祥行
きずな	農業・漁業コミュニティにおける社会関係資本	内田由紀子
	地域の幸福プロジェクト(上廣こころ学部門 幸福感の総合研究)	内田由紀子
	組織文化とこころのあり方:日本における企業調査	内田由紀子
生き方	こころ観の研究	鎌田東二
	こころとモノをつなぐワザの研究——伝統芸能・武道における心技体の研究を中心に	鎌田東二
	生態智の拠点としての聖地文化——こころ・場所・癒しの研究	鎌田東二
	東日本大震災関連プロジェクト～こころの再生に向けて～	鎌田東二
	こころの古層と現代の意識	河合俊雄
	子どもの発達障害への心理療法的アプローチ	河合俊雄
	終末期に対する早期支援	カール・ベッカー
	出生をめぐる医療と倫理	カール・ベッカー
	発達障害の学習支援・コミュニケーション支援	吉川左紀子
	科学と思想・哲学との対話を通じたこころ観の再構築	熊谷誠慈
	ヒマラヤ宗教精神の研究	熊谷誠慈
	国民総幸福(GNH)を支える倫理観・宗教観研究	熊谷誠慈
	孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究—京町家「くらしの学び庵」プロジェクト—	清家 理
	倫理的観点に基づく認知症介護の負担改善	清家 理
大人の発達障害への心理療法的アプローチ	畑中千紘	
教育	こころ学創生:教育プロジェクト	吉川左紀子

一般公募型連携プロジェクト

研究課題	プロジェクト代表者
身体と象徴:かたちとちから 一力のでる形—	木村はるみ(山梨大学大学院教育学研究科准教授)
高齢者の認知能力に及ぼす運動の影響	積山薫(熊本大学文学部教授)
被災地のこころときずなの再生に芸術実践が果たしうる役割を検証する基盤研究III	大西宏志(京都造形芸術大学教授)
心理療法場面に見られる象徴化機能の現代的問題に関する臨床心理学的研究	前川美行(東洋英和女学院大学准教授)
子どもの発達障害と作業療法	長岡千賀(追手門学院大学経営学部准教授)
自然のもつ文化的・教育的・芸術的価値とは:市民の価値判断を反映したマネジメントに向けて	伊勢 武史(京都大学フィールド科学教育研究センター准教授)
甲状腺疾患におけるこころの働きとケア	長谷川千紘(京都文教大学講師)

研究プロジェクト

身体疾患・症状に関する心理療法の研究

河合俊雄（京都大学こころの未来研究センター教授）

■研究目的

近年は、いわゆる心身症疾患だけでなく、小児科や産婦人科、ターミナルケア、遺伝子診療など、さまざまな医療分野において、患者の「こころ」に目を向けることの大切さが浸透しつつある。しかし、身体疾患治療における臨床心理学的アプローチは、疾患受容を目指した心理教育やストレスケアなどの一面的・限定的・操作的な方法が中心で、人間全存在への配慮と関心をもって語りに耳を傾けるという心理療法本来の姿勢とは遠く隔たったものが多いというのが現状である。

一方で、これまで報告されてきた身体疾患を抱えたクライアントとの心理療法実践のなかには、そうした症状やストレスへの対処にとどまらず、きわめて個別的で意義深い物語が展開されるものも少なくない。特に箱庭や夢などのイメージを用いた心理療法は、身体も含めた「こころ」の変容プロセスにおいて重要な役割を担いうるということが示唆されている。こうした身体疾患・身体症状への、本来の意味での心理療法の可能性を追究することは、よりよい援助体制を構築する上で重要なことだと思われる。

そこで、これまでに当センターで行ってきた一連の甲状腺疾患研究プロジェクトをさらに発展させ、甲状腺疾患だけでなく身体疾患一般や広い意味での身体症状に対する、従来の限定された役割にとどまらない心理療法的アプローチの有効性と可能性を模索するために、本プロジェクトは立ち上げられた。

■平成26年度の研究成果

1. 事例検討会による臨床の知の集積

平成26年度は、医療現場において身体疾患へのすぐれた心理臨床実践を行っている、以下の4名の専門家を招い

て事例検討会を開催し、1つ1つの事例の精緻な検討を積み重ねることで、臨床の知の集積をはかった。

第1回：坂井朋子（真生会富山病院心療内科、臨床心理士）

第2回：河合俊雄（京都大学こころの未来研究センター教授）

第3回：城谷仁美（城谷医院、心理士）

第4回：田中雄大（伊達赤十字病院、心理判定員）

こうした累積的事例研究により、(1) 医療現場における心理療法の特徴、(2) 身体疾患患者の語りやイメージの特徴、(3) 心理療法実践におけるポイントに明らかにした。

2. 思春期男子の身体化に関する研究

特に思春期の年代においては身体を通じて問題が表現されることが多く、心理療法を行っていく上で彼らの示す身体症状に注目することは非常に重要である。さらに、言葉や身体との関わりという観点から、男子は女子に比して主体の確立が困難な状況にあることから、「こころ」が受け止められない事態を受け止めるための方途として身体化という形をとりやすい。こうした考えから、アトピーや喘息などの身体症状をきっかけに来談した思春期男子との心理療法事例をもとにして、彼らとの面接で何が問題となり、何がポイントとなるのかを検討した。

その検討から、彼らの身体化の背景には、主体の確立の問題が存在していることを指摘し、彼らとの心理療法においては、いかに主体の確立がなされるかが重要であるという治療的着眼点を見出した。そして、事例研究を通じて、身体化を示す思春期男子の心理療法の特徴を描き出すとともに、心理療法的接近を試みる上でどのような注意



第1回研究会:坂井朋子



第2回研究会:河合俊雄



第3回研究会:城谷仁美



第4回研究会:田中雄大

や工夫が必要となるかを明らかにした。この研究は、日本箱庭療法学会の会員による優れた論考を公刊していくシリーズ、「箱庭療法学モノグラフ」

の第1弾として出版された（梅村高太郎『思春期男子の心理療法——身体化と主体の確立』創元社、2014年）。

■今後の展開

次年度は、引き続き事例検討会を開催してさらなる知見の集積と洗練をはかることで、身体疾患の心理療法についての新たな理論を構築することを試みる。加えて、事例検討から見えてきた身体化傾向をもつ者の心理的特徴を実証的に確認するために、身体化傾向を測る質問紙と描画課題（家屋画・室内画）を用いた調査を実施し、身体化傾向をもつ者の特徴を実証的にも明らかにしていきたいと考えている。



梅村高太郎『思春期男子の心理療法——身体化と主体の確立』

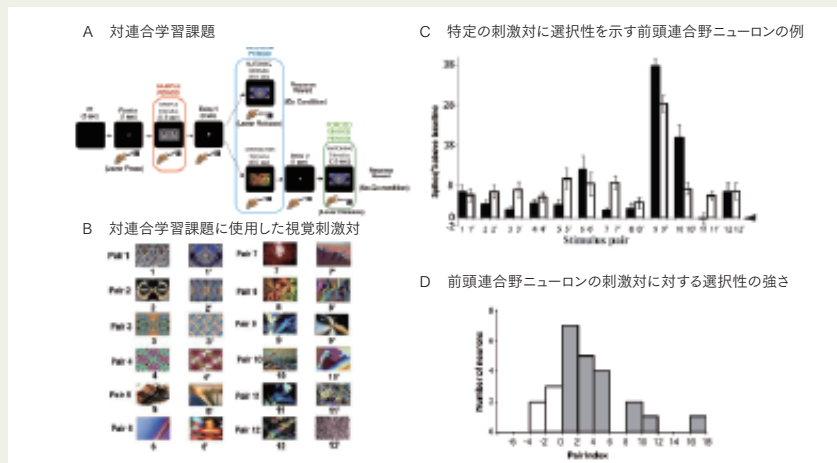
遂行機能の実行に関わる前頭葉ネットワークの解明

船橋新太郎 (京都大学こころの未来研究センター教授、現京都大学名誉教授)

■研究の目的

前頭連合野が、頭頂連合野、側頭連合野などの大脳皮質の後部連合野、大脳辺縁系、大脳基底核や脳幹などで行われている情報処理過程を、遠心性の出力により制御していることはよく知られており、前頭連合野のこのような機能は「遂行機能」と総称されている。前頭連合野による遂行機能の理解には、前頭連合野で生成され、他の領野に伝達されてそこの情報処理を制御するトップ・ダウン制御信号が重要な手がかりとなるが、トップ・ダウン信号の実態やその機能は明らかではない。

長期記憶に貯蔵されている情報の再生(再活性)には、前頭連合野の賦活が必要であり、前頭連合野から側頭連合野に送られるトップ・ダウン信号が重要な役割を演じていることが知られている。Miyashitaらの先行研究により、視覚刺激を用いた対連合学習課題を行っているサルの下側頭連合野で、特定の刺激対に対して選択的な応答を示す「対符号化ニューロン」、および、特定の見本刺激が提示されると、その後の遅延期に活動が漸増し、対となる刺激を想起していると思われる「対想起ニューロン」が観察されている。さらに彼らは、脳梁を切断したサルを用いて、これらのニューロンの活動が前頭連合野から発せられるトップ・ダウン信号によって調節されていることを明らかにした。しかし、このような対連合学習課題において前頭連合野のニューロンがどのような活動を示すのかは明らかでないと同時に、前頭連合野から発せられるトップ・ダウン制御信号の実態も明らかではない。そこで、ニホンザルを使用し、課題の遂行には長期記憶に貯蔵されている情報が必要とすると同時に、前頭連合野から下側頭葉に発せられるトップ・ダウン制御信号を必要とする課題である対連合学



習課題を用いて、前頭連合野の重要な機能である遂行機能の神経メカニズムの解明を試みた。

■研究の方法

抽象的なパターンで構成された視覚刺激24種類を用いて12対の刺激対を作成し(図B)、2頭のニホンザルに対連合学習課題(図A)を訓練した。手前のレバーを押すと顔前のモニター中央に注視点が現れる。サルが注視点を1秒間注視していると、24の視覚刺激からランダムに選択された1つの刺激(見本刺激)が0.5秒間提示される。その後5秒間の遅延期間(第1遅延期)が挿入された後、別の刺激が提示される。この刺激が見本刺激と対になっている刺激であれば、素早く(0.5秒以内)レバーを離すとサルは報酬を得られる。しかし、見本刺激と対になっている刺激でない場合は、さらに1秒間(第2遅延期)レバーを押し続けていると対刺激が提示されるので、素早く(0.5秒以内)レバーを離すと報酬を得られる。

■研究の結果と次の課題

約400個の単一ニューロン活動を前頭連合野外側部から記録し、解析した。見本刺激提示期の応答潜伏時の分布、視覚刺激に対する選択性、同一視覚刺激

を見本刺激、参照刺激、妨害刺激として提示した時の応答との比較など、応答特徴の詳細な解析を試みた。その結果、視覚刺激に対して選択性を示すと同時に、対となる刺激に対して選択的な応答(対符号化活動)を示すニューロン(図C)が存在していた。刺激対に対する選択性の強さを指標化(tuning index)し、その値の分布を調べたところ、正の値を示すニューロンが多数を占めること(図D)、ならびに、対となる刺激間には物理的な特徴の類似性が低いことから、対符号化活動は対連合学習の間に生成された活動であることが示された。一方、第1遅延期の活動については、活動の時間パターンの解析に加えて、見本刺激に対する選択性、対となる視覚刺激の情報を表象しているかどうか、あるいは、対となる視覚刺激の情報の想起に関わるかどうか等の解析・比較を試みている。前頭連合野外側部が後部連合野にトップ・ダウン信号を出力していることはよく知られているが、その実態や機能、生成されるメカニズムは明らかではない。対連合学習課題の遂行の間に観察されるニューロン活動のさらに詳細な解析により、前頭連合野外側部が出力するトップ・ダウン信号の実態とその機能を明らかにしていきたい。

研究プロジェクト

対人相互作用に関わる認知・感情機能：人はどのような顔に注目するのか——顔知覚の潜在動機の予備的検討

吉川左紀子(京都大学こころの未来研究センター教授)+ 上田祥行(同センター特定助教)

■顔に対する注意の配分

集合写真を見ているときのように、人が多数の人物の顔画像を自由に見ているときの視線の動きを観察すると、すべての顔を均等に眺めているわけではなく、長く見つめる顔や何度も見返す顔もあれば、ほとんど見ない顔もあることが分かる。人が特に目的を意識せずに何気なく複数の顔画像を見ているときの注視パターンを分析することを通して、顔に含まれるどのような情報が人の注意を引き付け、個々の顔の注視時間や注視回数を左右するのか、そうした行動指標に反映される、顔知覚の潜在動機を明らかにする研究を開始している。

■実験で検討したこと

今回の実験では、性別、表情、魅力度の異なる複数の顔画像を比較的長い時間、free passive viewing の状態で見ているときの知覚者の視線の動きを計測し、(1)視線が集まるのはどのような顔か、(2)顔を見始めてから早い時間帯と遅い時間帯では、視線が集まる顔に変化がみられるのかどうかを分析した。方法の概要は次のとおりである。

実験刺激として用いたのは20代の男女24名ずつの顔画像で、実験の各試行では12枚の顔画像がモニタ上に提示された(図1)。この12枚の画像中には、喜び、怒り、中性(真顔)表情の顔画像が4枚ずつ含まれている。また、これらの画像のうち6枚は事前に行われた魅力度評定(中性の顔画像で実施)の結果をもとに選択した高魅力度の顔画像であり、他の6枚は低魅力度の顔画像であった。実験参加者は20名の男女大学生、大学院生で、パソコンモニター上に同時に提示される12枚の顔画像を2分間、自由に見ているように指示し、その間の眼球運動を計測した(Eyelink1000, 500Hz)。1人の実験参

加者について2試行を行い、試行ごとに、もっとも多く視線が停留した顔画像、および総停留時間をもっとも長かった顔画像を抽出して、すべての実験参加者を通じてどのような顔画像がよく注視されていたか、視線が長く停留したかを分析した。

■結果と考察

視線の停留のパターンについて、1人の実験参加者の例を図1に青い点で示した。図1から分かるように、すべての顔画像に均等に視線が停留するのではなく、分布に偏りがあること、それぞれの顔画像のとくに目のあたりに注視が集まることなどが見てとれる。顔の表情別に、視線の停留回数と停留時間のそれぞれについて、2分間の試行全体、および試行の前半と後半に分けて全員のデータをまとめて示したのが図2である。図2から、全体として喜びの表情に視線が多く集まること、試行の前半は表情が中性の顔画像がよく注視されるが、後半になると喜びや怒りの表情に注視が集まること示された。さらに、魅力度の高い顔画像は魅力度の低い顔画像に比べて、一貫して注視回数が多く、注



図1 モニターに提示された12枚の顔画像。個々の青い点は視線の停留位置を示す。1実験参加者がモニターを2分間注視しているときの視線の停留パターンの例。

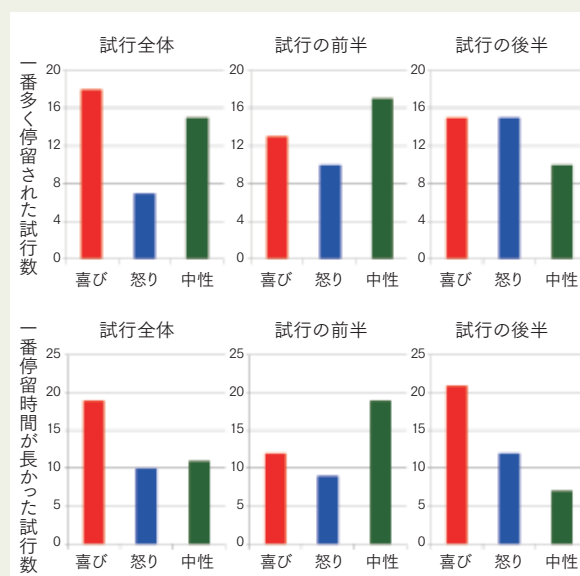


図2 顔画像に対する停留数(上)と停留時間(下)を喜び、怒り、中性の表情別に表した。

視時間が長いことも分かった。

複数の顔画像を自由に知覚するときの眼球運動の計測と分析によって、「長く見たい」「何度も見たい」という潜在的な知覚の動機を喚起し、動機を持続させる顔情報の特性を明らかにできる可能性が示された。

不正直な行動の神経生物学的基盤の研究

阿部修士 (京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定准教授)

■本プロジェクトの概要

本プロジェクトの主要な目的は、ヒトの不正直な行動、すなわち嘘に関わる神経基盤を明らかにすることである。先行研究の問題点として、嘘が極めて実験的なものであり、実際の社会的状況下における嘘とは異なったものである点が挙げられる。本研究では実験パラダイムを工夫することで、より現実世界に近い状況でのヒトの不正直さに関わる神経基盤について検討している。

■研究方法

今年度は本研究プロジェクトの基礎となった、不正直さの個人差を規定する神経基盤についての論文を発表したので、その成果をここで報告する (Abe & Greene, 2014)。この研究では機能的磁気共鳴画像法 (functional magnetic resonance imaging; fMRI) を用いて、1) 金銭報酬遅延課題、2) コイントス課題、の2種類の課題を行った。

1) の金銭報酬遅延課題は、報酬 (今回の研究ではお金) を期待する際の脳活動を調べるための課題である。この課題では、正方形が一瞬呈示され、その間にうまくボタンを押すことができれば、報酬を獲得することが可能である。正方形が呈示される前の時点での脳活動を解析すると、報酬を期待する際の脳活動、特に報酬情報の処理に重要な側坐核と呼ばれる領域の活動を特定することが可能となる。

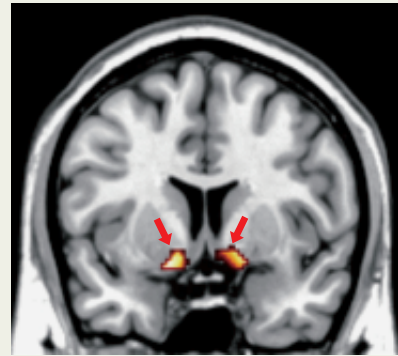
2) のコイントス課題は、正直さ・不正直さを測定するための課題である。この課題で実験参加者は、コイントスの結果——コインが表か裏か——を予想する。予想に成功すると、お金による報酬が与えられるが、失敗するとお金が減ってしまう。この課題は2種類の条件——嘘をつくことができない「機会なし」条件と、嘘をつくことができ

る「機会あり」条件で構成されている。

「機会なし」条件では、実験参加者は自分のコイントスの予測、つまり表が出るか裏が出るかの予測を、ボタン押しによって記録する。一方、「機会あり」条件では、実験参加者は表が出るか裏が出るかを、自分の心の中でのみ予測する。そしてコイントスの結果が呈示された後、実験参加者は自分の予測が正しかったかどうかを、ボタン押しによって報告する。「機会なし」条件では、実験参加者があらかじめ記録した予測に基づいて、正解・不正解が決定される。しかし「機会あり」条件では、コイントスの予測が成功したかどうかは自己申告に基づくため、ズルをして嘘をつくことが可能になる。したがって、「機会あり」条件において、予測の正答率が偶然の確率を超えている場合は、その実験参加者はお金を得るために嘘をついているとみなすことができる。なお実験がすべて終了するまで、この課題が嘘をつくことに関わる脳のメカニズムを調べるための実験であることは、実験参加者には伝えられない。あらかじめ実験参加者には、ランダムなイベントを予測する能力に関する実験であるという内容が伝えられる。

■研究成果

今回の研究の主要な結果は以下の2つである。まず、金銭報酬遅延課題において測定した、報酬を期待する際の「側坐核」の活動が高い人ほど、コイントス課題において嘘をつく割合が高いことが明らかとなった。つまり、脳のレベルで報酬への反応性が高い人ほど嘘をついてしまったという結果である。さらに、金銭報酬遅延課題において測定した、側坐核の活動が高い人ほど、コイントス課題で嘘をつかずに正直な振る舞いをする際に、背外側前頭前野



脳の側坐核

と呼ばれる領域の活動が高いことも明らかとなった。背外側前頭前野は、理性的な判断や行動の制御に重要な領域と考えられている。お金への誘惑に打ち勝って正直に振る舞うためには、報酬への反応性が高い人ほど、より強い前頭前野による制御が必要という可能性を示唆するものである。

今回の研究は、報酬への脳のレベルでの反応、つまり側坐核の活動の個人差によって、人間の正直さ・不正直さがある程度決まることを示した、世界的にも初の知見である。この成果は人間の「道徳性」を科学的に理解するための重要な一歩であると考えられる。

■今後の展望

上記の研究では、報酬への感受性が不正直さを促進する重要な要因の1つであることが明らかとなった。今後の研究により、不正直さを促進する他の要因、あるいは抑制する要因を明らかにするとともに、その神経基盤を明らかにしたいと考えている。

引用文献

Abe N, Greene JD (2014), Response to anticipated reward in the nucleus accumbens predicts behavior in an independent test of honesty, *Journal of Neuroscience* 34 (32): 10564-10572.

研究プロジェクト

連携 MRI 研究施設における認知神経科学の教育事業の展開

阿部修士 (京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定准教授)

■本プロジェクトの概要

平成24年3月のMRI装置の設置以降、こころの未来研究センター連携MRI研究施設の実験設備は、複数の部局の研究者によって幅広く利用されている。こうした最先端の研究設備を最大限利用するには、若い研究者が積極的に設備を利用できる環境・機会を提供することが必要である。

本研究プロジェクトでは、学部学生・大学院生・研究員を主なターゲットとして、認知神経科学の教育事業を実施する。こうした教育事業を継続的に実施することで、MRI装置利用のための環境を充実させ、若手研究者の積極的な研究への参加を促進できると考えられる。

■教育事業の概要

平成26年度は、(1) fMRI体験セミナー、(2) 脳科学集中レクチャー、(3) fMRI解析セミナーを実施した。以下に、それぞれの事業の概要を記載する。

(1) fMRI体験セミナー

2014年9月29日・30日の2日間、fMRI体験セミナー2014をこころの未来研究センター連携MRI研究施設にて開催した。本セミナーは、これまでMRIを用いた研究経験のない若手研究者をターゲットに、fMRIを体験する機会を提供するために企画された。今年度は



主に学内の大学院生・学部生・研究員を対象に、まず脳機能画像研究についての簡易的なレクチャーを実施した。その後、MRIを用いた実験を体験してもらい、自分の脳のデータ解析を行った。今後fMRI研究を行う若い研究者にとっては、実際のMRI研究を体感することで、スムーズに自身の研究に取り組める機会を提供できたと考えている。

(2) 脳科学集中レクチャー

2014年12月25日・26日の2日間、こころの未来 脳科学集中レクチャー2014「脳損傷からみたこころ」を、稲盛財団記念館大会議室にて開催した。講師に森悦朗先生(東北大学大学院医学系研究科教授)をお迎えし、神経心理学の基礎から最新の脳画像研究についての知見までを網羅した内容で講義をお願いした。2日間にわたる集中講義では、言葉の障害である失語症や、記憶の障害である健忘症候群など、脳の損傷がもたらす心理過程の障害についての基礎知識を、最新の研究成果を交えながらお話いただいた。また、人間の脳を研究する方法として、神経心理学が最も長い歴史をもつことなど、多岐にわたる研究の背景・動向などもご紹介いただき、参加者にとって実りあるレクチャーになったと考えられる。



(3) fMRI解析セミナー

2015年2月26日・27日の2日間、

fMRI解析セミナー「resting-state fMRI」を稲盛財団記念館大会議室にて開催した。講師には、河内山隆紀先生(株式会社ATR-Promotions、脳活動イメージングセンタ)をお迎えし、安静時脳活動の画像解析のスキル獲得を目的とした講義及び実習を行った。講義では解析法の背景にある理論についての理解を深め、実習では参加者それぞれが持参したPCを用いて、自ら手を動かしながら実際のデータを解析した。安静時脳活動の解析は近年注目を集めている研究手法の1つであり、参加者にとっては先端的な画像解析の手法に習熟するための貴重なセミナーになったと考えられる。



■今後の展望

こころの未来研究センターに設置されたMRI装置は、文系・理系の研究者が学問分野の垣根を超えて「こころ」に関する研究を行う環境を提供している。学際融合的な研究を推進する上では、研究成果の発信のみならず、教育における有効利用もきわめて重要である。来年度以降も、本年度に実施した研究事業を継続的に実施することで、認知神経科学に関わる若手研究者に、最先端の知識及び技術獲得の機会を提供したいと考えている。

環境要因が潜在的認知に及ぼす影響

上田祥行 (京都大学こころの未来研究センター特定助教)

■研究の目的と方法

文化などの環境要因の違いが、視覚的注意をはじめとする視覚情報処理に影響を与えるかという問題は、まだ解決に至っていない (例えば、Masuda & Nisbett, 2001; Evans et al., 2009; Ueda & Komiya, 2012 など)。異なった主張が得られる原因の1つとして、実験で用いられる刺激や課題の複雑さがある。この複雑さが実験参加者の戦略を課題特有のものにし、再現性を低下させていると思われる。そこで本研究では、単純な視覚刺激を用いて視覚探索課題を行い、視覚情報処理に環境要因が与える影響を検討した。視覚探索課題は、妨害刺激の中からターゲットをできるだけ早く正確に探す課題であり、視覚的注意の機能の測定によく用いられる。

さらに、視覚探索課題の中でも、探索非対称性という現象に注目した。探索非対称性とは、ターゲットと妨害刺激を入れ替えたときに探索の効率が著しく変化する現象である。たとえば、円の中から線分が見ついた円を探すほうが、その逆よりも簡単にターゲットを探すことができる (図1参照)。モチベーションが高いほど、反応時間が早く、正答率が上昇するが、探索非対称性の生起にはモチベーションは影響しない。このため、探索非対称性を扱うことで、実験参加者のモチベーションや戦略を排除して、視覚情報処理に環境が与える影響について検討できる。

■実験結果

京都大学、ミンガン大学、ブリティッシュコロンビア大学の学生に、同じ刺激を用いた実験を行ったところ、北米人の参加者では短い線分の中から長い線分を探すほうが、その逆よりも早くターゲットを見つげられた (探索非対称性が見られた)。これに対し、日本人の参加者ではどちらの探索も同じく

らの成績であった (探索非対称性は見られなかった)。刺激の密度や長さを変化させても、同様の文化差が見られた。また、円の中から線つきの円を探す探索、垂直線分の中から傾いた線分を探す探索、およびこれらのターゲットと妨害刺激を入れ替えた刺激で実験を行った (図1参照) と、円と線つきの円を用いた探索で

は、北米人の参加者は大きな探索非対称性を示し、垂直線分と傾いた線分を用いた探索では、日本人の参加者は大きな探索非対称性を示した。線分の傾きは脳の初期視覚野V1で主に処理されているのに対し、線分の有無や長さなどはV2以上の視覚野で処理される (Freeman et al., 2013; Rensink & Enns, 1995)。これを踏まえると、V2以上の視覚野が関与する線分の長さ探索や円と線つきの円の探索では北米人で非対称性が大きくなり、V1が関与する傾きの探索では日本人で非対称性が大きくなったと考えられる。

続く実験では、探索非対称性の大きさが初期視覚野の処理を反映している可能性を検討するために、探索非対称性を示す複数の刺激セットを用意し、その大きさの一貫性を測定した。探索非対称性の大きさが初期視覚野の処理を反映していれば、同じ領域で処理される特徴を持つ刺激セット間では、同

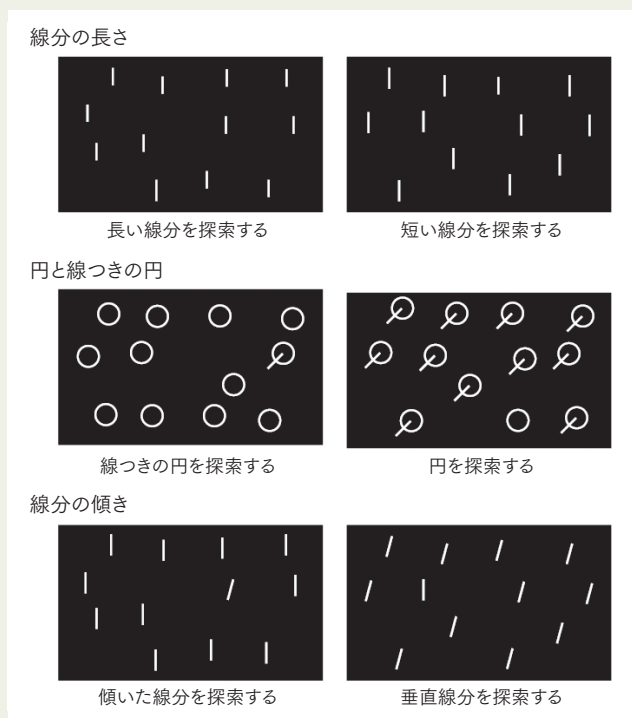


図1 探索非対称性を示す刺激セットの例

それぞれ左側に示した探索のほうが右側に示した探索よりも容易である。

じ程度の探索非対称性が見られると予想される。実験の結果、同じ領域で処理される特徴を持つ刺激セットは同程度の探索非対称性を示した。

■今後の課題

線や円といった単純な刺激を用いた課題でも、視覚情報処理が環境要因の影響を受けていることが示された。しかし、具体的に環境の中の何が我々の視覚情報処理を変容させたのかは明らかではない。Miyamoto et al. (2006) や Ueda & Komiya (2012) では、普段目にする風景が、異なった注意の処理を引き起こす可能性が示されている。そのため、目にする文字や人工物、これらの並び方などが視覚情報処理を環境特有のものにしているかもしれない。今後は、風景の分析などを交えて、情報処理を変容させる具体的な要因を明らかにしていく。

研究プロジェクト

農業・漁業コミュニティにおける社会関係資本

内田由紀子(京都大学こころの未来研究センター准教授)+ 竹村幸祐(滋賀大学准教授)

■研究の目的

本研究では、地域コミュニティの特性と、住民の心理・行動傾向の関係を検証した。地域コミュニティの特性として、とくに、社会関係資本と、地域の主たる生業に注目した。本研究の目的は、以下の2つの柱にまとめられる。

1) コミュニティにおける社会関係資本の生成

これまでの研究においてわれわれは農業・漁業コミュニティにおける普及指導員の役割に注目してきた。普及指導員を対象とした調査を通じて、コミュニティの社会関係資本(たとえば、会員同士の信頼関係)に普及指導員が及ぼす影響を検討してきた。本研究では、普及指導員に加えて、農業・漁業コミュニティの会員を対象とした調査を実施することで、農業者・漁業者の視点から社会関係資本に普及活動が及ぼす影響を検討することを目的とした。

2) 地域コミュニティの生業と住民の心理・行動傾向

地域コミュニティと一口に言っても、実際にはそのあり方は多様である。本研究では、過去の文化心理学の知見に立脚しつつ、地域コミュニティの主たる生業が、そのコミュニティの社会関係や住民の心理・行動に影響するメカニズムの解明を目指した。

■調査の実施とこれまでの知見

上述の目的に向け、調査(前年度実施)データの整理・結合・分析、ならびに、既存のアーカイブデータ(たとえば国勢調査データ)との結合を行った。加えて、地域コミュニティでの聞き取り・フィールド調査を実施した。主たる知見は以下のとおりである。

調査1: 農業者グループ・漁業者グループのリーダーおよび担当普及指導員の調査

近畿・中国・四国を中心としたエリ

アの農業者グループ・漁業者グループのリーダー的立場にある人々を対象とした調査データを分析した。この調査には、グループの社会関係資本、ならびに農業者・漁業者の視点から見た普及活動の役割・効果を検討するための項目などが含まれていた。同時に、各グループを担当する普及指導員を対象とした調査も実施し、農業者・漁業者視点に加えて、普及員視点からの分析も可能とするデータベースを構築した。

調査1のこれまでの分析(農業者グループのデータを中心とした分析)から、普及指導員が社会関係の「コーディネーター」としての機能を担っており、農業者同士の信頼関係に影響を持っていることが示された。主な知見を挙げると、第一に、農業者グループ内の信頼関係を高めやすい普及指導員は、「決断力がある」「将来に向けてのビジョンを提言する」「問題解決又は目標達成のために必要な取組を、順序立てて企画する」「周囲と連携してチームワークを形成する」などの特徴を持っていた。第二に、グループの状態(たとえば、メンバーの相互扶助の程度)について、グループのリーダーと担当普及員が一致した認識を持っているときに、グループ内の信頼関係が高まりやすかった。第三に、リーダーと担当普及員の認識が一致しやすいのは、担当普及員のキャリア年数が高いときや、リーダーの年齢が高いとき、また、リーダーがグループの外とも積極的に関わっているときであることが示された。

調査2: 農業地域・漁業地域住民を対象とした郵送調査

近畿・中国・四国・東海地方の一部を対象地域として、そこから無作為抽出された412集落で実施された郵送調査データを分析した。分析では、住民1人1人の生業(とくに、農業と漁業)の影響に注目すると同時に、地域コミ

ュニティ(集落)で農業・漁業がどれだけ盛んに行われているかにも注目した。ここでは、住民の心理傾向、とくに、「相互協調性」への影響を主に検討した。相互協調性はこれまでの比較文化研究で、欧米より東アジアで強く見られることが示されてきた心理傾向である。

分析の結果、農業・漁業といった生業が、個人の心理傾向に影響していることが示された。ただし、農業と漁業では、その影響の在り方に違いが見られた。農業の場合、個人が農業を営んでいるかどうかの影響を超えて、地域コミュニティ内で農業が盛んであるときに、相互協調性が促進される、という効果が見られた。一方漁業は、地域コミュニティのレベルでの影響は見られなかった。代わりに、個人が漁業を営んでいるときに、自尊心とリスク回避傾向がともに高まっていた。さらなる分析の結果、農業と漁業で影響の在り方が異なる原因のひとつとして、コミュニティ内の社会関係の特徴が挙げられることが示された。農業が盛んなコミュニティでは、農業者だけではなく、非農業者も様々な集合活動(たとえば年中行事)に参加するようになり、このことが、農業者だけでなく非農業者の相互協調性を促進させていた。

以上の知見は、生業によってコミュニティ内部に形成される社会関係の在り方が変化してくること、また、それによって、住民の心理傾向にも違いが生じることを示している。

地域の幸福プロジェクト（上廣こころ学研究部門 幸福感の総合研究）

内田由紀子（京都大学こころの未来研究センター准教授）+ 福島慎太郎（青山学院大学助教）

■はじめに

日本社会の幸福においては、他者や地域との関係性が主要な役割を果たすことが理論的・実証的に示されている（Hitokoto & Uchida, 2014; Uchida & Ogihara, 2012）。そして、周囲の他者との協調により実現される幸福を捉える際には、独立した個人を前提とした「個人単位の幸福」だけではなく、他者との関係や集団・地域に存在する「集団・地域単位の幸福」が重要な意味を持つ（Uchida, Ogihara, & Fukushima, 2015）。

本プロジェクトでは、主観的幸福が個人を超えて地域を単位として成立するメカニズムを探るために、A「本人が感じる幸福感（自分がどの程度幸せだと感じるか）が地域住民の幸福に対する認知（地域住民がどの程度幸せを感じていると思うか）と不可分になっている」という個人の心理プロセスが、B「住民同士の間関係が豊かな地域に居住する」ことを通じて地域単位の社会プロセスと連動して集散的に成立していることを究明するための研究活動を実施してきた。ここでは、プロジェクトの2つの研究活動の柱であるI. 質問紙調査とII. フィールド調査から得られた知見の概略を紹介したい。

■調査方法と結果

I. 質問紙調査

方法：本プロジェクトでは、2013年度に近畿地方・中国地方・四国地方における412の地域コミュニティ群を対象として質問紙を配布し、計7,295人から有効回答を得た。2014年度は、質問紙から得られたデータを整備し、分析を実施した。質問紙には、個人の主観的幸福感とともに、地域住民の幸福度に対する認知をたずねる項目ならびに社会関係資本に関する項目を設けた。この他、個人の基本属性に関する

項目（性別、年齢、居住年数、最終学歴、世帯収入、婚姻状態）を尋ねた。

結果：本人の幸福度と地域住民の幸福度に対する認知との相関分析の結果、同じ町内（集落）に住む地域住民の幸福度が高いと認知している人は、本人の幸福度も高いという現象が示され、主観的な幸福は、地域住民の幸福に対する認知と関連していることを確認した。

続いて、この「地域内の他者の幸福に対する認知」と「自分の幸福」が連動する状態を促進させる要因（個人要因ならびに地域要因）を検証するためにマルチレベル分析を実施した。その結果、個人の基本属性（性別、年齢、居住年数、学歴、所得、婚姻状態）や集団・地域の基本属性（人口密度、農業者比率、漁業者比率）は要因として関与していなかった。一方で、住民間に形成された社会関係資本が密な地域に居住することで、地域住民の幸福と自らの幸福が連動するような心理状態は生じやすい、という知見を得た。

II. フィールド調査

[滋賀県世継集落におけるフィールド調査]

本プロジェクトでは、2013年4月より、定期的に滋賀県世継集落の農業組合役員会に参加してきた。そして、農地だけでなく集落共有資源の維持・管理を含めた「農村」「コミュニティ」をどのようにして継承していくか、という議題に関する体制づくりならびに枠組みの構築を行う意思決定の場に、農業集落のコーディネーターとしての役割を果たす農業普及指導員（内田・竹村, 2014）とともに参加してきた。

2014年度は、あらたに農家ならびに土地持ち非農家で構成される農業組合の会員だけでなく、広く集落住民を取り込んだ「世継農用地保全検討委員会」を発足するためのルール構築を行う場

に立ち会った。また、世継集落における農業との触れ合いならびに農家・非農家との定期的な交流を目的とした農業収穫祭の企画に携わった。

これら一連の社会活動に参加することを通して、集落外部の人（農業普及指導員など）による再評価や枠組み構築の場への参画が、住民の役割や関係性、ならびに住民1人1人の認知・行動の枠組みや制度そのものを徐々に変容させ、時代の要請に応じた地域の幸福を達成する要となっていることを確認した。

[近畿・中国・四国地方の農村・漁村フィールド調査]

2014年度は、京都府の4つの漁村、ならびに香川県の2つの農村を訪問した。京都府の漁村においては、主産業である定置網漁における資源の共同管理という資源管理特性と相まって、運命共同体としての集落特性があることが確認された。それに伴い漁業者リーダーの特性として、定置網漁や延縄漁に携わる従業員を集団としてまとめると同時に、組織の経営を担う役割を果たしていた。また、香川県における農村は、古くから近隣の愛媛県や岡山県と同時に、ため池用水の水源地域である高知県や徳島県とも密なかかわりを有してきた地域であり、農業普及指導員の外向性や農村における外国人従業者の受け入れを開放的に行っていた。

これらの農村・漁村の比較検討から、地域の幸福を捉える際には、個人や社会の特性と同時に、それを取り巻く地理的特性、生業や地域風土、そして地域の歴史に根付いて形成されてきた地域文化との関わり合いの中で総合的に捉える必要性を感じた。

研究プロジェクト

組織文化とこころのあり方：日本における企業調査

内田由紀子（京都大学こころの未来研究センター准教授）

■研究の目的

企業従業者の心のあり方については、職場におけるソーシャル・キャピタル研究や、社会階層と健康についての疫学的知見などから、検討が行われてきた。一方で従業員のメンタルヘルスとそれを支える組織の風土についての検証は十分ではない。大きく変化しつつある日本社会の行く末を考えるにあたり、グローバル化する組織文化と伝統的な日本文化との相克を検討することは、現代日本社会における喫緊の課題である。

本研究の目的は文化の多層性に焦点を当て、日本文化における社会関係の基盤を解明することにある。その際、第1層としての「日本文化」と、第2層としての「組織文化」に着目する。他者との協調的な関係が幸福の主要な源であるとされてきた日本において、(1) 第2層（組織レベル）の文化間に見られる共通性と差異及び第1層と第2層の間に生じる相克を検証、(2) 個人レベルの要因（社会関係の認知等）とマクロレベルの要因（組織風土）を同時に分析、文化が心の働きに影響を与えるメカニズムを精査する。これらを通じて日本の企業内でどのような社会関係が幸福をもたらすのかを明らかにし、心の健康と安寧促進に資する知見を提示すると同時に、社会科学における新たな理論展開を目指す。

協調的な他者との関わりが幸福感に寄与する、というこれまで日本で一般化されてきた特性が、日本文化の第1層全体で共有されているのか、あるいはとくに日本型企業など、移動が少なく分配と協力が求められるところにおいて強く見られる特性なのかを検証することにより、大小分類なく「文化」と一括りにされてきた国・地域・企業組織などのうち、いずれが心理的に影響をもたらす文化の範囲として有効な

のかを明らかにする。日本の第1層の文化が持つ価値観（たとえば相互協調性）と第2層の文化が持つ価値観（たとえば企業が推進する個人主義）が不一致である場合に、そこに生きる人が経験する心理的相克の検証も行う。

調査参画企業を幅広く、そして数十社集めることにより、これまでの産業メンタルヘルスや疫学調査で主に検証されてきた「個人レベルの要因（たとえば社会関係や賃金など）」だけではなく「マクロレベルの要因（たとえば企業の中の階層構造や企業サイズ、成果主義の導入有無などの企業要因）」を同時に扱い、マルチレベル分析を用いて実証的に従業員の幸福に資する要件を同定、「人が育つ組織」とはどのようなものであるかを検証する試みである。

そこで、関西（主に京都府、兵庫県）と四国（高知県）の様々な企業に協力を仰ぎ、調査を実施する。組織（企業）ごとに内部で共有されている文化（「第2層の文化」）が、従業員の対人関係と幸福感にどのように関わっているのかを明らかにする。

■研究の方法

1) 聞き取り調査の実施ならびに研究会の実施

NPO法人ミラツクならびに株式会社ウエダ本社と協力し、「人が育つ組織」研究会を実施、企業の育つ力向上に向けた取り組みを産学連携して実施した。研究会は当初2回をオープン型セミナー形式とし、何が「人が育つ組織」のキーワードとなっているのかを参加者とともに検討、その後はクローズドディスカッションを行い、様々なタイプの企業へのインタビュー調査などを通して、現代日本社会における企業組織の類型化とそれぞれに対応した形への「人の育ち方」について検討を行った。研究会の経緯は上の表のとおりである。

人が育つ組織研究会の概要

第1回 2014.5.27 オープン形式	講演：小田理一郎（チェンジエージェント）鼎談：太刀川英輔・内田由紀子他 キーワード：学習する組織、組織システムと個人の相互発展、組織並びに個々の主体性、つながりへの先行投資、多様性
第2回 2014.7.10 オープン形式	講演：大屋智浩（富士通総研）鼎談：太刀川英輔・内田由紀子他 キーワード：暗黙知と形式知の創造、SECIモデル、実践の場としての職場、主体性
第3回 2014.8.7 クローズドディスカッション	キーワード：経営者と従業員のズレ、組織と個人のマッチング、組織の成長のあり方、組織の物語と個人の物語、場の可塑性、人が育つ組織のはかり方、組織風土の類型
第4回 2014.9.19 クローズドディスカッション	関西A社（製造業、従業員数60名）へのインタビュー調査結果の共有 キーワード：組織規模と「人の育ち方」の関連、主体的意思決定とその他らしさの肯定、マクロ風土・制度とマイクロ個人半判断のリンク、企業風土の内在化プロセス、年功序列 vs. 成果主義
第5回 2014.11.21 クローズドディスカッション	関西B社（製造業、従業員数3000名）へのインタビュー調査結果の共有 キーワード：リーダーのマネージメント、モチベーションの高め方（表彰制度）、研修プロセス、人事機能と「つながり」の育成
第6回 2015.1.29 クローズドディスカッション	関西C社（製造業、グローバル大企業）へのインタビュー結果調査結果の共有 キーワード：中途採用者など組織の流動性、合併等組織文化の変化への対応、社外との連携、企業成長モデルによる類型可能性（個人中心-会社中心の軸、社会関係資本高低の軸）
第7回 2015.3.9 クローズドディスカッション	類型モデルの精査 個人の自立・主体性-会社への依存の軸、社会関係資本の高低の軸による2次元モデルの作成。自立性が高くても社会関係資本が低ければ成果主義のみの個人商店化が起こりがち。一方で自立性が低く高社会関係資本になると、村的コミュニティとなり、創造性に乏しくなる。どのようにして個人の主体的意思決定とコミットメントを担保させながら社会関係資本を高く保てるかを問うモデル。

2) 調査

調査1：京都府、兵庫県、高知県での企業従業員各150名、合計450名へのウェブ調査を実施。組織内のつながりのあり方や、仕事上の満足度、企業風土について尋ねた。現在分析中である。調査2：京都経済同友会、土佐経済同友会の協力のもと、組織風土と幸福に関する組織単位での調査を実施。最終目標は各地域15社から20社で実施し、マルチレベル分析を実施する予定である。平成26年度は2社での先行調査を実施。幸福感と職場でのつながり、思考様式、企業内の組織風土や職場環境、職場内の制度などの文化・環境因子を企業毎に調査し、参加企業にはフィードバックを行って行く。マネージメント層と一般従業員での企業理念の浸透度や互いへの理解の一致度なども調査していく予定である。

こころ観の研究

鎌田東二（京都大学こころの未来研究センター教授、現上智大学グリーンケア研究所特任教授）

■「こころの荒廃」の突破口としての「身心変容技法」

本プロジェクトの目的は、今日の社会が抱え込んでいる「こころの荒廃」の問題から抜け出す道を探るため、学問や芸能に蓄積され伝えられてきた宗教的リソース（技術と知恵）に着目し、現代の学術的・社会的文脈の可能性を開くことにある。これまで鎌田研究室では、多様な思想的バックグラウンドにおける「こころ」の捉え方を整理し、「こころ観」の俯瞰的な地図の作成に取り組んできた。それと並行して、さまざまな芸道や宗教的伝統が培ってきた修行・修養・変容の技法を「身心変容技法」として捉え直し、神秘思想における瞑想、仏教における止観や禅や密教の瞑想、修験道の奥駆けや峰入り、滝行、合気道や気功や太極拳などにわたり、さまざまな実践の諸相（特色）と構造（文法）を明らかにしてきた。前年度はここに神経科学的手法を導入したが、2014年度は、これまで重ねてきた思想研究とフィールド調査、神経科学的手法を活かし、理論的研究と実証的研究を対話させながら、各々の宗教的伝統における根源的な「こころの変容」を解明した。

■研究会の概要

宗教的实践における「こころ」、および言語学における「こころ」の諸相を明らかにすることを目標として、定期的にさまざまな分野の研究者・実践家を招き内部研究会を開いた。

棚次正和氏（京都府立医科大学教授・宗教哲学）を招いた研究会では、「ベルクソン哲学」を補助線として活用することによって、心身問題を決して「心脳問題」に矮小化し還元してしまうことなく、「魂の死後存続」や「身体からの魂の独立」の問題をも視野に入れ議論する必要性が論じられた。棚次氏は、

人間存在が「死の不可避性」＝身体的次元と「不死性」＝霊の次元の両面に同時にまたがっている事態をトータルに考え、「人は死ぬ（Man is mortal.）」が「人は死なない（Man is immortal.）」という一見相矛盾する二つの命題を統一的に理解しうる視点を再獲得しようと問題提起した。この観点は、現代の死生観、宗教観を広く問い直し、生活感覚から導き出される生身に生きられた素朴な生命倫理を医療現場に還元する重要な参照点となるであろう。

能楽師（ワキ方）の安田登氏を招いた研究会では、舞の実践家の立場から身心変容技法研究という課題へのアプローチをうかがうことができた。ワキは「分く」という言葉を語源としており、能ではワキだけが「幽霊」と出会うことができると言われている。ワキは、生者でもなく、死者でもなく、媒介である。つまりそれは「見せる存在」である。また、ワキとは、特に行き方定めぬ旅人である。その土地の自然物と交感し、気が付くと時間が変わり「今は昔」になっている。社会生活においては、少なくともある一定の限りにおいて、決まりきった枠組みで生きることが否応なく迫られる。そのような中で、ワキ方の旅人的な時間、漂流し、あるがままの自然と出会い、木や花と歌を歌う在り様は、大切な生の側面に思い至らせてくれるだろう。一連の論考に続き、安田氏は「夢十夜」の「第三夜」の語りの実演を行った。バイオリンと石笛・能管・横笛が囃子方として、身心変容の実践を見せてくれた。

■シンポジウム

身心変容技法研究の成果報告として、2014年11月には二日間にわたり「大荒行シンポジウム」を行った。1日目のシンポジウムでは、大学関係者の



大荒行シンポジウムポスター

みならず一般市民の関心を集め、立ち見を含め170名ほどの参加を得た。田中利典氏（大峯金峯山修験本宗宗務総長・金峯山寺執行長）、星野尚文氏（本名：文紘、羽黒修験道松聖・所司役）、高木亮英氏（西国三十三所一番札所那智山青岸渡寺副住職）、戸田日農氏（日蓮宗大荒行堂遠壽院住職・傳師）という「修験道」に身を置いている行者たちを招聘し、具体的な行の実践と問題点、可能性を明らかにした。報告を受け、指定討論者である倉島哲氏（関西学院大学教授／社会学）は行における「垂直軸」と「水平軸」を設定し、「聖」と「俗」との分かち難い関わりを解きほぐすきっかけを提案した。これらの議論によって、荒行がもつ現代的意義や可能性、学術的考察への道が開かれた。2日目のシンポジウムでは、吉野修験道、羽黒修験道、日蓮宗の荒行の行者を招き、それぞれの実践における技法と、身心の変容過程について、研究者たちとのディスカッションを通じて考察を深めた。修験道は、神道、仏教、道教、シャーマニズム、祭祀、民間信仰等、複数の要素を組み込みながら、総合化している1つの一大曼荼羅のような世界である。その学術的な考察を、行者の方々の実践感覚にぶつけ、新たに議論を開くことの重要性和可能性が示された。

研究プロジェクト

こころとモノをつなぐワザの研究

—— 伝統芸能・武道における心技体の研究を中心に

鎌田東二 (京都大学こころの未来研究センター教授、現上智大学グリーンケア研究所特任教授)

■ワザ学

「ワザ (技・業・術)」とは、物の世界に形を与え、人間世界に広がりや深みをもたらすことを可能にする、こころと物との媒介通路を意味する。人間はこれまでに、呼吸法や瞑想法などを含む身体技法や各種の芸能・芸術の技法やコミュニケーション技術など、実に多様で豊かなワザを創造、継承、改変してきた。現代の生活は、豊かな物に囲まれ非常に便利になっているが、生活感が満たされ豊かであるとは言い難い面が少なくない。そこで、古来伝わってきた様々なワザに着目し、文献を通じた理論的観点と、実演を介した実践的観点とを交えつつ、人間のこころと物や道具、観念世界などとの相互関係を結び直すことで、「物は豊かだがこころは貧しい」と言われる今日に、こころと物とのつながりを取り戻し、生の豊かさを切り拓く道を模索する。

■世阿弥研究会

観世流能楽師河村博重氏を交え、毎月2回、世阿弥『風姿花伝』に添い、ワザを言葉によって読み解くことを目標としている。身体的活動を言葉によって表現するための語彙・文体を取り出すことができれば、達人の芸術的・

宗教的境地を、一般的な教育の活動へと取り入れることが可能となる。世阿弥の知恵は、能という1つの活動の枠を越えて、今日における身体活動全般にとって、また日本の思想にとっても重要な参照点と捉えられる。

■国際会議・ワークショップ参加

奥井遼研究員は、国際会議 IHSRC (The 33rd International Human Science Research Conference、於・聖フランシス・ザビエル大学、カナダ、8月) および事前ワークショップ Phenomenology of Practice に出席し、研究成果を発表することで、海外における先端的な研究者と交流し、国際的な視野で研鑽を積んだ。

また、フランスより「身体の哲学」のパイオニアであるベルナル・アンドリュウ (Bernard Andrieu) ルーアン大学スポーツ学部教授をお招きし、国際会議「1st Research Meeting of Philosophy of the Body: Dialogue between French and Japanese tradition of bodily performance」を開催した。講演は刺激的で、多方面から議論が展開された。基本的な立場としては、神経科学の成果を哲学に取り入れようとするもので、フッサールやメルロ＝ポンティといった、心理学の成果を取り入れた初期の現象学者たちのスタイルを引き継ぐものである。ただ、サーカス団員の体感目線を撮影し、身体的行為の現れを捉えるべく哲学的考察に活かすなど、思索の手法には非常に画期的であった。当分野の研究者を招くのはおそらく初めての機会であり、この機会は日仏の研究者の交流、発展を促すきっかけになったと考えられる。



フォーラム「ワザとこころ 能の伝承〜稽古と修行と教育」のちらし

■一般公開シンポジウム

2015年1月には、こころを整えるフォーラム「ワザとこころ 能の伝承〜稽古と修行と教育」を観世能楽堂において開催した。世阿弥は『風姿花伝』「第一年来稽古條々」で、能役者の成長過程を7期に分け、それぞれの段階の特徴と課題と芸境を明確に示している。

当日は、観世清河寿、観世三郎太郎氏をお招きし、芸事を引き継ぐ「家」に生まれ「学び」(真似び)を重ねる在り様を尋ね、教育学者西平直氏 (京都大学教育学研究科教授) と心理学者で臨床心理士である河合俊雄氏 (こころの未来研究センター教授) とともに、このような伝統的「稽古」や能楽修行の問題を現代の教育につなげ、比較・検討する道筋を再考した。続いて、舞囃子の実演が行われ、稽古哲学が培う伝統のワザを鑑賞することができた。

当日は150名前後の一般市民の参加を得て、大きな反響を呼んだ。

開催	テキスト	キーワード
4月	『風姿花伝』第三問條々	花陰・陽序破急
4-5月	第四神儀云	申楽神代の始まり 秦河勝
5-7月	第五奥儀讀歎云	寿福増長の基 退齡延年
9-11月	第六花修云	音曲風情言葉
12-3月	第七別紙口伝	花面白き 珍しき 似せぬ位

世阿弥研究会の活動

生態智の拠点としての聖地文化——こころ・場所・癒しの研究

鎌田東二（京都大学こころの未来研究センター教授、現上智大学グリーンケア研究所特任教授）

■癒し空間の特色

これまでの研究では、(1)こころ観の思想的・比較文化論的基礎研究、(2)負の感情研究——怨霊から嫉妬まで、および(3)癒し空間についての研究を行ってきた。2014年度は、現代社会の「こころ」をめぐる諸問題を打破するさらなる突破口を模索するために、「場所に宿るこころ」という観点を導入し、調査を行った。西田哲学の「場」の理論や「拡張された心」理論が述べるように、「こころ」はモノや場所との関わりの中でつねに移ろいながら想起され、人間が生きる場自体に映し出され続けるものである。本研究では、寺社や聖地などの「癒し空間」、負の感情を昇華させる装置としての「祭」などに蓄積されている「場所の記憶」や「場所の力」を、宗教学的・哲学的・芸術的・社会学的観点から多角的に分析する。そして、「場所」において立ち現れる「こころ」の諸相を呈示し、社会生活のなかに記憶・感情・崇高さを想起させる場の特色と、その心的メカニズムに光を当てる。

■フィールド調査、学部生向け教育 フィールドワーク

◎フィールド調査

①第7回東北被災地追跡調査：2014年4月29日～5月3日

②第1回芦生原生林調査：2014年11月4日～5日

原生林には、太古より人間が触れ合い人間となってきた音や匂いや感覚が息づいている。そのような環境に現代人が身を置くことで、身心はどのように変化し、何が生まれるのか。本調査では、その問いを深めていききっかけとして、人間のこころに生じる宗教性と芸術性の関連という観点を得た。

③春日大社おん祭調査：2014年12月17日

「1156年に起こった保元の乱以後、『おん祭』はまさに『乱世』を鎮める祭りとして斎行されてきた。若宮を鎮撫するその神楽・芸能の奉納は、実に美しく絢爛豪華でありパワフルである。とりわけ、深更、100人近くの榊を手にした白衣姿の神職に囲まれて若宮神の御神体が『オーッ！ オーッ！』と野太い警畢の声に護られるように動座していくさまは圧巻である。(手記より)」

古より伝え奉じられている神話的時間は、人間のなかの力強い野生の感覚に訴え、洗練された貴族文化と荒々しい野生の文化の融合を見せてくれる。それは、神道の聖地と祭祀の一つの原型であり、現代の生の在り様を捉え直す手がかりとなる。

④第4回羽黒修験道「松例祭」調査：2014年12月30日～1月1日

⑤天河大辨財天社例大祭・鬼の宿・節分祭・立春祭調査：2015年2月2日～4日

◎久高島研究フィールドワーク(京都大学学部1回生対象)

日時 2014年9月12日-16日

調査地 沖縄県久高島

参加者 京都大学学部1回生9名、TA2名

概要 学部1回生への教育活動の一環として、久高島への5泊のフィールドワークを開催した。久高島では、島の聖地を自分たちの足で歩き、また島の人たちに話を聞くことによって、「神の島久高島」の来歴と現状、および可能性を深く掘り下げることができた。また、9月14日の日曜日は、島の子どもたちと共に「久高大運動会」に参加し、大いに盛り上がりを見せた。伝統が色濃く息づく島でフィールドワークを行った上で、島民のイベントとともに全力投球することで、久高島の神々の歴史と現在の生活とが自ら融合され、島の時間を奥行きと立体感をもって体感することができた。運動会では前日と



当日の朝の準備から手伝い、最初の行進・開会式から最後の閉会式までフル参加し、一部の競技では学生が大活躍した。

■京都大学学際研究着想コンテスト 最優秀賞受賞

「人はなぜ、森で感動するのか」をテーマとした学際的研究案が、「京都大学学際研究着想コンテスト」において最優秀賞を受賞した。伊勢武史氏（フィールド科学教育研究センター）、銅金裕司氏（京都造形芸術大学）、小松正史氏（京都精華大学）と共に、宗教・芸術・音楽という感覚を人間が獲得した意味を探るアイデアである。人間が森を心地よく感じ、愛しく敬う感覚は宗教やアートの源と言える。今回は着想のかたちで提示したが、この延長に森で感動が起こるメカニズムを探ることは、現代人が自然の一員として生きる在り様につながると考えられる。



研究プロジェクト

東日本大震災関連プロジェクト——こころの再生に向けて

鎌田東二（京都大学こころの未来研究センター教授、現上智大学グリーンケア研究所特任教授）

2011年3月11日、東日本大震災という未曾有の事態が発生し、日本における価値観、社会関係のあり方は、被災地に留まらずその他の地域においても変化した。本研究プロジェクトは、東日本大震災関連プロジェクトとして、宗教学・民俗学・心理学の学際的アプローチから、こころの再生に寄り添い、より良い生のかたちに向けて調査・検討を行うことを目的としている。

■本プロジェクトのアプローチ

本プロジェクトでは、「震災後の宗教の動向と世直しの思想と実践の研究」を研究題目とし、東北大学の鈴木岩弓氏が事務局の「心の相談室」、島藺進氏が代表の「宗教者災害支援連絡会」、稲葉圭信氏が共同代表の「宗教者災害支援ネットワーク」などとの連携を保ちながら調査を行っている。より具体的な視点は、①伝統文化のワザ（瞑想・武道・気功など）を活用したメンタルヘルスケア、②伝統文化および民俗芸能・芸術、聖地文化・癒し空間を活用した復興と再生、③脱原発社会の社会デザインの在り様である。前年の調査では、被災地に鎮座している神社が、東北地方に独特の宗教的風土を醸し出し、襲来する自然災害に対する防災・安心・安全装置として機能していることが明らかとなった。今日では、生活から培い出されてきた宗教的「世直し」思想と実践事例を解明し、日本文明の位置とあり方を問い直すことが大きな課題となっている。そこで2014年度は、伝統文化の継承と活用、自然と人間と文明との関係の中での「生態智」の再評価と再構築、安らぎや浄化をもたらす「癒し空間」の活かし方などに焦点を当て考察した。

■フィールド調査

2014年度は、4月から5月にかけて、

須田郡司氏（写真家）とともにフィールド調査を行った。そこで明らかとなったのは、「想定外」の事態に対処してゆく術を考える際に、その土地に暮らす地域住民の声を頼りに「復興」への道筋を探る重要性である。今回は以下の日程で、福島県相馬から青森八戸までを辿り、地域住民と対話するなかで、海際の復興の在り様と課題点を調査した。

1日目：4月29日 鎌田東二＋須田郡司 福島・相馬・浪江町・関上・仙台

2日目：4月30日 鎌田東二＋須田郡司 仙台・荒浜・七ヶ浜・塩竈神社・石巻・女川・熊野神社・釣石神社・雄勝町・葉山神社

3日目：5月1日 鎌田東二＋須田郡司 雄勝・陸前階上・気仙沼・大島

4日目：5月2日 鎌田東二＋須田郡司 気仙沼・大船渡・陸前高田・釜石・大槌町・宮古

5日目：5月3日 鎌田東二＋須田郡司 宮古・田老町・野田村・久慈・八戸
地域住民とともに公民館などに集まり、手仕事や作業の時間をともにすることで、現地に暮らす人々の直近の生活における必要事項と、国や県の対策とがすれ違う問題が明らかとなり、改めて今その間をつなぐ研究・調査の必要性が感じられる。

■シンポジウム

研究会の成果報告として、「東日本大震災関連プロジェクト——こころの再生に向けて」第5回シンポジウム（2014年7月22日）を行った。「震災後の自然と社会」をテーマに基調講演を受け、震災後の被災地復興に向け、「いのちの循環」を断ち切らない持続可能なコミュニティを模索した。田中克氏（京都大学名誉教授・森里海連環学）は「震災後の自然環境の変化」について、国や県が津波対策案とする巨大な防波堤

設置案に対し、地域住民や研究者より、①景観破壊、②生態系破壊、③コミュニティ破壊の3点より、反対意見が寄せられていることを指摘し、海と陸との生活の循環と連環の重要性を訴えた。また、草島進一氏（山形県議会議員・羽黒山伏）は、「震災後の社会と持続可能な未来」をテーマに、地域住民の実生活に添った「復興」の在り様と、少子高齢化社会が進行する現状に則した問題解決の在り様を提起した。

■展示活動&フォーラム

2015年3月には、北野天満宮において「悲とアニマ——モノ学・感覚価値研究会」展を開催し、自然に根差したアニミズムの感覚に特徴づけられる「日本的感性」の今日的意味を表現した。活動には、東日本大震災における「悲」を「アニマ（靈魂・靈性）」に触れることにより生きる力に変えようとの願いが込められており、そうした企画意図に関わる芸術作品を展示した。

また、震災4年目にあたる3月11日には、天満宮境内において鎮魂茶会を開催し、夕方6時より、やなぎみわ氏（京都造形芸術大学教授・現代芸術作家）の移動舞台上で、河村博重氏（能楽師）とコラボレーションするかたちで鎮魂舞台を上演した。寒空の下多くの関係者、市民の方々の参加を得、4年前の惨事に身を寄せながら、鎮魂の祈りを奉納した。展示期間には、「悲とアニマ」展公開シンポジウムを2回開催し、研究者とアーティストの交流の場を開くとともに、宗教・芸術に関心のある一般市民の多くの参加を得て、現代社会における宗教性・芸術性を問い直す機会となった。

こころの古層と現代の意識

河合俊雄 (京都大学こころの未来研究センター教授)

■ 研究目的

本プロジェクトは、現代人のもつ隠れた素地としての「こころの古層」と、時代に応じて移り変わる「現代の意識」という2つの視点から日本人のこころの特性について検討を行うものである。こころの古層研究では、日本古代の存在様式を探る人類学、さらにはそれを精緻化したと考えられる仏教思想、その後の文学作品等を素材に研究を進めるが、これらは単に歴史的な観点から検討されるのではなく、まさに現在、現代の意識の基盤としての働きを捉えようとするものである。また、現代の意識研究では、ユングの『赤の書』、村上春樹に代表される現代の文学作品、心理療法事例や心理学的調査研究、あるいは震災後のこころのケア活動の中で見出された知見等を素材とする。そして、現代においてどのようにこころの古層への通路が開くかという契機について検討するとともに、いにしへのこころが現代を生きる我々に与えてくれる生き方のヒントやヴィジョンを見いだしていくことを目指している。

■ 平成26年度の研究成果

i. こころの古層を探る

平成26年度には、こころの未来研究センター准教授の熊谷誠慈氏の発表「仏教はこころをどうとらえてきたか——存在論的・認識論的観点から」をもとに議論を深めた。河合俊雄が『ユング心理学と仏教』などの著書を通じ、仏教思想をベースに心理療法論を深めているように、日本の心理療法を考える際には仏教的思想は切り離すことができないものである。たとえば、negativityのとらえ方について、心理学では欲求や欲望などの“煩惱”を自我の機能を強めるものとして重要なものとみなすが、仏教は逆である。また、仏教の認識論においてこころは緻密に

細分化されて捉えられてきたにもかかわらず、精神分析で中核的に扱われる「罪悪感」というカテゴリーはみられない等、興味深い相違がみられる。しかしながら、ユングの前期思想においては自我を中心に立てているために自我／自己、意識／無意識とこころが二世界的に捉えられるいっぽう、ユングの後期の思想においてはほとんど自我と自己の違いは見いだせないように、仏教とユング心理学が到達する地点は共通しているところがある。明恵上人と聖フランチェスコという2人の宗教上の偉人がほぼ同時代を生きていたことにも示されるように、中世における仏教の展開は、仏教がグローバル化するための素地を示してくれるものと考えられるだろう。今後は華嚴思想などを視野に入れつつ、引き続き議論を深めていきたい。

ii. 現代の意識を探る

平成26年度は、村上春樹に関するすぐれた評論で知られ、早稲田大学名誉教授・文芸評論家である加藤典洋先生をお迎えし、「世界から一人が減ること、そして、することもしないことのできる人たちのことなど」という演題で講演をしていただいた。加藤氏は、『『ないこと』がある』という事態と『『ないこと』がない』という事態の違いについて述べ、そこには言語が関わること、その地と図の反転が現代における有限性の問題を考える際に重要であることを指摘した。世界が無限であった時代において、自由はわかりやすくシンプルであったのに対し、原発事故に象徴されるように否が応でも世界の有限性をつきつけられる現代では、自由は圧力からの解放のようなシンプルなイメージで捉えられるものではない。「することもできるがしないこともできる」という猶予を含んだ状態をベースにも



The International Society for Psychology as the Discipline of Interiority第2回大会での基調講演

った、より高度な自由が実現されつつあり、そのためにさまざまな変化が起こりつつあるということが示唆された。これは、センターの大人の発達障害についてのプロジェクトで、畑中千紘助教が現代の大学生がロールシャッハ・テストにおいて不確定な反応を示すことを指摘したこととも重なり、興味深い。

その他にも、大学生の意識のあり方を捉えるために描画研究を開始した。大学生150名を対象に、対人関係と自己に関連した質問紙と、①家の絵、②その家のなかの一室、という2枚の絵を描いてもらう「室内画」を実施した。その結果、質問紙で他者への協調的な意識が高い群では、絵に「中庭」「ベランダ」などの中間領域を有意に多く描いている等の結果が得られた。これは、自分の領域を象徴する家の内側と、その外側との間に、内でも外でもあるようなマイルドな空間をイメージできることが、現代のポジティブな対人意識において大きな役割を果たしていることを示唆している。これについては、次年度により精緻な分析を行い、引き続き成果を発信していく予定である。

その他、継続的に行ってきた震災後のこころのケアの活動としての宮城県石巻市への訪問は26年度も続けられ、それらの活動の成果は国内外において発信された。

研究プロジェクト

子どもの発達障害への心理療法的アプローチ

河合俊雄 (京都大学こころの未来研究センター教授)

■研究の概要

発達障害をめぐっては、脳科学領域の研究が著しく進展しつつある今日では、それを何らかの中枢神経系の障害から生じる認知発達の問題として捉える見方が主流となっている。従来、発達障害の子どもに対して、セラピストとの遊びを通じた心理療法であるプレイセラピーが行われてきたが、こうした昨今の潮流から、発達障害の対応においてプレイセラピーの有効性を否定する立場も存在し、薬物療法と並行して具体的なスキルの獲得を目標とした療育やガイダンスが行われることが多い。その一方で、発達障害の子どもへの心理療法によるアプローチが成果をもたらすことは、多くの臨床家の実践知として確かなものであり、プレイセラピーが奏功した事例研究も多数報告されてきた。

しかしながら、具体的にプレイセラピーがどのような点で有効であり、子どもにどのような変化をもたらすことが期待できるのかについては不明なことも多く、客観的指標を用いた検討まではなされていない。発達障害への社会的関心が高まるとともに、それへの対応が急務となっている現在においては、心理療法の専門家を対象にした事例研究だけでなく、医療・教育関係者など隣接領域の専門家にも認められる客観的・実証的な形で、プレイセラピーの有効性と意義を発信していくことが重要であろう。

こうした背景から、平成22年度より発足した本プロジェクトでは、発達障害の診断を受けた子どもに対して6カ月間のプレイセラピーを行い、子どもにどのような変化が見られるのかを発達検査などの客観的・数量的指標をもとに検討してきた。その成果はすでに、学会発表、論文、書籍という形での学術発信のほか、講演会やセミナーの形

で社会に還元してきている。

また、本プロジェクトは、専門の訓練を受けたセラピストによって心理療法が実施されるため、研究そのものが実践的な発達障害への支援であるところに大きな特色と意義がある。平成26年度には、新たにインターネットを通じた研究協力者の募集を開始し、新規に12ケースの申し込みがあった。1つの事例につき6カ月という期間を要する地道な実践研究であるが、平成27年3月現在で受け入れた子どもの数は延べ28名に上っている。

■平成26年度の研究成果

他機関で発達障害という診断を受けて訪れる子どものなかには、プレイセラピーや検査の関わりを通じて見ると、発達障害とは異なるのではないと思われる子が決して少なくない。これは「発達障害」という見方がある種ブームとなって過剰診断が蔓延しているためとも考えられるが、専門家でさえも判断を誤りやすいようなグレーゾーンの子どもたちが数多く存在することの裏返しでもあるのだろう。こうした問題がある現状では、「発達障害と思われてしまう子ども」にはどのような特徴があり、真性の発達障害とはどう異なるのか、そして、そのプレイセラピーにおいて何がポイントになるのかといったことを解明することは、重要な意味をもつと思われる。そこで平成26年度に、発達障害の診断を受けた研究協力者のなかから「発達障害と見立てられない子ども」のケースを取り出し、複数事例の分析を重ね合わせることで、上記の点について考察を試みた。

その結果、発達障害と見立てられない事例は、確かに言葉の遅れや抑制のきかなさなどの発達障害に由来するとも考えられる状態像を示していた。だが、そうした特性は必ずしも発達障害

だけに特異的なものではないし、それらが比較的恒常的な発達障害の場合と異なり、家族や学校環境などの関係性の影響を受けて生じているものであると考えられた。また、「障害」の範疇ではないにしても、親との関係や担当セラピストとの関係、あるいはプレイセラピーのなかで展開される遊びにおいて、「分離の弱さ」や「狭い世界での循環・停滞」といった発達面でのアンバランスも認められた。実際に治療的進展が見られた事例においては、プレイセラピーを通して「分離」の作業が展開されていたことが見出された。こうした「分離」によって、他者と異なる「私」という中心軸が成立することで、環境に揺さぶられることが少なくなり、停滞していた言語・社会的能力の成長も生じていたと考えられた。

■今後の展開

今後もプレイセラピーの受け入れを継続し、発達障害の子どもに対する心理療法の機会を提供していく（プレイセラピーを希望される方はセンターウェブサイト「センターからの募集」欄 http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/jp/recruitment/2014/04/play_therapy.html をご覧いただきたい）。そうした実践を通じてデータの蓄積をはかり、これまで得られた知見をさらに定量的に裏付けていきたい。また、研究実践の積み重ねから、6カ月を超えてセラピーを継続した長期事例も複数得られてきた。そうした長期事例をもとに、長期的なセラピーが何をもたらすのかということ、プレイセラピーのプロセスと発達検査の検討から明らかにしたいと考えている。

終末期に対する早期支援

沖永隆子(京都大学人間・環境学研究科博士後期)+ カール・ベッカー(京都大学こころの未来研究センター教授)

■事前要望書 ACP とは

日本の超高齢者には、延命が可能となった反面、多くの延命措置が実施されるため、逆に患者や家族の望む終末期を迎えられないケースが目立つ。そこで判断能力を喪失する前に意思決定を行う必要がある。意思決定に際して、以下の4種類の論理的課題があると考えられる。

1. 患者は、望む医療やケアが受けられない。自然死がかなわない。
2. 家族は、患者に代わって医療の内容決定を突然迫られ、混乱を来す。
3. 医療者は、延命が最善なのか、誰の思いを尊重させるのか、混乱を来す。
4. 国民(納税者)は、過剰な医療に伴う医療保険料負担の増加を余儀なくされる。

患者本人の尊厳を遵守するためには、人生の終焉を見据えた人生設計や、意思決定内容の確認を包含する事前要望書・事前計画書(Advance Care Planning, 以下 ACP) がある。2014年度は、意思決定とその支援に関する大がかりなアンケート調査を試みてきた。近畿一円で行われた「終末期の生き方」という講演会において、20~80代の男女、総計1,000名以上の聴衆に対し、講演終了後にアンケート調査を実施した。本年度の研究の位置づけは、次年度の「ACPの試作化と利用の検証」に向けて、日本人の文化に即したACPの開発のための土台となる。以下、事前要望書作成に関する調査の分析結果を紹介する。

■事前要望書の調査分析

近畿在住975名の回答者は、男女はほぼ同数、平均年齢は55.5歳で、回答者の95%は自分の要望を作成しておらず、作成した人はわずか5%に留まった。実際の医療現場では、ほとんどの入院患者は事前要望書等を所有してい

ないが、本調査でも同様の結果が得られた。意思決定支援を促進させるために、この原因を今後明らかにしていく必要がある。

本調査の自由記載欄には、ほとんどの回答者が意思表示しておく必要性を強く感じる一方、実行に移していない等の記述が散見された。作成に肯定的・積極的な立場と、作成に否定的・消極的な立場の代表的な意見を以下に紹介したい。

〈作成に肯定的〉

作成したい・更新(変更)したい: 「人生の節目、たとえば誕生日や記念日などに定期的に作成したい」「気持ちの変化があればその都度定期的書き替え更新させたい」「要望をエンディングノートに書き、そのつど書き直しを行っている。70歳になったら作成したい」「満80歳になったら作成するつもり」など、具体的に何歳になったら作成したいといった記述があった。

社会への要望としては、「ACPの定形を書物にして公刊してほしい」「日本の病院で入院時に事前要望書の記入を義務化してほしい」「どの病院でも統一して記入するようになれば、皆が対応してくれると思う」「この問題をマスコミで多く取り上げてほしい」等の記述があった。

〈作成に否定的〉

情報不足: 「どういう医療措置があるのか知らない」「どこまで何を決めたら良いかわからない」「要望書、代理人決定書の法的効力について知らない」という終末期医療に対する無知が目立った。また切迫感・危機感がないという回答としては、「死を身近に感じた時でなければ、作成には至らない」「事前要望書は事後に確認できないのではないか」「書き替えることが多くなりそう」と不安がる表現も目立った。

死のタブーとしては、「縁起でもな

い」「事前指示書を書こうと思ったことはあるが、死から逃げたいために、先延ばしにしている」「82歳の義母を嫌な気持ちにさせてしまいそうで話づらい」といって、死の話を遠ざける傾向にあった。

さらに、要望書を書いても、実行してもらえない不安としては、「家族が実行してくれるか不安」「家族で話し合っても価値観に差があり実行困難なのは」「要望書があっても活用されないかも」「自分ひとりで考えることに限界があると思う。自分自身が医療診断を受けたとき、正常な精神で作成できるかが心配」「相談した人(相手)と自分の考えが一致しないとき、どこまで歩み寄れるのが疑問」などの意見が山積した。一見「否定的」に見える意見も、「決定した方が良い」とおわせながらも、情報不足や縁起が悪いという感情などによって、実行に移せない背景が見えてきたのである。

■考察

今回の調査結果より、回答者の大多数が事前要望書の必要性を感じながらも未作成の実態が確認され、その原因が主に手続きに関する情報不足、サポート不足、相談相手やファシリテーター役を担う専門家不足などの問題が、質的分析により明らかになった。また、終末期全般に対する回答者(一般市民)の切迫感のなさや意識の低さ、「縁起が悪い」とする文化的背景の問題、さらには、勉強不足や誤解などの問題も浮き彫りになった。

上記の問題解決に向けて、今後も妨げとなる原因を心理学的に分析し、医療機関や教育機関などの協力を得て、事前要望書の理解と実践を普及させていきたい。

研究プロジェクト

出生をめぐる医療と倫理

赤塚京子 (京都大学人間・環境学研究所博士後期) + カール・ベッカー (京都大学こころの未来研究センター教授)

■「生殖の善行」原則

近年の幹細胞研究の進展や生殖補助医療技術 (ART) の高度化により、生殖のあり方が大きく変わってきている。また、社会的に不妊症の存在が認知されるようになり、人工授精や体外受精 (IVF) は、ポピュラーな技術の1つとして選択されるようになってきた。さらに、最近では従来の診断技術よりも侵襲性の低い新型出生前診断が登場したことで、より安全かつ手軽に胎児の健康状態を把握することが可能となり、生殖の場における親 (カップル) の選択肢が広がっている。

今後、日本で高度な生殖補助医療をめぐる倫理的問題を議論していくにあたり、海外での議論を参照しておくことは有益であると言えよう。そこで、本研究プロジェクトでは、英米圏を中心に、近年活発に議論されている「生殖の善行」原則 (夫婦が持ち得る子どもの中から、最善の人生を送ることが期待される子どもを選択すべきという考え方。以下“Principle of Procreative Beneficence” = PPB という) をめぐる議論の批判的分析を行った。

■批判的分析

本研究の対象となった56件の論文をジャーナル別、出版年別に分析した結果、ジャーナル別では、PPBが発表された論文を掲載したBioethicsが22件と最も多かった。これに次いで、生命倫理学分野で最もインパクト・ファクターが高く、PPB提唱者であるサヴァレスキュ Julian Savulescuが編集長を務めるJournal of Medical Ethicsも11件ヒットした。

年代別では、年によって多少のバラつきはあるものの、2001年のPPB論文の出版以来、おおむね右肩上がりに変動している。そのなかでも特に、パーカー Michael ParkerによるPPB批判

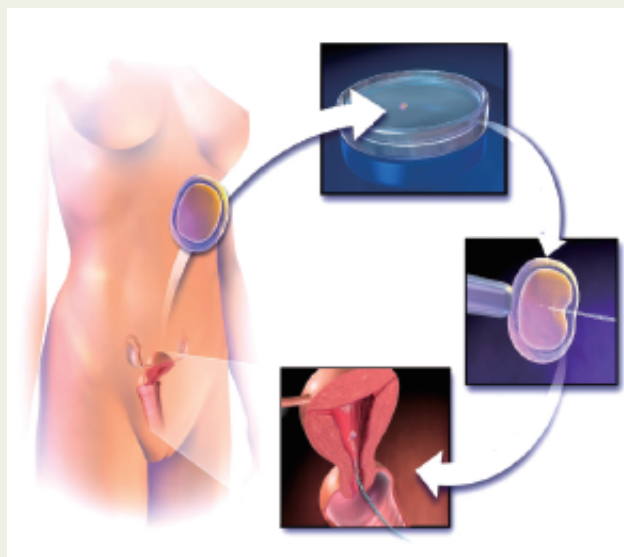
とそれについてのサヴァレスキュの応答論文が発表された2007年以降、PPBへの注目はいっそう高まっており、近年ではほぼ安定して毎年10件弱ほどの論文が発表されている。出版から10年以上経た現在でもなお、PPBに対する注目度が高いことを示していると言える。

議論の内容そのものについては、先述したパーカーに代表されるようなPPB批判を中心とするものが多く見られたが、2009年にサヴァレスキュとカヘン Guy KahaneがPPBを再弁明したことを受けて、これまでPPBに対して行われてきた賛否の議論がどの程度妥当なものであったのかを検証するようなメタ分析も出てきている。

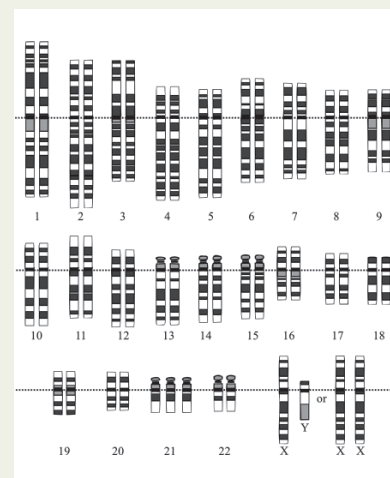
■サヴァレスキュの論文

本プロジェクトの学術的貢献として、2015年3月末に、サヴァレスキュによる論文 (“Procreative Beneficence: Why We Should Select the Best Children”) の日本語訳 (「生殖の善行——私たちが最善の子どもを選ぶべき理由」) をオープン・アクセス・ジャーナルとして掲載している。従来、同論文は欧米の哲学・倫理学領域において注目を浴び、活発な議論が展開されてきた。上記のような形で同論文の翻訳が出版されて、今後、日本においても少なからず注目を浴びるであろう。

また翻訳論文の出版に伴い、「解説



人工受精は侵襲性を伴い、体外で「最善」の受精卵を選んで戻すべきかは、議論を呼び起こしている。



DNA分析によって、生まれる前に胎児のさまざまな特徴を事前に読めるようになっている。

——生殖の善行原則について」も掲載される予定である。2007年以降、PPBは理論として洗練され、PPB批判も精緻になってきている。翻訳論文を目にする者にPPB議論の動向もあわせて提示することは、今後の生殖をめぐる倫理的議論にとって一助となるであろう。

発達障害の学習支援・コミュニケーション支援

磯村朋子(京都大学霊長類研究所博士課程大学院生)+小川詩乃(京都大学大学院人間・環境学研究科、日本学術振興会特別研究員 PD)+吉川左紀子(京都大学こころの未来研究センター教授)

本研究プロジェクトでは、発達障害の子どもを対象に、継続的な学習支援・コミュニケーション支援を実践として行いながら、発達障害の認知的特性を実験的に検討する基礎研究を行っている。以下に、その一例を紹介する。

■自動的な表情弁別と行動反応に関する実験的検討

他者の表情は、私たちの生活のなかで最も重要な社会的手がかりのひとつである。他者の表情を読みとり、相手の感情を認知的に理解することはもちろん重要であるが、より無意識的で自動的な表情処理も私たちの円滑な社会相互作用の形成に重要な役割を果たしていると考えられている。そのような潜在的な機能の障害あるいは特性が、発達障害をもつ子どもにおいて日常場面での社会的やり取りの難しさに影響している可能性が十分に考えられる。今回、本プロジェクトに参加している自閉症スペクトラムをもつ児童を対象に、自動的な表情弁別とそれに基づく行動反応について実験的検討を行った。

様々な表情のなかでも、「怒り顔」は脅威・危険のシグナルであり、いち早く発見しなければならない。そのため、怒り顔のような脅威のシグナルに対して、無意識のうちに視線を迅速に向けられるように私たちの視覚システムは進化してきたと考えられている。この

ような現象を「怒り顔優位性効果」と呼び、無意識的・自動的な表情処理が行動に反映されるために生じると考えられる。私たちは生まれつき、あるいは生後かなり早い段階でそのような効果を示すようになると言われている。

今回、自閉症スペクトラム児においてその機能がどのように働いているかを調べるため、自閉症をもつ/もたない児童を対象に、たくさんある線画表情の中からひとつだけある怒り顔または笑い顔をできるだけ速く見つけてもらうという課題を行い(図1)、児童が怒り顔または笑い顔を検出するのにかかる時間を測定した。その結果、自閉症スペクトラムをもたない児童(7~10歳)では、怒り顔を笑い顔よりも速く発見するという怒り顔優位性効果が顕著に見られた。一方、同年齢の自閉症スペクトラム児では、そのような効果を示さない児童が多く見られた(図2、Isomura et al., 2014)。しかし、自閉症スペクトラム児では、年齢が上がるにつれて効果が増してくるという発達的な変化が見られ、さらにその変化は児童のソーシャルスキルの向上と関連がある可能性が示唆された。

これらの結果から、自閉症スペクトラム児において、自閉症スペクトラムをもたない児童と同様のメカニズムではないかもしれないが、表情処理の力が発達過程で向上する可能性が示唆された。また、怒り顔優位性

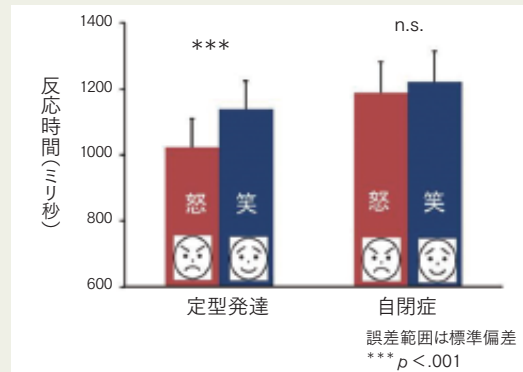


図2 結果
自閉症スペクトラムをもたない児童(左)ともつ児童(右)における怒り顔(赤)と笑い顔(青)の検出時間(Isomura et al., 2014より改変)

効果の大きさはソーシャルスキルの高さに関連性をもったことから、表情に対する知覚の向上は、彼らのソーシャルスキルの向上、ひいては円滑な社会的相互作用の形成に寄与することが考えられた。

■今後の展開

今後は、支援と研究が融合している本プロジェクトの特徴を活かし、実験場面だけではわからない児童ひとりひとりの実態に即した研究の展開を目指したい。これまでも実験的データに基づく児童の特性を保護者の方にフィードバックすることで、より客観的な視点から子どもを理解することにつながるという意見をいただいているが、今後も積極的に保護者とのやり取りを重ねていきたいと考えている。同時に、こうした基礎研究の結果から支援内容を見直し、より体系的な支援の構築を目指している。

引用文献

Tomoko Isomura, Hiroyasu Ito, Shino Ogawa, & Nobuo Masataka "Absence of Predispositional Attentional Sensitivity to Angry Faces in Children with Autism Spectrum Disorders". Scientific Reports, 4, 2014.

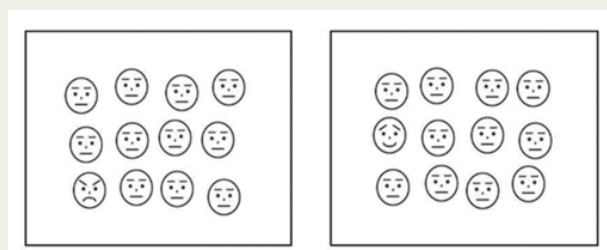


図1 課題の例
標的的刺激として怒り顔が呈示されている場面(左)と笑い顔が呈示されている場面(右)

研究プロジェクト

科学と思想・哲学との対話を通じたこころ観の再構築

熊谷誠慈 (京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定准教授)

■研究の背景・目的

わが国は敗戦による壊滅の中から奇跡的な復興を遂げ、一躍、世界に冠たる経済・技術大国となった。その中で、経済・技術面のみならず、健康、教育、文化など、あらゆる側面で、わが国は長足の進歩を遂げたかに見える。しかしながら、それはおおそ物質面に限定されており、精神的な側面では、進歩どころか大きな後退・混乱が認められるのではないか。物質的・経済的には満ち足りているように見える一方で、自殺率が毎年世界トップクラスを記録し、学校でのいじめや、若者の引きこもりが問題化していることなどは、表面的な物質的繁栄の陰で、国民の精神面がないがしろにされてきた何よりの証左であろう。しかし、2011年3月11日の東日本大震災や、それに続く福島原発事故を経て、過度な物質主義や個人主義を反省し、「人と人との繋がり」や「絆」などの精神性や伝統的価値を再評価する流れも起り始めている。

こうした背景から、本プロジェクトでは、閉塞した現代社会にとって真に望まれる新たな価値基準の創出に向けて、国内外の科学者や思想家、宗教家たちが対話と議論を重ねることで、「東洋と西洋」、「科学と宗教」などの多様な視点から「こころ」について再考し、これからの研究のあるべき方向性を模索する。加えて、科学者、思想家、宗教家間のネットワーク構築を進めた。

■研究の方法

ワークショップやセミナー、シンポジウムを開催する中で、異分野の研究者や宗教者で議論および情報交換を行い、精神性、こころについて多角的に検証を行うとともに、これからの学術研究の意義やあり方について考察した。

■研究会・ワークショップ

2014年4月11日、12日、京都ホテルオークラにて、こころの未来研究センターとMind and Life Instituteにより共催された国際会議『Mapping the Mind (こころの再定義)』(科学者・宗教者とドラマ法王との対話)において、シニア研究者とシニア宗教者による学際的な対話が行われた。本プロジェクトは、同国際会議の事務局を担い、企画運営をサポートした。

◎4月11日(土)

開会式

開会挨拶1 アーサー・ザイエンス (アマースト大学名誉教授/Mind & Life Institute代表)

開会挨拶2 吉川左紀子 (京都大学こころの未来研究センター長)

セッション1 モデレーター：アーサー・ザイエンス

ドラム・ラマ法王14世による基調講演
今枝由郎 (元フランス国立科学研究センター研究ディレクター)「初期仏教におけるこころ」

トッペン・ジンパ (マギル大学兼任教授)「仏教心理学と瞑想実践に関する考察」

リチャード・デヴィッドソン (ウィスコンシン大学教授)「こころを変えて脳を変える：瞑想の脳科学的研究」

セッション2 モデレーター：入来篤史 (理化学研究所シニア・チームリーダー/京都大学こころの未来研究センター特任教授)

ジェイ・ガーフィールド (イェールNUS教授)「認識の錯覚：仏教瑜伽行学派の観点から」

アーサー・ザイエンス「量子物理学におけるこころの役割」

森重文 (京都大学数理解析研究所所長/教授)「芸術との比較における数学：求めるものは応用か、真理か、それとも美か？」

◎4月12日(日)

セッション3 モデレーター：入来篤史

北山忍 (ミシガン大学教授/京都大学こころの未来研究センター特任教授)「文化神経脳科学：文化・脳・遺伝子をつなぐ」

ジョアン・ハリファックス (ウパーヤ禅センター長・創業者/教師)「プロセスによる慈悲の位置づけと、慈悲の修練におけるその影響」

下條信輔 (カリフォルニア工科大学教授/京都大学こころの未来研究センター特任教授)「潜在的なこころ、共感、そしてリアリティの共有」

セッション4 モデレーター：アーサー・ザイエンス

バリー・ケルジン (ヒューマンバリュー総合研究所所長)「情動の可塑性：健全な社会の構築に向けて」

松見淳子 (関西学院大学文学研究科長/教授)「子どものこころを探り、ポジティブな学校環境を創る：心理学におけるエビデンスベースの実践」

長尾真 (京都大学元総長)「コンピュータはどこまで人間に近づけるか」

総司会：熊谷誠慈 (京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定准教授)

マルク＝ヘンリ・デロッシュ (京都大学白眉センター特定助教)

■今後の展望

近年の学術界においては、可視化・定量化に特化した研究成果を大量に提示することが第一義となりつつあるが、人類や社会のためにいかなる意味を持つかといった本質的な問いを設定して、学術研究における問いと回答の質を高めていく必要があるという結論に至った。今後さらに、学術領域間の壁を、さらには学術と社会との垣根を越えた対話を進めていきたい。

ヒマラヤ宗教精神の研究

熊谷誠慈 (京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定准教授)

■研究の背景・目的

1989年にダライラマ14世がノーベル平和賞を受賞し、1997年にはブラッド・ピット主演のハリウッド映画『セブンイヤーズ・イン・チベット』がヒットしたことなどにより、チベットは世界的注目を集めるようになった。また、ヒマラヤの小国ブータンも、GNH (国民総幸福) という特徴的な政策により近年、世界的注目を集め、2011年の国王来日以降は、わが国でも注目度が高まっている。しかし、現在のヒマラヤ関連の情報の多くは、ヒマラヤ地域が現代の国際社会においてどのような政治性を持っているか、という点に着目したものに限られており、同地域の文化的特性、とりわけその精神性についての理解はまだまだ十分とはいえないのが現状である。

以上のような背景から、本プロジェクトでは、ヒマラヤ地域の文化・精神の象徴的な位置を占める「チベット仏教」と「ボン教」という2大宗教を中心として、同地域の宗教・伝統的精神性の調査を進めてきた。なお、「チベット仏教」は7世紀以後、ブータン、ネパール、シッキム、ラダック、北東インド、中国西部、さらにはモンゴルにまで広汎に伝播し、それぞれの地域で独自の展開を遂げている。一方、「ボン教」についてはいまだ謎に包まれている部分が多く、今後の詳細な調査を待たねばならないが、これらの地域の大半に、仏教ほどの浸透度はないものの、ほぼ同様の広がりを見せているのではないかと予想される。そこで、本研究は、これら2大宗教の伝播と地域化に焦点を当てることによって、広くヒマラヤ文化圏全般における宗教精神の普遍性・共通性と、地域性・個性の双方を理解することを目指し研究を推進した。

■研究の方法・内容

本プロジェクトでは、「ヒマラヤ宗教研究会」を定期開催し、「仏教」と「ボン教」というヒマラヤ文化圏の2大宗教を中心として、同地域における宗教的精神のありようを、宗教哲学、歴史学、文化人類学などの視点を通して、多角的・包括的に検証してきた。

「仏教」については、1. 「チベット仏教」、2. 「モンゴル仏教」、3. 「ブータン仏教」、4. 「その他ヒマラヤ地域の仏教」、と区分し、「ボン教」については、1. 「チベットのボン教」、2. 「ブータンのボン教」、3. 「その他ヒマラヤ地域のボン教」、と区分する。

このうち、「ブータン仏教」と「ブータンのボン教」の研究については、別途推進している「ブータン仏教研究プロジェクト」と連動させた。

平成26年度には、ブータン仏教の少数宗派 (サキャ派・ゲルク派) の歴史と現状を解明するために、ブータンにおいてフィールドワークを行った。サキャ派の歴史と現状についての研究成果は、論文として公表することができた。また、ボン教典籍 Srid pa'i mdzod phug の精読に基づき、ボン教が仏教の範疇論を参考にして独自の教義を作り上げたことを特定した。特に心や心の作用の分類について、ボン教教義と仏教教義を比較し、その考察結果を国際仏教学会で発表した。また、安田章紀研究員はブータン仏教の2大宗派であるニンマ派の著作群についての研究成果を、松下賀和研究員はブータン仏教の2大宗派であるカギュ派のマハムドラー理論についての研究成果を、それぞれ論文として公表した。

■研究会・ワークショップ

◎第2回京都大学ヒマラヤ宗教研究会
日時 2014年6月2日 (月) 16:30～18:00

場所 京都大学こころの未来研究センター225会議室

発表者 安田章紀 (京都大学こころの未来研究センター研究員) 「ゾクチェン概論」

◎第3・4回京都大学ヒマラヤ宗教研究会

日時 2014年10月6日 (月) 16:30～18:00 / 2014年11月17日 (月) 17:00～18:30

場所 京都大学こころの未来研究センター225会議室

発表者 小西賢吾 (京都大学こころの未来研究センター研究員) 「フィールドからみるボン教研究——ボン教の地域性に着目して」

◎第5回京都大学ヒマラヤ宗教研究会
日時 2015年1月19日 (月) 17:00～18:30

場所 京都大学こころの未来研究センター225会議室

発表者 松下賀和 (京都大学こころの未来研究センター研究員) 「チベット仏教僧院における生活」

◎第6回京都大学ヒマラヤ宗教研究会
日時 2015年3月25日 (水) 17:00～18:30

場所 京都大学こころの未来研究センター225会議室

発表者 山口周子 (中村元東方研究所専属研究員) 「モンゴルの文字と精神文化——ヒマラヤを超えた文字と教え」

■今後の展望

平成27年度からは、研究題目を「ヒマラヤの宗教精神とその現代的意義」と一部変更する。平成26年度同様、古典文献の研究を継続するとともに、現地調査をより意識的に行い、また異分野間の研究連携を進めることで、現代的な視点をより意識的に取り込んでいく予定である。

研究プロジェクト

国民総幸福 (GNH) を支える倫理観・宗教観研究

熊谷誠慈 (京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定准教授)

■ 研究の背景・目的

GNH (国民総幸福) という概念は、1970年代に、ジクミシング・ワンチュク第4代ブータン国王により提唱され、ブータンの国策の軸に据えられた。以後、GNHはブータンの代名詞となり、各国の幸福政策のモデルの1つとなっている。世界的な注目が高まる中、2012年には国連において「世界幸福デー (International Day of Happiness, 3月20日)」が制定されるに至った。

第二次大戦終結後、ブータン研究を担ったのは主に歴史学や人類学であったが、1990年代の「王立ブータン研究所」(Centre for Bhutan Studies) 設立以降、国際GNH学会の開催などによってGNH研究は一気に加速し、現在まで経済学者や心理学者、開発学者などが中心的な役割を果たしてきている。

ただ、ここで忘れてはならないのはブータンが仏教国だということである。国民総幸福を含む同国の先進的政策が、あくまでその基盤を同国に深く根付いた独自の宗教的倫理観の上に置いている事実は看過されがちである。この点を無視して、ブータンの本当の理解には到達し得ない。そこで本研究では、国民総幸福という広く知られた概念の根底に存在する倫理観および宗教観の仕組みについて、広くチベット・ヒマラヤ文化圏全体を視野に収めつつ、多角的に検証してきた。

■ 研究の方法・研究内容

今年度は、以下の3つの柱に沿って研究を進めてきた。

1. 文献研究

文献学的手法に基づいて古文書を解析することで、ブータン仏教の思想や幸福観、倫理観の解明を進めた。特に、ブータンの国教的位置づけにあるドゥク派の開祖ツァンパギャレー全集のクリティカルエディションならびに試訳

を目下作成中である。同全集はブータンの国家的アイデンティティの基底をなすものでありながら、文献へのアクセスが困難であったために、これまで研究がなされてこなかったことから、その内容解明は今後のブータン精神史研究に大きく寄与することとなる。

2. フィールド研究

本プロジェクトでは、ブータン仏教の多数派 (ドゥク派・ニンマ派) よりも、少数派 (サキャ派・ゲルク派) に焦点を当てて現地調査を行った。理由としては、少数派の伝統は途絶えつつあるため、情報の回収を急ぐ必要があるからである。今年度の調査により、サキャ派の伝統はすでに途絶えてしまい、ゲルク派の伝統も存亡の危機にあることが判明し、論文として公表した。今後は、両宗派の歴史、現状、課題について、隣国の事情とも比較しながら考察を進めていく予定である。

3. 学際的研究

今年度は、ブータン研究会等を通じて、異分野のブータン研究者間で情報交換・共同研究を進めた。ブータン王国憲法や国民総幸福政策のみならず、同国の産業や医療、農村開発などにおいて、仏教的理念が重んじられていることを確認できた。

以上の3領域を繋ぐ研究成果として、*Bhutanese Buddhism and Its Culture* (Seiji KUMAGAI, Kathmandu: Vajra Publications, 2014) を出版した。同書の出版祝賀記念会 (2015年2月27日) には、ダムチョ・ドルジ内務大臣が臨席しニュースでも放送されるなど、ブータン国内においても大きく取り上げられた。

■ 研究会・講演・シンポジウム

1. ブータン文化講座

第5回『「関係性」から読み解くGNH (国民総幸福)』上田晶子 (名古屋大学



上は熊谷の編著書 *Bhutanese Buddhism and Its Culture* を紹介するブータン国営放送のニュース、下は出版祝賀記念式典にて、同書を紹介するダムチョ・ドルジ内務大臣

大学院開発学研究科) 2015年12月4日

2. 京都大学ブータン研究会

第9回「サムテガン Basic Health Unit (BHU) からの報告」藤澤道子 (京都大学東南アジア研究所研究員) 2014年5月15日

第10回「ブータンの新生児に寄り添って：3年間の活動報告と今後の展望」西澤和子 (京都大学霊長類研究所研究員) 2014年7月17日

第11回「ブータンにおける高齢者ケアの実践」坂本龍太 (京都大学白眉センター特定助教) 2015年1月20日

■ 今後の展望

今後は、「ヒマラヤ宗教研究プロジェクト」(連携研究プロジェクト) や「ブータン仏教研究プロジェクト」(科研) などとも連携し、より多角的な視点からGNHの概念を捉えなおす予定である。また、京都大学ブータン研究会では、研究者のみならず学生の発表も歓迎することにし、若手研究者の育成にも力を注いでいく予定である。

孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究

—京町家「くらしの学び庵」プロジェクト

清家 理 (京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定助教)

■研究背景と目的

〈研究目的〉

本研究では、地域住民の孤立や孤立に伴う心身・社会活動面の不健康や障害予防を目的に、「からだ」「こころ」「社会活動」三側面からの健康づくりによる互助・自助強化を図る、双方向型学習プログラム開発を実施する。

〈研究の必要性—研究の背景〉

日本は、超高齢社会を迎え、地域社会や家族単位が大きく変化した。以前は、多世代の同居や交流が多く、介護等の生活問題を互助・自助で解決する術が地域コミュニティに内在していた。しかし現在は、老老世帯、独居世帯、高齢両親と独身実子世帯等、家族単位の縮小化、就労困難による経済活動の停滞で、閉じこもり・孤独・貧困に象徴される閉鎖的な様相——孤立・無縁——を見せている。そのため、生活上の問題（健康・経済・介護等）が発生しても、外部には見えない形で問題が悪化し、最悪の場合は、孤独死を迎える事例が増加している。つまり、地域コミュニティの互助・自助力に限界が生じていると言える。

そこで本研究プロジェクトでは、地域住民の孤立や孤立に伴う、心身・社会活動の不健康や障害予防を目標とした、「からだ」「こころ」「社会活動」三側面における健康づくりによる互助・自助強化を図る、双方向型学習プログラム開発を実施した。

表1 平成26年度プログラム概要

座学(講義)+フィードバック(相互交流・意見交換会)+よろず相談会(個別相談・悩みの共有) 初級1期:H26.10.1~H26.12.17(6回) / 初級2期:H27.1.17~H27.3.28(6回)			
	講義テーマ	コンテンツ	よろず相談
第1講 医学	毎日できる運動で衰え知らず!	①腰痛の仕組みと予防 ②関節の痛みとのつきあい方 ③若々しさを保つ姿勢と痛み予防 ④いつでもどこでもできるエクササイズ	
第2講 医学	老化と病気の予防で錆び知らず!	①自分の健康は自分で守る(生活習慣病予防) ②老化とフレイル ③認知症とは ④人生の最終段階を考える	○
第3講 栄養学	毎日できる栄養管理で病気知らず!	①サクセスフルエイジングと健康寿命 ②行動と食習慣の見直し(Q&A) ③噛むことの重要性 ④食べる順番を考えること ⑤ちょこまか運動のススメ	
第4講 心理学	健やかなところで暮らす知恵	①健やかなところで暮らすこと - おだやかに、きげんよく、たのしく、いきいきと— ②プータンの幸せ ③日本人の幸せ ④健やかなところで暮らすために ・お手本の人、楽しみ探し、自分らしく生きる、習慣(学び、よかったことメモ)	○
第5講 社会福祉学・保健	介護って何?	①介護が必要になるとき ②介護や支援を必要としている人のキャッチ方法 ③介護を必要としている人のお手伝いのために	
第6講 経済・社会保障	老後の備えて? ~アリとキリギリス物語~	①老後に必要な経費と準備 ②相続とは ③相続のシュミレーション	○

■平成26年度の実践

(1) プログラム

平成26年度は、多職種、多機関が、講師や相談支援を担う、ステップアップ方式の双方向型学習プログラムを地域住民に提供した(表1)。従来、地域での学習は、1回シリーズ、もしくは複数回シリーズであっても、座学形式が多い状況であった。ステップアップ方式の中で、段階が進むにつれ、グループワークやフィールドワーク等、講義参加者の主体的参加が可能になる仕掛けにより、双方向型学習スタイルを通じた、新しい人間関係の構築もねらいとしている。

(2) 参加者属性

平成26年度は、72名の参加者がお

り、修了者(3回以上参加者)は50名(69.4%)であった。参加者の年齢は、後期高齢者に該当しており、家族と同居している者が80%以上を占めた。地域で世話役を担っている人も半数を超え、家族および家族以外の人とのつながりも有している状況であった。

(3) 学びの成果

学んだことを生活にどの程度活用したい意向を有しているか、講義毎に自記式アンケートで調査したところ、医学(予防医学)・心理・福祉領域を中心に、高い活用意向度が確認された。一方で、学んだことを他者のためにどの程度活用したい意向を有しているか、同じく講義毎に調査したところ、医学(運動・理学療法)・心理・福祉・貯蓄などで高い意向度が確認された。この結果は、よりよい生活の術になりうる具体的な方法や手段を他者に伝えやすいことが考えられる。学びの成果を学習当事者のみならず、他者にも伝えようとして意識が確認され、本プロジェクトの意義達成に一歩近づいている結果だと言える。

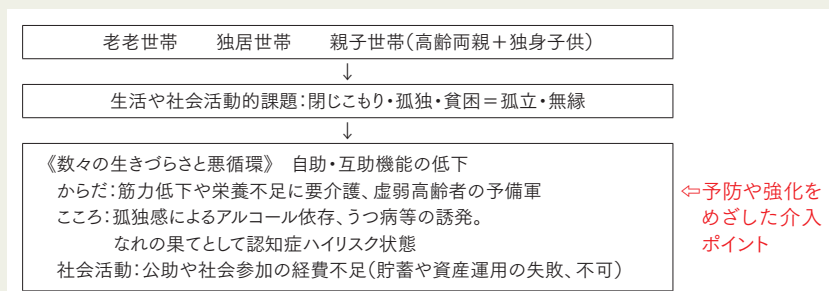


図1 プロジェクトの背景

研究プロジェクト

倫理的観点に基づく認知症介護の負担改善

清家 理 (京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定助教)

■研究背景と目的

本研究の目的は、認知症に特化した家族介護者のWell-beingを測定し、適切な支援介入もしくはセルフケアの時期と量を専門職、介護当事者が把握・確認できる尺度の開発である。

これまでの介護負担に関する尺度は、ネガティブな側面を測定するものが主流であった。ZBIを基軸にプラスアルファの要素を盛り込み、因子分析を経て、 α 値で妥当性・信頼性を検証することに終始していたと言える。家族介護者にとって、尺度を用いた測定結果が、よりよい介護の契機にならなければ、尺度は無用の長物である。過去、30年間の反省点は、介護実施者の行動心理の多面性、社会性が包括的に考慮されていなかったことである。

■段階的研究結果の反映: 転帰調査における質的データの変数化作業

本研究では、まず介護者の介護に伴う1年間の身体的・心理的・社会的変容を追い(転帰)、その結果を新尺度の変数に変換させるプロセスを経た。1年間の転帰では、作業1: 喜怒哀楽の感情に伴う介護エピソードの内容分析→作業2: 介護者の発話を18カテゴリー(1カテゴリーにつき、肯定的reaction、否定的reactionに二分化)コーディング→作業3: 介護者の全発話数に占める各カテゴリーに該当する発話の割合を算出(各カテゴリーの生起率)、以上3段階を経てデータ分析を実施した。このうち、各カテゴリーの肯定的reaction、否定的reactionの操作的定義を以下のように実施した。

A: 肯定的reaction (できた、よかった、嬉しかった、たのしい、やってみよう)

B: 否定的reaction (できない、だめ、無能、悲しかった、怒ってしまう、無駄)

18カテゴリーのうち、肯定的変化があったものは、以下のカテゴリーであった(表1)。

■平成27年度の計画: 尺度開発で用いる理論

本研究では、家族介護者の包括的な「健康」を捉えるものとして、WHOの健康定義を採用するが、その根拠を以下に述べる。

介護者の状況を測定する先行研究の傾向は、二分化傾向で説明できる。(Walker, 1996, Picot, 1997, 石井, 2003, 広瀬, 2004)。それは、介護体験やそれに伴う行動心理変容が肯定的か、否定的かというものであり、介護者のある側面を特化したものとなっている。つまり、介護者を断片的に把握しているものである。

しかし、介護者を多角的に把握するものとして、『介護に対する評価』(Hunt, 2003)や『認知症を有する在宅高齢者を介護する主介護者の精神的健康に関する研究』(土井, 尾方, 2000)が出てきた。Hunt (2003)の研究は、介護に対する評価を肯定的、否定的、中立的に分け、介護に対する意味づけを明確化している。中立的評価が分かりにくいのが、ここでは先の見通しが立たない将来への不安、制度や行政への意見や考えを挙げているため、介護者個人の価値観や情動次第でいかようにも(肯定的or否定的)捉えられるものと考えられる。

次に、土井、尾方(2000)の研究は、主介護者の精神的健康と関連する要因を①主介護者要因(要介護者よりも、介護者の年齢が低い[20歳~49歳])、②要介護者要因(常時介護が必要、介護年数が数年未満で浅い)、③調整介在要因(介護者の支援者がいない、経済的に余裕がない)に分けている。

二研究とも共通するのは、介護に

表1 肯定的変化があったカテゴリー

A: 肯定的発話生起率が上昇したもののコード1: 認知症症状への対応
コード6: 協力体制づくり(近隣)
コード9: 人間関係(近隣)
コード10: 支え合い・セルフヘルプ
コード12: 介護者自身の将来のこと
コード15: 周囲からの情報獲得
コード17: 介護者自身のセルフケア
B: 否定的発話の生起率が低下したもののコード2: 認知症の人や症状の受容
コード3: 認知症の治療
コード4: 協力体制づくり(家族)
コード7: 人間関係(家族)
コード8: 人間関係(専門家)
コード10: 支え合い・セルフヘルプ
コード16: 介護者の過去の介護体験

伴う行動・情動評価、精神的健康状況を多角的に分析する切り口であり、本研究でも採用する点である。しかし、いずれも、「こころ・からだ・つながり(社会性)」をトータルに把握した、人間の「真の健康」を測定したものではない。過去、介護負担感、抑うつ、不安などをアウトカムにした、負の精神状態を測定したものは数多くある。介護を通じて自身の人生を豊かにし、人間的成長や満足感、幸福感を感じたというアウトカム、つまり、介護に伴うwell-being向上をアウトカムにする尺度は不足している。

そこで本研究では、介護によるアウトカムについて、「こころ・からだ・つながり(社会性)」をトータルに把握し、well-being向上を図った「真の健康」とするために、WHOの健康定義“Health is a dynamic state of complete physical, mental, spiritual and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.”を採用する。そして、次年度は、転帰調査結果の生起率カテゴリーを変数化したものと併せて、新尺度の試作化、妥当性検証研究へと進めていく。

大人の発達障害への心理療法的アプローチ

畑中千紘 (京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定助教)

■研究目的

2000年代以降、「大人の発達障害」への社会的関心が高まり、本プロジェクトではこれに対し、理論的・実践的立場から多角的に研究を進めてきた。しかしながら、たとえばDSM-5が改訂されて発達障害の診断基準に変更が加えられるなど、発達障害をめぐる状況は常に変化しており、それに応じて研究の照準も変化させていく必要がある。特に大人の事例にとっては、これまで多くが該当とされてきた「特定不能の広汎性発達障害」といった曖昧な枠組みが廃止されたことが大きいのではなからうか。

発達障害に注目が集まってからほぼ15年経過した現在、典型的に発達障害らしい特性を示す事例はむしろ減ってきているという臨床家の印象がきかれる。しかしながら、「自分はADHDではないか？ きちんと検査をしてほしい」などの訴えをもって臨床現場を訪れる人は今も絶えない。社会が提示する「発達障害」という枠組みと、人々のこころの変化との微妙な重なりとすれ違いが発達障害という概念をめぐる展開されているように思われる。

本プロジェクトでは、発達障害という概念を出発点として、それらしい特性を示す人々を本質的に理解するためにどのような視点が有効であるか、また、そうした人々にどのような心理療法的アプローチが有効であるかについて、臨床事例研究や調査研究をベースにして明らかにすることを目指している。さらには、発達障害が照らし出す現代社会のあり方についても検討し、これからのビジョンを提示していきたいと考えている。

■平成26年度の研究内容とその成果

平成25年度には、プロジェクトのこ

れまでの成果を「理論」「事例研究」「アセスメント研究」「社会・文化的アプローチ」と4つの視点から論じた書籍を刊行した(河合俊雄・田中康裕編『大人の発達障害の見立てと心理療法』創元社、2013年)。これに引き続き、26年度は、特に診断ができるかど

うか微妙なケースを中心に、事例研究を重ねてきた。それらはいずれも発達障害という視点から捉えることが可能であるが、現在の診断枠からすれば該当しないとも考えられる微妙なケースであり、まさに現在の発達障害臨床の現状を象徴するような事例といえるものであった。

たとえば、成績優秀で大学院まで進学してきたものの、人とはほとんど目も合わせられず、まともに言葉を交わすことも難しいというように、コミュニケーション能力の乏しさとのギャップが非常に大きいケースがみられた。また、別のケースでは自らのことを振り返る内省的な意識や、自分を変えたいという気持ちや努力は感じられるものの、他者についてはいまだ個別の名前を持たない「人間」として自分から遠いものと体験されている(逆に言えば、自身が「人間」未満のものとして体験されている)ようであった。しかし、心理療法で絵を通じたやりとりをしてみると、意外にも相手から取り入れる力がみられたり、セラピストのやりとりの中で初めて他者の存在を体験しているような様子が見られるなど、これまで眠っていたクライアントの力が開花していくような印象を受けるものが少なくなかった。

このような事例を検討していくと、コミュニケーションやイメージーションに関する弱さがみられるのは確かであるが、それは脳機能の障害によるも



2014年、研究会の様子

のというよりもむしろ、発達の機会を得られないままに成長してきたがゆえの発達障害の様相であることがうかがえる。このような人たちは、現実適応の難しさゆえに、能力が低いとか、ともすれば意志が弱く努力を怠っているとみられることも多い。また、引きこもっていたり、ネットの世界に耽溺しているなどで現実と直視しない状況で、変化に対して敏感になっていることもある。このような場合、心理療法家であっても、スキルを教えたり元気づけたりしたくなることも多い。しかし、心理療法の場でいねいに本人の語りをきいていくと、クライアントの中に未熟ながらもピュアなエネルギーが生まれてくる展開の可能性を事例研究は示してくれる。心理療法はコミュニケーションスキルを鍛える訓練的方法ではないのだが、このような場合、スキルのベースとなる本人の主体的な動きが活性化されてくるのに伴って、現実的な適応もよくなることが示唆されている。現在ではクリアな目標に向かって段階的に進むようなわかりやすい方法論がもてはやされる傾向があるが、そうではない方法で、実際に成果が出ていることを社会に示していく必要があるだろう。

これらの成果については、次年度以降に調査研究によって補完され、引き続き書籍や論文の形で発表していく予定である。

研究プロジェクト

こころ学創生——教育プロジェクト

吉川左紀子 (京都大学こころの未来研究センター教授)

■「こころの科学集中レクチャー」

センターでは毎年、3名の講師による3日間の連続講義と討議「こころの科学集中レクチャー」を行っている。2015年3月4日から6日の3日間で実施された、2014年度の集中レクチャーのテーマは「こころの謎：遺伝から脳、そして主観」。講師は、センターの特任教授であり本レクチャーのコーディネータでもある北山忍ミシガン大学教授、同じくセンターの特任教授である下條信輔カリフォルニア工科大学教授、入来篤史理化学研究所脳科学総合研究センターシニアチームリーダーで、各講義後のディスカッションの進行は内田由紀子准教授によって行われた。

■講義の概要

3日間の講義の概要は以下のとおりである。

■講義1 ポストディクシオン(後付け再構成)、意識、自由意思(下條信輔)

意思決定をした「後」の心理・神経過程が最近注目されており、それを指すポストディクシオンという語は、プレディクシオン(予測)からの造語だが、感覚・知覚研究の領域ですでに術語となり、神経過程の解明がすすんでいる。このプロセスを吟味することを通じて、自発性、能動性、自由といった概念について再考する。

■講義2 クオリア(感覚の絶対質)とシェアド・リアリティ:「感覚代行」を入り口に(下條信輔)

クオリア(感覚の絶対質)に関する考察は、こころについての思索にとって不可欠だが容易に独我論に陥ってしまう。「シェアド・リアリティ(心理リアリティの共有)」を可能にする心理・神経基盤についての議論と考察によりこころを孤立から救い出すことを試みる。

■講義3 不協和の社会・生物モデル:脳神経科学と動物行動学からの知見を

中心に(北山忍)

近年の脳神経科学、動物行動学の知見をもとに、意思決定後に生じる認知的葛藤を説明する「認知的不協和の理論」を批判的に検討し、不協和に関する社会・生物モデルを概説する。

■講義4 一般的他者のイメージと不協和:文化脳神経科学のアプローチ(北山忍)

文化心理学の枠組では、個の独立を重んじる西洋文化では、一般的他者のイメージは「安心」

と結びつき、集団への所属を重んじる東洋文化では「不安」と結びついていると仮定している。この知見を講義3の「不協和の社会・生物モデル」に適用して、その理論的予測とそれを検証する脳波・行動実験を紹介し、今後の方向性を探る。

■講義5 ニッチ構築・境界と道具(入来篤史)

人類進化は、道具の使用や言語獲得などの新たな高次認知能力の継続的な逐次付加過程の繰り返しであり、新たな脳領域の出現に伴う脳の拡大がその基盤となっている。本講義では人間の活動を環境ニッチ構築、神経ニッチ構築、認知ニッチ構築という3種のニッチ構築の円環のプロセスとみなす考え方を論じる。

■講義6 勤と心の曖昧さ・西洋科学と東洋文化の交差(入来篤史)

近代科学の基本的手法では、まずある現象が成立する「境界条件」を設定してその中で還元される要素を吟味・分析・精緻化して現象を理解することを試みる。しかしこの「境界条件」の設定自体が、要素を再統合し全体を理



「こころの科学集中レクチャー」の様子

解するうえで障害となっており、現代科学に閉塞感をもたらしている。こころの研究には、この「境界条件」の横断的融合によって生まれる「高次の拡張された境界条件」を探究する仕組みが求められる。講義ではそれに必要な新たな科学概念や東西の世界観の融合的刷新について考察する。

■受講生の感想から

講義の後には、「こころというテーマに対して様々なアプローチから研究している先生方の話は非常におもしろいと思います。質問やディスカッションの内容や議論が普段とは次元の違うレベルで展開されており、非常に刺激を受けました。(大学院生)」、「今回は神経科学の話題が中心で、心の研究における潮流を感じました。印象的だったのは、話者の先生方が終始示しておられた研究者としての誠実さでした。こうした懐の深い、そして極めて刺激的な議論の場は大変貴重です。(学部生)」など、講義内容や研究に対する講師の姿勢、討議について、多くの感想が寄せられた。

身体と象徴：かたちとちから——力のでる形

木村はるみ（山梨大学大学院教育学研究科准教授）

■行為とかたち

行為は世界への働きかけであり、刻印である。その可視化にはさまざまな次元がある。舞踊もそのひとつである。生き物が描く形姿は、人間が人為的に生産するものばかりではない。鉱物・植物・動物と自然界にはさまざまな形が現れる。人間の視覚に限定されているがミクロ・マクロに常に形は現れている。

たとえば空間上に十字を切るという所作には、宗教的意識以前にその形姿が持つ力があり、その形を取り巻く多次元の空間がある。円形を辿る繰り返しの旋回には意識を超えた（あるいは脱自の）体験が起こり、観る者にもある種の体験を引き起こす。

■ココロココロと回す

イザナギ・イザナミの国生み神話は、混沌の世界に矛を立てて回す。この二神は天の御柱を回り言葉を交わす。現存する神事の中でも回る行為は珍しい。また世界にはさまざまな巡回舞踊がある。スーフィーのように自らの背骨を回転軸として自力で回転するもの、イザイホーのように集団で三重の円形をとる舞踊、中心に向かい収縮し拡散を繰り返す舞踊や、中心に火を焚き、あるいは棒を立てて回る集団舞踊もある。日本の古舞踊を見ると、舞楽には「大輪」と呼ばれる舞名目があるが、神聖な二匹の獅子が左右の階段から登壇し、ゆっくりと交差しながら舞台を一周するだけである。「大和舞」では手に持つ櫛はゆっくりと円形を描き天を仰ぎ地を払う。「東遊び」の舞人4人は旋回しながら円形に配置を変えてゆき、またもとの位置にもどる。民俗芸能でも早池峰神楽などの山伏たちは激しく跳びながら回り踊る。子どもたちの伝承遊戯にも各地で行われる盆踊りなどにも円形は歌や楽とともに現わ

れる。

本研究でフィールド調査した京都市大田神社の巫女神楽では、立位垂直軸で左回3回、右回3回、左回3回の計9回の間に、太鼓に合わせた鈴振り37回が入る。終了時には鈴を小刻みに鳴らす。出雲大社では、巫女は神への拝礼後、円形にゆっくりと歩く。時計回りに2周しすぐに反時計回りで2周、そして太鼓のリズムが変わると鈴を打ち鳴らしながらさらに同様に2周ずつ巡る。この素朴な神の前での円形演技は両者とも祝詞奏上の後に行われる。舞の原型であり、白衣に緋袴装束での女性の立位の回転、旋回、鈴の音のゆっくりとした連打の響きは共通する。一般に処女の奉仕とされる舞が、大田神社では閉経後の女性であることは興味深い。御田植神事などの早乙女舞は初潮前の女子が奉仕する。女性のカラダと力が出る形のひとつの象徴をここに見ることができる。

■芸能とホト

女性の生殖器官とその機能は、現存する神事での力と形にも反映し、日本神話における「ホト」は、生死に関わる女神のカラダの至聖所である。内蔵する器であり境界、わが国の芸能神であるアメノウズメノミコトは、植物を身に纏い、ホトに裳紐を垂れて岩戸の前で太陽再生のワザオギ（俳優）を行い、神々は睨み世界は明るくなる。傀儡族に伝わる神話でもホトはその力を伝える。筑紫舞研究者、鈴鹿千代乃氏によれば、「タケルのミコが海を渡れるようにオトタチバナ姫は海神にホトを見せ、くしげを抜いて海に沈める。海は鎮まりミコは無事に渡れたが、タケル様以外にホトを見せた姫は妃でいらなくなり身を隠す。この代身の舞は人々のために海を鎮める時にのみ舞われ、けっして自分のために舞ってはな

らず、この舞を舞ったものは引退し3年間は神前に出られない」。ホトを持つカラダは、世界変容をもたらす力を秘めながら芸能という形で伝えられる。

■古代の叡智に学ぶ

修行により変容した人のカラダは人々を動かし大きなムーブメントとなる。行基は青年期に十数年間山林修行をし、仏の教えを通して菩薩と言われるまでの霊力をもった人である。通常の人のはるかに超える彼に賛同する者は多く、当時の先端技術を持つ渡来系氏族や貴賤を問わず人生の苦に悩む婦女子も巻き込み、多くの救済と社会事業が展開された。

ホトを持つカラダも、修行により霊力を得るカラダも、利他心あって初めてその力を健全な形へと展開する。巫女や行者ほどではなくとも日常の我々に働くカラダの叡智を再発見することは意味深い。

■「かたちとちから」の体験教育

本研究では奥井遼研究員の協力を得て教育臨床場面における集団で作る形の学習を行った。各個人は1つの形を通して全体とつながる自分を感じ、他者との連動・同調・響合を感じた。また、井上ウィマラ氏の協力で、呼吸と意識の体験を行った。遠い過去の記憶から始まり、己の内言葉が立ち上がるより短時間の記憶の浮上体験を通して意識の構造を予感した後、受講者の「自分」の捉え方は変わった。ペアワークでは自由な呼吸で同調する二人の即興ダンスとなり、様々な流れるようないのちの形姿が現れた。

本研究にご理解・ご協力を賜りました京都大学こころの未来研究センター鎌田東二名誉教授、国立民族学博物館中牧弘允名誉教授に心より御礼申し上げます。

研究プロジェクト

高齢者の認知能力に及ぼす運動の影響

積山 薫 (熊本大学文学部教授)

■ 研究の背景・目的

運動習慣のある高齢者は認知症のリスクが低いことが知られているが、運動がヒトの神経基盤に及ぼす影響の詳細なメカニズムは、ほとんど報告されていない。本研究では、運動が認知機能に及ぼす影響を、視覚性ワーキングメモリ課題中の脳画像を用いて調べることにした。今回のfMRI研究では地域在住高齢者を対象として、運動介入による認知脳機能改善効果を3カ月の体操教室への参加前後で比較する縦断的検討を行うとともに(研究1)、介入前のデータに関して、視覚性ワーキングメモリ課題中の脳活動で運動能力と関連する活動を見出す横断的検討(研究2)、前期高齢者と後期高齢者で脳活動を比較する横断的検討(研究3)を行った。

■ 方法

シルバー人材センターを通じて募集した、地域在住高齢者52名(平均73.6歳)を対象に実験を行った。脳血管障害、変形性関節症、関節リウマチなどの身体機能障害を有する者、および顕著な認知機能低下など精神・心理機能低下の認められる者は含まれていなかった。

全体としては、運動介入を基軸とした地域在住高齢者の縦断的研究である。まず、介入前測定として、参加者の認知機能と運動機能の評価を行うとともに、ワーキングメモリ課題中の脳活動を撮像するfMRIを実施した(Pre測定)。fMRIでは、顔または位置の画像を次々と提示し、1個前に見たものと同じかどうか判断してもらう(1-back)ワーキングメモリ課題を行った。

介入前測定を参加者全員が終了すると、層化無作為割り付け法によって参加者を介入群と非介入群の2群に分け、12週間の介入期間に移行した。介

入として、ストレッチング、筋力トレーニング、二重課題下ステップ・トレーニング(座位・立位)

などを行う体操教室を、約90分、週1回実施した。さらに介入群に対しては、介入期間中、歩数計を携帯してもらい、教室出席時に各週の平均歩数をフィードバックし、活動量の向上を促した。

介入期間の終了後、介入前測定と同じ項目について、再評価を行った。

■ 結果と考察

医師によるMRI構造画像の読影を経て、脳病変が認められた2名を解析から除外した。

研究1:運動介入の効果

脳病変のないMMSE24点以上の参加者を解析対象とし、各群24名ずつのデータを解析した。介入群では非介入群に比して、1日の歩数が有意に上昇するとともに、TMT(実行機能)、WMS-R(エピソード記憶)など、多くの認知機能評価項目において、有意な介入効果が認められた。視覚性ワーキングメモリ課題中の脳活動(1-back - 0-back)では、介入後に活動が減少している部位が前頭前野に見出され、これらの部位で処理の効率が上がったことが示唆された(図1)。これらのことから、運動介入は、行動レベルの成績にも脳活動にも、効果があるといえる。

研究2:運動能力と関連する視覚性ワーキングメモリ中の脳活動

Pre測定の前から、脳病変のないMMSE27点以上であった参加者を解析対象とした。顔と位置をこみにしたfMRIデータ(1-back - rest)を解析



図1 介入効果がみられた脳部位

し、運動機能(Timed-Up & Go Test: TUG)と相関する視覚性ワーキングメモリ中の脳活動を探索した。その結果、左前頭前野にTUG成績と逆相関する部位が、右視床・大脳基底核や両側小脳などの内側部に正相関する部位が見出された。これらの結果から、運動機能の低下している高齢者では、内側部の脳活動が低下しており、それを前頭前野で補っている可能性が考えられる。

研究3:前期高齢者と後期高齢者の脳活動の違い

Pre測定の前から、脳病変のないMMSE24点以上であった参加者を解析対象とし、前期高齢者群(61-70歳)と後期高齢者群(77-82歳)を比較した。ここでは、若年者と比べて高齢者で課題中に脳の過活動がみられるという先行研究の結果が、高齢者内での年齢の増大によってもみられるかどうか、また、それは処理の種類によって異なるかどうかを検討した。顔と位置の刺激を分けてワーキングメモリ課題中のfMRIデータ(1-back - 0-back)を解析した結果、高齢者内でも年齢の増大によって脳の過活動がみられることが分かった。またそれは、ワーキングメモリに関わる右背外側前頭前野と、刺激処理に特異的である紡錘状回(顔)と頭頂連合野(位置)の2つのレベルの活動に確認された。

被災地のこころときずなの再生に芸術実践が果たしうる役割を検証する基盤研究 III

大西宏志 (京都造形芸術大学教授)

■石巻・雄勝の訪問とヒアリング

2014年6月13日から16日にかけて石巻、南三陸、雄勝を訪問した。石巻では香積寺住職でNPO法人しらうめ理事長の川村昭光氏、雄勝では葉山神社・石神社の宮司千葉秀司氏、また南三陸では地元の方から地域の様子をうかがった。そこから、1. 仕事と住宅の復興が遅れているため若者や子育て世代が仙台などに流出している、2. 土木と漁業関連(南三陸ではホテルも)以外の産業が育っていない、3. 瓦礫や倒壊した建物の撤去が進むなか震災の記憶をとどめる取り組みが始まっていることなどが分かった。

■雄勝の海を活用した観光開発

旧雄勝町にある浜や港の景観調査では、旧雄勝町にある浜と港をまわってパノラマ写真に納めた。1941年(昭和16)まで、雄勝地区は十五浜村と呼ばれており、その名のとおり15の浜の連合体が雄勝である。浜ごとに気候・風土が異なり住んでいる人の気質も違う。

雄勝で観光ホテルが成り立つか、周辺地域の観光業に詳しい方にお話をうかがった。「雄勝は震災で人口が900人程度まで減ってしまった。浜ごとの個性を活かすというアイデアは口で言うほど簡単ではない。残った住民が1カ所に集まって新しい町を作るなど大胆な発想が必要だ。雄勝のそばには南三

陸ホテル観洋がある。同じようなことをしても競争できない。目的がハッキリした文化イベントを継続的にやり、雄勝の文化的価値を高めて行くことが必要だ。アカデミックでユニークな何か、例えばバグウォッシュ会議のようなことができれば面白い」とのご意見が聞けた。

Google「海からのストリートビュープロジェクト」に葉山神社(千葉秀司宮司)と京都造形芸術大学(大西)の連名で申し込み採択された。宮城県漁業協同組合雄勝湾支所長の阿部貴之氏、漁師の青木祐次氏、京都造形芸術大学情報デザイン学科副手の檜館はるか氏らの助力を得て9月9日に撮影を行い、10月20日に全世界に公開された。<http://googlejapan.blogspot.jp/2014/06/tohokuseasv.html>

■硯石の粉末の活用

原田憲一研究員のコーディネートで山形大学理学部地球環境学教室の中島和夫教授に硯石の分析を依頼し、化学分析(XRF)と鉱物分析(XRD)、そして放射能分析(セシウム)を実施した。中島教授からは「硯石の分析結果が出ました。添付の表の化学分析シートが化学組成の分析結果です。放射性物質測定シートにゲルマニウム半導体検出器で測定した放射能の結果がありますが、検出されていません。全く問題ありません。鉱物分析(XRD)の結果、含まれるのは石英、黒雲母、緑泥石が大量にあり、少量の斜長石、という結果でした。専門的には、きれいな粘板岩という印象です」とのコメントをいただいた。

日本画家で京都造形芸術大学の松生歩教授に、硯石の粉末をウサギ膠溶液で溶かし、1回塗り、2回塗り、3回塗

りでどのような風合いになるか試していただいた。松生氏からは「使い心地は良好だが、ところどころ粒子の大きな『ダマ』が混ざっているので絵の具として使う場合はもっと念入りに粒子を細かくしておく必要がある」とのコメントをいただいた。黒い絵の具は良いものが少なく、粒子の課題をクリアできれば雄勝石の絵の具がこの分野に参入する余地はある。

■総括と今後の計画

2014年12月3日、京都大学稲盛財団記念館会議室で研究会を実施した。近藤高弘研究員は、今年も宮城県七ヶ宿の土を使って地元の人々と共に器を作り仮設住宅に配る「命の器プロジェクト」を実施した。また、同じ土を使って作った作品『Reduction』を、名取市の閑上海岸に置いてビデオ撮影を行い、パリ日本文化会館で2015年1月に行う『「うつわ(器)」と「うつし(写)」』展に出品した。岡田修二研究員からは、『自然学』(ナカニシヤ出版)に関する報告があった。また、来年アートステージ・シンガポールというイベントに絵画作品を出品するとの報告もあった。秋丸知貴研究員からは、3月にパソフィア京都国際芸術祭に合わせて北野天満宮で実施する「悲とアニマ」展について報告があった。鎌田東二教授監修のもと秋丸研究員が企画を行い、上林壮一郎研究員、岡田研究員、大西研究代表らが出品し、追悼茶会に近藤研究員が参加する。

自由討議では、2015年度の活動について意見交換を行い、5月に予定されている葉山神社の遷座祭の時期に合わせて雄勝石を手がかりにして地域の未来を考えるイベントを開催することを決めた。鎌田教授から「雄勝石から未来を考える～来たるべき自然力と自然観～」というテーマが提案された。



雄勝の撮影範囲

研究プロジェクト

心理療法場面に見られる象徴化機能の現代的問題に関する臨床心理学的研究

前川美行 (東洋英和女学院大学准教授)

■ 研究の目的

心理療法において表現されるメタファーや夢・箱庭・描画などに、自閉症スペクトラムと同様の平板化・羅列化傾向などが増えているという指摘がある。そのようなイメージ表現は、従来の内容的理解や形式面の心理的成熟度理解の視点のみでは把握しきれない特徴があるのではないだろうか。

Panofsky, E. (1964)、諏訪 (1998)、辻 (2005) らの描画分析から西洋の透視図法と日本古来の描画文化を比較すると、日本古来の特徴として、①視点の移動と多視点、②奥行や陰影を意識しないこと、③高い地平線と地面の強調が挙げられる。特に、諏訪の述べる「絶対的空間表現の獲得は必要ではなく、風景の中に自分が入り込んで対象を捉える関係」と「自由に視点を移動して入り込んで描く視点」という特徴は、透視図法的空間構成を心理的成熟とする考えと矛盾するものである。また、平成25年度以前の描画分析研究を行った東洋英和女学院大学研究助成による研究では、透視図的な空間構成が必ずしも心理的成熟度を推測しうるものとは言えない可能性が示唆されていた。さらに、視点移動的な描画は日本古来の意識のあり方の特徴でもあると考えられる。

以上のような観点から、本研究では心理療法におけるイメージ表現を、自験例から経過とともに整理・分析し、考察を行う。イメージ表現の現代的問題の描出により、心理療法におけるイメージ表現の理解を深めることが期待される。

■ 平成26年度の研究内容と結果

平成25年度は先行研究から得られた理論的視点のまとめと、描画・箱庭・夢を用いた心理療法自験例の記録とデータの整理を行った。平成26年度は、

自験例の分析を進めた。対象は、10年以上の経過を持ち、1つの転換点を通過し区切りを迎えているとの認識が得られた心理療法過程である。研究倫理的配慮として、心理臨床学会の倫理基準に従い、本人の研究発表許諾を得て分析した。

〈事例〉

「ADHD成人女性との約12年間の経過」本事例では、自閉症スペクトラム的イメージ表現の特徴を分析・検討した（なお、本事例は現在も継続中であるが、ご本人から転換点を経過したとの認識と許可を得ている）。

「足に力が入らない」との問題で来談されたAさんの面接開始前の心理テストの結果や面接初期の様子からは、パター的な状況対応や常識的な固定観念を身に付けることで適応してきたこと、人への関心が低く細やかな情緒的交流が乏しいこと、体験を語れないことが特徴として挙げられた。身体表現性障害の特徴であるアレキシサイミアも視野に入れ、面接では感情表現を促す働きかけとして、言語のみではなく箱庭療法や夢・描画などイメージ表現を媒介にする心理療法を開始した。面接過程はⅠ～Ⅲ期に分けて考察した。

Ⅰ期：話がわかりにくく、聞いている筆者には感情や状況が理解しにくい。例えば、急に泣き出したので〈なぜ?〉と尋ねると全く関係のない話が展開し、なぜその話になったのかと尋ねても、「何を聞かれたんでしたっけ」と混乱するなどである。次第に自分の体験が自分の中で残らず消えてしまうことや、感情がつかみならず、場違いな感情を感じていることに気づき始める。Ⅱ期：ADHDの特徴が面接場面で顕著に報告され始めた。Ⅲ期：山積み物の服や持ち物に対して、「出来事や感情は自分の中に繋ぎとめられないが、『物』に自分を感ずるのかもしれない」と語り、独特



図1 スクイグル作品

の世界が夢や描画にも表現された。例えば、なぐり描きされた線から何かの形を見出して絵を描く「スクイグル」(図1)を行ったところ、輪郭や目・口などの典型的な配置を持たない「顔」の絵を描いた。あまりの形態の崩れにAさん自身も驚き、視覚的に確認できる描画を通して、Aさん自身も自分に対する理解が深まっていった。その後、次第に感情表現が増え、客観的に自己を語る視点が生じ、話が分かりやすくなっている。経過から得られた考察は以下のとおりである。

- ① ADHDの持つ「まとまりのなさ」「語れなさ」は、「文脈のなさ」と関連すること
- ② その特徴は、文脈を要請する言語表現よりも、具象的なイメージ表現媒体により、表現が促されやすいこと
- ③ 「バラバラ」にこぼれおちる思考や体験が、描画や夢などの具象的表現により繋ぎとめられることで自己感が浮かび上がり、文脈が生まれること

本事例研究は平成27年度に学会発表の予定である。

文献

- Panofsky, E. (1964), Die Perspektive als "Symbolische Form," Verlag Bruno Hessling, Berlin. 木田元監訳, 川戸れい子・上村清雄訳 (1993/2009) 『〈象徴形式〉としての遠近法』ちくま学芸文庫。
 諏訪春雄 (1998) 『日本人と遠近法』ちくま新書。
 辻惟雄 (2005) 『日本美術の歴史』東京大学出版会。

子どもの発達障害と作業療法

長岡千賀 (追手門学院大学経営学部准教授)

■目的

発達障害を持つ子どもの支援の1つとして作業療法が行われている。本プロジェクトの目的は、作業療法におけるセラピストの関わりの特徴を実証的に明らかにすることである。作業療法学の研究者と認知心理学の研究者とが一緒になって研究を進めてきた。

感覚統合理論に基づく作業療法では、特に、治療活動として感覚・運動の要素を含んだ遊びが用いられる。事前にプログラムされている遊びをするのではなく、子どもとセラピストの1対1の相互の関わりから創発された遊びが治療目的に応じて展開されるのだ。そこでは、子どもが、主体的に動いて楽しそうに遊んだり、ちょっと失敗しても挫けずやり直したりする様子が見られる。セラピーを見学に来た学校の先生方は、子どもの様子が、学校でふだん見られるものとずいぶん違うことに驚くそうだ。

では、セラピストのどのような関わり方が子どもを変えているのだろうか。遊び自体の楽しさに加え、それを増幅・補強させるのに似た働きがセラピストによって創りだされているように見える。ただし、子どもとの関わりは質はセラピストの技量によって異なっているように見え、実際、その治療効果が十分に示されていない事例も存在するようだ。

そこで、「熟達したセラピストと、そうでない人とでは、関わり方にどのような違いがあるのか」という問いを立て、それを調べるために次の検討を行った。

■セラピストの声かけ

自閉症と診断された子ども1名に対して、熟達者が施行したセッションと非熟達者が施行したセッション、加えて、異なる子どもに異なる熟達者が施

行したセッションを、ビデオカメラで収録し分析対象とし、セラピストの声かけを切り口に分析した。各セッションにおけるセラピストの発話の意味内容を書き出し、KJ法の手順で分類し、10種類のコードを作成した。ビデオを見ながら、各セッションにおけるセラピストの発話のコード化を行った。本稿では、1名の子どもに対する、熟達者と非熟達者のセッションの比較を紹介する。

分析の結果、子どもが同じような作業活動をしているときでさえ、熟達者と非熟達者とで声かけの仕方が異なることが示された。熟達者の特徴は、子どもが動き始める直前までに、子どもに次の動きを考えさせること(「計画要求」)、子どもが動くのに合わせて実況したり合図したりすること(「合図」)、子どもの作業がいったん終わったところで子どもに感覚や状況を振り返らせること(「省察欲求」と言える(表1))。対照的に、非熟達者は、「計画要求」の代わりに次の動きを具体的に伝え誘導すること(「誘導」)が多く、また「合図」が欠けていた。

一般に、子どもの学習に際して、自分がすることを計画しモニタリングしてコントロールすること、すなわち、自らの学習をメタ認知することは、学習への取り組みや学業成績を向上させる。本結果が示す「計画要求」―「合図」―「内省要求」の声かけは、子どものメタ認知の代行とみなすことがで

表1 熟達したセラピストと子どものやりとりの一例

(Ch. はブランコの上に立ってブランコを揺らしながら、ブランコ前方のセラピストの方を見ている。Ch. はこれまでにブランコから跳んで前方のロープをつかんでぶら下がることを何度か試みた。)

話者 a)	逐語(状況や動作の説明)	コード
Th.	ここ、ここ、ここ(ロープを示しながら)。どれがいい? 1番、2番、3番、何番がいい? 1番、2番、3番。1番と2番でもいいし…2つでもいいし。何番がいい?	誘導 計画要求
Ch.	3	
Th.	3番?! 3番?! (笑)お、じゃ、3番ね。(ブランコ横に戻りブランコを揺らす)ちょっと待って3番、〇〇先生(自身を指して)、3番の方にいきます。3番ですね、はい、わかりました。…3番。	計画要求 環境設定
Th.	いち、にいー(ブランコの横からブランコの紐を持ってブランコを揺らす)…いけ!	合図
Ch.	(ブランコに揺られ、ロープ(吊り輪の位置)に近づくと、片手でロープをつかもうとする。これを2回繰り返す)	
Th.	うはへへへー。だんだん前になってるで。	感動表出 省察要求

a) Ch. は子ども、Th. はセラピストを示す。

きるかもしれない。とすると、子どもは慣れない作業に取り組むのに精一杯なので、セラピストが声掛けしてメタ認知を補助することによって、子どもは作業に専念でき目標達成できていると推測される。その意味で、セラピストは、子どもに手を貸したり遊びの環境を整えたりして物理的に作業をとみにしているばかりでなく、子どものメタ認知の代行として認知的にも作業をとみにする役割を果たしていると言えるかもしれない。現在、本成果を報告すべく準備中であるとともに、異なる熟達者や異なる子どもの事例の分析に着手している。

研究プロジェクト

自然のもつ文化的・教育的・芸術的価値とは

——市民の価値判断を反映したマネジメントに向けて

伊勢武史 (京都大学フィールド科学教育研究センター准教授)

■本研究の目的

自然保護区域はその性質上、環境保全のために利用を制限すべきか、それとも教育や娯楽など市民の福利のために利用を推進すべきか、という対立しがちな2つの目的の両立を迫られている。従来、このバランスは管理者の主観的な判断に委ねられることが多かったが、本プロジェクトでは、市民の享受する「自然の価値」を文化的生態系サービスの側面から評価し、これを最大化するマネジメントの提言を行うことを目的としている。

■調査方法

本研究では、自然保護区域における「環境保全」と「利用の推進」という対立しがちな2つの管理目的の両立と科学的根拠の確立を目指し、市民環境意識などの社会科学的調査と、最新の機材を用いた心理学的調査を実施した。京都大学芦生研究林を中心的なフィールドとしてケーススタディとして行っている。

本研究の成果として、自然の保護と利用という対立しがちなマネジメント方針の最適なバランスを、客観的・科学的に決定するヒントを出すこと、市民の享受する「自然の価値」とは何かを生物学の切り口から提示し、それを最適化する提言を行うことを目指している。

人間が生活していくために欠かせない「自然の恵み」には、さまざまなものがある。もちろん、すぐにお金に換算できる価値(食料や材木などの生産)もあるが、それだけではなく、長くて広い視点で見るときに人々の暮らしに非常に役立つ、治水・生物多様性の保護・炭素の蓄積・教育・娯楽などの価値も忘れてはならない。

近年、このような生態系から得られるさまざまな価値を総合して「生態系

サービス」と呼ぶようになり、この概念を用いた生態系の総合的な理解を進めようとする動きがある。生態系の価値を総合的に認識することにより、「森の木を切って売ればいくらになる」という単純な考えから進歩して、将来も末永く生態系の恵みを受けようとする考え方に関心が寄せられるようになってきた。しかし、これまでのところ、生態系サービスは、その多様さゆ

えに定量的・総合的な価値判断が遅れており、市民や政府が正しい判断を下すための材料としての価値は決して高くなかった。

本研究では、人間が自然から享受する生態系サービスを、(1) 至近要因、および(2) 究極要因の2つの観点から分析することを試みた。

(1) 至近要因

至近要因については、来訪者が自然体験中に受ける感情の動きについて、「刺激→反応」の関係を調べる生物学の手法を応用した。具体的には、被験者にヘルメット搭載型小型ビデオカメラ(ウェアラブルカメラ)を2台同時に装着し(右図参照)、GPS装置を携帯させて研究林内を歩行させ、いつ・どの場所で・何を見・何を聞いたかを記録し、その際の被験者の表情や発話をパソコンで再生しながら特定の要素を目視で観測し、感情の変化を分析する(たとえば興奮するとまばたきの回数が減ることや声のトーンが上がるということが知られている)という手法を用いた。その感情特性の生じた場所の地形や植生を地理情報(GIS)ソフトで解析し、さらに調査の時間帯・季節・天候を考慮することで、特定の反応を引き起こす森林環境を定量的に分析し、人の感情



を左右する至近要因の解明を目指している。

(2) 究極要因

究極要因に関しては、芸術学および美学に関する調査を実施した。芸術に関する学問に自然美学・環境美学があり、自然のうつくしさと、それが人の感情や精神に与える影響についての考察を行っている。これらの視点から見た芦生研究林の美的価値を評価するため専門家を招聘し、聞き取り調査および行動調査を行った。どの場所に美的価値を見出したか、そこに法則性はあるのかを明らかにしようとしている。たとえば写真家は森のどこで感情が動いたのか。GPSとデジタルカメラの撮影時刻の記録をとった。宗教哲学に関しては、フィールド調査で畏怖の念が得られた場所と時間帯などの環境要因を抽出し、巨木や巨石など人類に普遍的に見られるアニミズム(自然崇拜)の対象物がどのような心的効果を持つかを定量的に評価する。得られた結果を生物進化の概念、特に進化心理学で考察し、現代人にも残る生来の欲求を満たす自然環境とはどのようなものか、普遍性と法則性を見出そうとしている。

甲状腺疾患におけるこころの働きとケア

長谷川千紘 (京都文教大学臨床心理学部講師)

■問題・目的

本プロジェクトは、甲状腺疾患専門病院におけるカウンセリングの実践から立ち上げられたもので、甲状腺疾患におけるこころの働きを検討し、それによって心身にわたるよりよいケアのあり方を探るものである。甲状腺疾患は、古くから精神症状を伴う症例が報告され、心理的な問題と関連深いことが示唆されてきた。専門病院に併設されたカウンセリング室では様々な来談者が自らの心理的テーマに取り組んでいる。一方で、精神症状に苦しんでいるのに自発的なカウンセリングには至らず、身体治療のみを続ける患者もまた多い。特に手術という決定的な身体変化を迎える場合には心理面の影響も大きいことが推測されるが、その詳細については不明な部分が多い。心身双方を見据えたケアにつなげていくための第一歩として、本プロジェクトでは手術前後にわたって心理査定を行い、身体的変化に伴う心理指標の変化を明らかにすることを試みる。

■方法

1) 調査協力者：甲状腺疾患4群（バセドウ病初診・バセドウ病手術・結節性甲状腺腫・乳頭癌）に加えて、比較2群（神経症・健常）の計6群。いずれも予後の比較的良好な疾患で、協力者と主治医双方に同意を得ている。

2) 手続き：3種類の心理査定①TAS-20質問紙、②バウムテスト、③半構造化面接を試行した。

■結果・考察

本年度はバウムテストに焦点を当てて、その分析結果を報告する。

1) 疾患群間の差異の検討：バウムの形態に関する79指標についてフィッシャーの直接確率検定を用いて6群間で出現率を比較した結果、39指標に有意

表1 バウムの形態の群間比較

甲状腺疾患群と比較群の差異	① 幹先端処理：「開放系」が多い。 ② 包冠線：「なし」が多い。 ③ 部位接続・空間使用：「不自然な形態」が多い。
甲状腺疾患群内の差異	④ バセドウ病系2群と甲状腺腫瘍系2群は、同系疾患内でそれぞれ類似の傾向を示す。 ⑤ バセドウ病系2群の方が、甲状腺腫瘍系2群よりも自我境界・統合性ともに安定している。
手術群と初診群の差異	⑥ 幹先端処理：バセドウ病系・腫瘍系ともに初診群に開放系が目立つ。 ⑦ 部位接続・空間使用：バセドウ病系では、初診群において統合性良好。

表2 手術前後のバウムの形態比較

バセドウ病群 手術前後の差異	① 幹先端処理：手術後、「開放系」への移行が見られる。 ② 部位接続・空間使用：手術後、「不自然な形態」への移行が見られる。 ③ 一線枝：手術後、増加。
乳頭癌群 手術前後の差異	④ 部位接続・空間使用：手術後、一部「不自然な形態」への移行が見られる。

差、及び有意傾向が見られた。その特徴を整理する（表1）。

一般群・神経症群と比較すると、甲状腺疾患群のバウムは自我境界の脆弱性・統合的視点の持ちにくさなど不安定な形態を示した。

甲状腺疾患群内の差異に着目すると、従来心身相関の指摘されてきたバセドウ病よりも純粋な身体疾患とされてきた甲状腺腫瘍において、この傾向は顕著であった。神経症水準よりも、心身症の水準、身体疾患の水準になるにつれて深い心理的問題が示唆される結果となった。甲状腺疾患においては表面化しないも深い次元において苦しみを抱えている可能性が推測された。

2) バセドウ病・乳頭癌における手術前後の検討：バウムの形態に関する79指標についてフィッシャーの直接確率検定を用いて、バセドウ病・乳頭癌それぞれ手術前後の出現率を比較した結果、バセドウ病7指標・乳頭癌1指標に有意差、及び有意傾向が見られた。その特徴を整理する（表2）。

手術後、バセドウ病群は自我境界・

統合性ともに不安定な形態に移行し、乳頭癌群はほぼ変化がなかった。心身症水準のバセドウ病では、決定的な身体変容とともに心理的な変容も生じつつあり、いったん心理的に不安定になる可能性がある。半構造化面接では、手術を契機にこれまでの自らのあり方を振り返り、「悩み」始める者が見られ、心身の同期的変化がうかがわれる。一方、甲状腺乳頭癌では、手術は身体のことに留まり、そこから自らを振り返るような心理的動きは起こりにくい。身体のこととこころのことがより遠く離れていると考えられる。ただ手術前バウムに見られる形態の不安定さは解消されたわけではないため、自覚されていない深い次元で心理的な苦しみを抱えている可能性があり、留意が必要だろう。

謝辞：本プロジェクトは、神甲会隈病院の協力のもと、行われた。

吉川左紀子

論文

Nishiguchi, S., Yamada, M., Tanigawa T., Sekiyama, K., Kawagoe T., Suzuki, M., Yoshikawa, S., Abe, N., Otsuka, Y., Nakai, R., Aoyama, T. & Tsuboyama, T. (2015) "12-Week Physical and Cognitive Exercise Program Can Improve Cognitive Function and Neural Efficiency in Community-Dwelling Older Adults: A Randomized Controlled Trial." *Journal of the American Geriatrics Society*, 63(7), 1355-1363. DOI: 10.1111/jgs.13481.

長岡千賀, 加藤寿宏, 松島佳苗, 吉川左紀子 (2015) 「子どもへの作業療法におけるセラピストの専門的技法——セラピストの声掛けに関わる分析手法の検討」『電子情報通信学会技術研究報告』115 (35), 227-232, IEICE-HCS2015-34.

Kawagoe, T., Suzuki, M., Nishiguchi, S., Abe, N., Otsuka, Y., Nakai, R., Yamada, M., Yoshikawa, S. & Sekiyama, K. (2015) "Brain activation during visual working memory correlates with behavioral mobility performance in older adults." *Frontiers in Aging Neuroscience*, 7, 186. DOI: 10.3389/fnagi.2015.00186.

長岡千賀, 矢野裕理, 小山内秀和, 松島佳苗, 吉川左紀子, 加藤寿宏 (2016) 「子どもへの作業療法におけるセラピストの専門的技法——Event Segmentationを用いた定量的検討」『電子情報通信学会技術研究報告』115 (418), 97-100, IEICE-HCS2015-75.

著書

吉川左紀子 (2016) 「こころ学の効用」吉川左紀子, 河合俊雄 (編著) 『こころ学への挑戦』創元社, 219-240.

吉川左紀子 (2016) 「コラム1 こころの未来」子安増生, 楠見孝, 齊藤智, 野村理朗 (編) 『教育認知心理学の展望』ナカニシヤ出版, 16.

吉川左紀子 (2016) 「感情心理学——人と人が出会うとき」内田伸子, 板倉昭二 (編) 『高校生のための心理学講座——こころの不思議を解き明かそう』誠信書房, 77-92.

学会発表

布井雅人, 吉川左紀子 「顔画像の選好判断に他者の数と表情が及ぼす影響」日本認知心理学会第13回大会 (東京都) 2015.7.5.

Minemoto, K. & Yoshikawa, S. "Intensity of the facial expressions influences the aftereffect of facial expressions." The 38th European Conference on Visual Perception (ECVP 2015). Liverpool University (Liverpool, U.K.) 2015.8.24.

長岡千賀, 松島佳苗, 吉川左紀子, 加藤寿宏 「セラピストの声掛けに関する予備的検討」第33回日本感覚統合学会研究大会 (アステールプラザ, 広島市) 2015.11.1.

講演等

吉川左紀子 「こころを知り、未来を考える：日本人の幸福感」夜の森の教室 (法然院, 京都市) 2015.5.9.

吉川左紀子 「組織の文化と人間関係：幸福感を育む」第29回近畿女性施設長フォーラム (奈良ホテル, 奈良市) 2015.6.16.

吉川左紀子 「基礎科学の知を实践地とつなぐ——作業療法への期待」作業療法神経科学研究会第1回学術集会基調講演 (北海道大学学術交流会館, 札幌市) 2015.7.25.

吉川左紀子 「認知心理学——顔・表情認知を中心に」日本心理学会公開シンポジウム 高校生のための心理学講座シリーズ関西地区 「心理学と社会——こころの不思議さを解き明かす」(京都女子大学, 京都市) 2015.8.8.

吉川左紀子 「共感と信頼が生まれるコミュニケーション」花王講話 (茅場町花王本社ビル, 東京都) 2015.9.28.

吉川左紀子 「こころの研究」第1回先端研フロンティア講座 (パナ

ソニック株式会社先端研究本部西門真地区A棟, 門真市) 2015.10.1.
吉川左紀子 「くらしの豊かさところの豊かさ」特別講義 (甲賀探求講演会) (水口東高等学校, 甲賀市) 2015.10.19.

吉川左紀子 「人間関係とコミュニケーション」京都府看護協会実習指導者講習会 (京都府看護協会研修センター, 京都市) 2015.10.28.

吉川左紀子 「心理学からみた作業療法の熟達」第35回近畿作業療法学会特別講演 (京都テルサ, 京都市) 2015.11.22.

吉川左紀子 「『より良い生』により添って聴く」温もりの電話 平成27年度第2回全体研修会 (ハートンホテル京都, 京都市) 2016.1.15.

吉川左紀子 京都大学デザイン学大学院シンポジウム 「心のデザイン」指定討論 (京都大学百周年時計台記念館大ホール, 京都市) 2016.3.25.

社会活動等

日本認知心理学会理事.

文部科学省研究成果展開事業 「センター・オブ・イノベーションプログラム」構造化チーム委員.

文部科学省大学設置・学校法人審議会 (大学設置分科会) 専門委員.

日本学術振興会・科学研究費委員会専門委員.

京都市社会教育委員.

(公) ひと・健康・未来研究財団理事.

船橋新太郎

論文

船橋新太郎 (2015) 「実行機能と前頭連合野の関与」『心理学評論』58 (1), 55-71.

船橋新太郎 (2015) 「書評 小野武人著『情動と記憶——しくみとはたらき』」『比較生理生化学』32 (1), 49.

船橋新太郎 (2015) 「巻頭言 前頭連合野研究とワーキングメモリ仮説」『日本神経回路学会誌』22 (1), 1-2.

Funahashi, S. (2015) Functions of delay-period activity in the prefrontal cortex and mnemonic scotomas revisited. *Frontiers in Systems Neuroscience*, 9, 2. DOI:10.3389/fnsys.2015.00002.

Watanabe, K. & Funahashi, S. (2015) Primate model of interference control. *Current Opinion in Behavioral Sciences* 1, 9-16. DOI:10.1016/j.cobeha.2014.07.004.

Ichihara-Takeda, S., Yazawa, S., Murahara, T., Toyoshima, T., Shinozaki, J., Ishiguro, M., Shiraiishi, H., Ikeda, N., Matsuyama, K., Funahashi, S., & Nagamine, T. (2015) Modulation of alpha activity in the parieto-occipital area by distractors during a visuospatial working memory task: a magnetoencephalographic study. *Journal of Cognitive Neuroscience*, 27, 453-463. DOI:10.1162/jocn_a_00718.

Li, B.-M. & Funahashi, S. (2015) A step forward in the understanding of prefrontal cortical functions. *Neuroscience Bulletin*, 31, 61-163. DOI:10.1007/s12264-015-1516-2.

Watanabe, K. & Funahashi, S. (2015) A dual-task paradigm for behavioral and neurobiological studies in nonhuman primates. *Journal of Neuroscience Methods*, 246, 1-12. DOI:10.1016/j.jneumeth.2015.03.006.

船橋新太郎 (2015) 「同時に2つのことをうまくできないのはなぜか」『医学のあゆみ』253 (8), 659-670.

渡邊慶, 船橋新太郎 (2015) 「二重課題の神経生物学——二重課題干渉効果と前頭連合野の役割」『霊長類研究』31, 87-100. DOI:10.2354/psj.31.009.

船橋新太郎 (2015) 「視覚刺激に対する嗜好性と前頭葉眼窩部の関与」『Brain and Nerve (神経研究の進歩)』67 (6), 711-722.

渡邊慶, 船橋新太郎 (2015) 「2つのことを同時にうまくできないのはなぜか——二重課題干渉を生じるメカニズム」『Brain and Nerve (神経研究の進歩)』67 (10), 1215-1229.

船橋新太郎 (2015) 「意思決定に及ぼす情動の影響——前頭連合野眼窩部の機能を中心に」渡邊正孝, 船橋新太郎 (編) 『情動と意思決定』朝倉書店, 164-194.

竹田里江, 山下聖子, 宮田友樹, 竹田和良, 池田望, 松山清治, 船橋新太郎 (2015) 「日常生活場面を取り入れたコンピュータを用いたワーキングメモリ訓練の効果」『精神科治療学』30 (12), 1641-1647.

Funahashi, S. (2015) Neural mechanism of dual-task interference. *Kyoto University Research Activities*, 5 (3), 22.

Funahashi, S. (2015) Developing a new model for working memory. *Kyoto University Research Activities*, 5 (3), 17.

著書

船橋新太郎 (2016) 「脳の働きを通して, こころを探る」吉川左紀子, 河合俊雄 (編著) 『こころ学への挑戦』創元社, 9-45.

学会発表

Mochizuki, K. & Funahashi, S. Miniature fixational eye movements reflect spatial decision-making process during a memory-guided saccade task. Japan-China Joint Symposium "Understanding Cortical Cognitive Functions" (京都大学稲盛財団記念館, 京都市) 2015.8.01.

Mochizuki, K. & Funahashi, S. Opposing history effect of decision and action revealed by a free choice memory-guided saccade paradigm. Japan-China Joint Symposium "Understanding Cortical Cognitive Functions" (京都大学稲盛財団記念館, 京都市) 2015.8.01.

Mochizuki, K. & Funahashi, S. Fluctuation of spatial representation and the dynamics of decision-making in prefrontal neuronal network. Japan-China Joint Symposium "Understanding Cortical Cognitive Functions" (京都大学稲盛財団記念館, 京都市) 2015.8.01.

Funahashi, S. & Nakamoto, W. Monkey's preference for visual items and orbitofrontal neural activities. Japan-China Joint Symposium "Understanding Cortical Cognitive Functions" (京都大学稲盛財団記念館, 京都市) 2015.8.01.

Funahashi, S. & Nakamoto, W. Preference judgment of visual items and contribution of the orbitofrontal cortex in monkeys. Society for Neuroscience Meeting (Neuroscience 2015) (Chicago, USA) 2015.10.18.

Spaak, E., Watanabe, K., Funahashi, S., & Stokes, M. Stable and dynamic coding for working memory in primate prefrontal cortex. Society for Neuroscience Meeting (Neuroscience 2015) (Chicago, USA) 2015.10.19.

Durnez, M., Constantinidis, C., Funahashi, S., Hansel, H., & Mongillo, G. Persistent activity as a result of stimulus-driven network-wide re-organization of the pattern of firing rates. Society for Neuroscience Meeting (Neuroscience 2015) (Chicago, USA) 2015.10.19.

船橋新太郎 「前頭連合野の意思決定への関与」科学技術振興機構さきがけ研究21「知と構成」領域第16回懇話会(グランドホテル白山, 白山市) 2015.10.31.-11.01.

船橋新太郎, 中本若奈 「質感の変化による選好性の変化と前頭葉眼窩部の役割」第5回日本情動学会(学習院大学, 東京都) 2015.11.29.

柴田柚香, 桑原彩, 小川詩乃, 船曳康子, 正高信男, 船橋新太郎 「左前頭葉脳腫瘍を摘出した児童の遂行機能の検討(1)——Frontal Assessment Batteryと後出し勝ちじゃんけんを用いて」第13回日本ワーキングメモリ学会(京都大学, 京都市) 2015.12.19.

桑原彩, 柴田柚香, 小川詩乃, 正高信男, 船曳康子, 船橋新太郎 「左前頭葉脳腫瘍を摘出した児童の遂行機能の検討(2)——Stroopテ

スト, Trail Makingテストおよびカード並べ課題を用いて」第13回日本ワーキングメモリ学会(京都大学, 京都市) 2015.12.19.

船橋新太郎 「動物の脳からヒトのこころを探る」京都大学こころの未来研究センター研究報告会2015(京都大学稲盛財団記念館, 京都市) 2015.12.20.

カール・ベッカー

著書

カール・ベッカー (編著) 駒田安紀 (監訳) (2015) 『愛する者は死なない——東洋の知恵に学ぶ癒し』晃洋書房.

カール・ベッカー, 奥野元子 (編著) (2015) 『愛する者をストレスから守る——瞑想の力』晃洋書房.

カール・ベッカー (2016) 「理想的な終焉と仏教の役割」『仏教講座講義録 ころのめざめ』22, 長野市南長野仏教会, 77-114.

カール・ベッカー (2016) 「ケア現場の『こころ学創成』『こころの未来』」15, 24-27

カール・ベッカー (2016) 「『こころ学』を考える——3つの側面と3つの研究プロジェクト」吉川左紀子・河合俊雄編『こころ学への挑戦』創元社, 129-166.

講演

カール・ベッカー 「医療従事者の死生観と日本人の経験智」天理医療大学公開講演会(天理医療大学, 天理市) 2015.5.9.

カール・ベッカー 「日本人の死生観と寺院の存在」ピハラー・福岡公開講座(専立寺, 福岡市) 2015.5.23.

カール・ベッカー 「人生の意味と死について考える」NHK文化センター京都教室講座(NHK京都教室, 京都市) 2015.6.15.

カール・ベッカー 「有意義な人生を生きるために——超高齢化・災害多発・経済低迷社会に生きる」いのち教育セミナー2015(上越教育大学, 上越市) 2015.7.18.

カール・ベッカー 「長寿社会のケアを考える——熟年の生を支える看護」第21回日本看護診断学会学術大会基調講演(フェニックスプラザ, 福井市) 2015.7.19.

カール・ベッカー 「『生老病死』に生きる日本人の経験智」連続講演会「東京で学ぶ京大の知」シリーズ18(「生命・いのち」)第3回(京都大学東京オフィス, 東京都) 2015.7.23.

カール・ベッカー 「研究目標の考え方・絞り方」政策のための科学レクチャー(京都大学人環ホール, 京都市) 2015.9.3.

Becker, C. (2015) "Death is NOT the End." Institute of Life and Death Studies. (Hallym University, Korea) 2015.9.11.

カール・ベッカー 「西洋の生命倫理は日本人の死生観に合うのか?」宗教倫理学会第16回学術大会「現代社会における生命倫理と宗教」記念講演(キャンパスプラザ京都, 京都市) 2015.10.3.

Becker, C. "Food Ethics: A View from Japan" (台湾大学高等研究院, 台北) 2015.10.24.

カール・ベッカー 「日本人の伝統知」カワタキコーポレーション(ホテルグランピア京都, 京都市) 2015.10.29.

カール・ベッカー 「自分らしい理想の最期——生と死を考える」日本尊厳死協会関西支部講演会(シルク・ホール, 京都市) 2015.11.1.

カール・ベッカー 「生と死のケア——日本伝統の知恵に癒しを学ぶ」第25回神経・リハビリテーション研究会記念講演(京都テルサ, 京都市) 2015.11.6.

カール・ベッカー 「京都府教育振興プラン28年度改訂について」京都府教育委員会(京都ルビノ堀川, 京都市) 2015.11.20.

カール・ベッカー「日本人の死生観と仏教者の役割」日蓮宗ビハーラネットワーク第12回「心といのちの講座」(日蓮宗宗務院講堂, 東京都) 2015.11.27.

カール・ベッカー「介護からこころを問い直す」上廣こころ学研究部門2015年度研究報告会「身体(からだ)からこころを問い直す」(稲盛記念会館大会議室, 京都市) 2015.12.20.

カール・ベッカー「今を大切に生きる——理想的な終焉を見つめて」がん患者グループ「ゆずりは」2016年1月定例会(兵庫県民会館, 神戸市) 2016.1.9.

カール・ベッカー「看護師の倫理」武田病院倫理研修(武田病院, 京都市) 2016.1.25.

カール・ベッカー「日本的・佛教的スピリチュアル・ケア」浄土宗大阪地区(大阪国際ホテル, 大阪市) 2016.1.26.

カール・ベッカー「やりがい感とは看護師を疲弊から守れるか」住友病院(中之島, 大阪市) 2016.1.30.

カール・ベッカー「環境倫理」京都大学大学院総合生存学館思修館(思修館, 京都市) 2016.2.2.

カール・ベッカー「阿弥陀信仰の科学的根拠」第9回仏教伝道協会(BDK)シンポジウム「仏教における科学と信仰」(仏教伝道センタービル, 東京都) 2016.2.12.

カール・ベッカー「『理想の終焉』とは何かを考える」中日新聞50周年特別講演会(中日新聞名古屋本部, 名古屋市) 2016.2.23.

カール・ベッカー「やりがい感とは看護師を疲弊から守れるか——国際比較的な視座から」大阪医科大学看護学部研究活動報告会(高槻市) 2016.3.5.

カール・ベッカー「今後求められる葬儀社のあり方」全葬連平成28年度予算総会記念講演(品川プリンスホテル, 東京都) 2016.3.14.

カール・ベッカー「上廣倫理財団の活動と希望」Cross-Currents(ハワイ大学, ハワイ) 2016.3.18.

Becker, C. "Stress and Environment-Lessons from Japan" Buddhist Study Group, (Moiilili Hongwanji, HI, USA) 2016.3.19.

社会活動

日本人体科学会理事.

日本宗教学会理事.

日本実存心身療法研究会理事.

日本自然治癒力研究会理事.

日本生命倫理学会理事.

日本精神医学史学会評議員.

国際生命情報科学会評議員.

日本スピリチュアル・ケア学会理事.

日本医学哲学・倫理学会評議員.

仏教看護ビハーラ学会評議員.

仏教心理学会評議員.

国際統合医学会評議員.

Mortality Journal 編集員.

Near-Death Studies Journal 編集員.

Taiwan East Asian Studies Journal 編集員.

British Journal of Spirituality 編集員.

Personalized Medicine Universe 編集員.

河合俊雄

論文

河合俊雄(2015)「ユング派からみた発達障害」『そだちの科学』,

24, 20-25.

長谷川千紘・梅村高太郎・西垣紀子・鍛治まどか・河合俊雄・田中美香・金山由美・桑原晴子・深尾篤嗣・宮内昭「半構造化面接からみた甲状腺疾患患者の心理的特徴」『日本心療内科学会誌』, 19(4), 237-244.

河合俊雄(2016)「心理療法における猫」、『imago 総特集猫! (現代思想3月臨時増刊号)』, 119-128.

河合俊雄(2016)「震災後のこころのケア活動」『imago 総特集(こころ)は復興したのか3.11以後, それぞれの現場から (現代思想4月臨時増刊号)』 129-139.

河合俊雄(2016)「心理療法における暴力の浄化とその危険: ユングの体験から」『身心変容技法研究第』5号, 70-74.

著書

河合俊雄(2015)『ユング 魂の現実性』岩波現代文庫.

河合俊雄「こころの歴史的 innerization とインターフェイス」河合俊雄・中沢新一・広井良典・下條信輔・山極寿一(2016)『〈こころ〉はどこから来て, どこへ行くのか』岩波書店, 39-72.

河合俊雄「閉じることと開くことの逆説」河合俊雄・中沢新一・広井良典・下條信輔・山極寿一(2016)『〈こころ〉はどこから来て, どこへ行くのか』岩波書店, 201-212.

河合俊雄「実践とリフレクションとしてのこころ学」吉川左紀子・河合俊雄(編著)(2016)『こころ学の挑戦』創元社, 167-192.

編集・監訳

ジェイムズ・ヒルマン, ソヌ・シャムダサーニ著, 河合俊雄(監訳), 名取琢自(訳)(2015)『ユング『赤の書』の心理学—死者の嘆き声を聴く』創元社.

学会発表

皆本麻実・畑中千紘・梅村高太郎・井芹聖文・土井奈緒美・長谷川藍・田附紘平・松波美里・岡部由菜・粉川尚枝・鈴木優佳・河合俊雄・田中康裕「『発達障害』とは見立てられない子どものプレイセラピー(1)——発達障害と診断される要因とプレイセラピーの特徴」日本箱庭療法学会第29回大会(東北福祉大学, 仙台市) 2015.10.11.

田附紘平・松波美里・鈴木優佳・畑中千紘・梅村高太郎・井芹聖文・土井奈緒美・長谷川藍・皆本麻実・岡部由菜・粉川尚枝・河合俊雄・田中康裕「『発達障害』とは見立てられない子どものプレイセラピー(2)——三事例のプロセスの検討から」日本箱庭療法学会第29回大会(東北福祉大学, 仙台市) 2015.10.11.

講演

河合俊雄 第23回内分泌糖尿病心理行動研究会シンポジウム「身体疾患の治療と人の個別的ケア」(グランフロント大阪, 大阪市) 2015.4.5.

河合俊雄「夢と現実」日本ユング派分析家協会春学期セミナー(連合会館, 東京都) 2015.4.26.

Kawai, T. "Recent increase of ASD patients and the problem of agency in Japan" (International symposium: Culture and Clinical Psychology Perspectives for the KOKORO Well-being Studies, Kyoto) 2015.6.14.

Kawai, T. Loss and recovery of transcendence in Jungian psychology and Hua-Yen School of Buddhism. Fourth Joint Conference of the IAAP and the IAJS (Yale University, the United States) 2015.7.9-7.12.

河合俊雄「症状と夢における自己関係」日本箱庭療法学会2015年度第1回全国研修会(大正大学, 東京都) 2015.7.15.

河合俊雄「心理療法における夢へのアプローチ」日本ユング心理学会研修会(京都市) 2015.9.6.

河合俊雄「こころの歴史的 innerization とインターフェイス」第1回京都

こころ会議シンポジウム（京都ホテルオークラ，京都市）2015.9.13.
Kawai, T. "Deep Psychological Confrontation with the Collective Trauma of Japanese Militarism and 2nd World War" The Seventh International Conference of Analytical Psychology and Chinese Culture : Confronting Collective Trauma: Archetype, Culture and Healing. (Macao University, China) 2015.10.21-23.

Kawai, T. "Social contribution of Analytical Psychology as outreach and supervision: Passivism as activism" The 2nd Conference of Analysis and Activism: Social and Political Contributions of Jungian Psychology (Roma, Italy) 2015.12.4-7.

河合俊雄「夢と私：二者、三者、四者、場」日本ユング派分析家協会冬学期セミナー（連合会館，東京都）2016.1.10.

河合俊雄「イメージの世界の家族との共有と分化」2015年度第2回日本箱庭療法学会全国研修会（京都リサーチパーク，京都市）2016.2.28.

河合俊雄「心理療法における夢へのアプローチ」第2回日本ユング心理学会研修会（京都アスニー，京都市）2016.3.6.

河合俊雄「現代と物語」島根県臨床心理学研究会主催特別研修会（一般公開，松江テルサ，島根県松江市）2016.3.13.

シンポジウム

「東アジアのユング派心理療法」シンポジスト。日本ユング心理学会第4回大会国際シンポジウム（京都文教大学，京都府宇治市）2015.6.6.

「“ゆらぎの物語”を創る」シンポジスト。日本箱庭療法学会第29回大会一般公開シンポジウム（東北福祉大学，宮城県仙台市）2015.10.10.

「谷川俊太郎さんに聞くー河合隼雄の思い出」インタビュアー（京都大学稲盛財団記念館，京都市）2015.10.12.

河合俊雄「心理療法とこころのワザ学」鎌田東二教授退職記念講演会・シンポジウム（京都大学芝蘭会館稲盛ホール，京都市）2016.2.21.

新聞掲載

「『大人にならなくてもよい時代』は来るのか」（朝日新聞日曜版GLOBE，2015年7月5日）

「現代小説必然的に複雑化」読売新聞，2015年8月4日。

「震災後のこころの痛みを考える シンポに500人参加」毎日新聞宮城版，2015年10月19日。

「文化庁 京都移転決定 新しい文化発信、使命に」京都新聞，2016年3月30日。

その他

河合俊雄「解説」『河合隼雄の読書人生——深層意識への道』（2015）岩波現代文庫。

河合俊雄「解説」河合隼雄『こころの天気図』（2015）PHP研究所

河合俊雄「解説」河合隼雄『河合隼雄自伝—未来への記憶—』（2015）新潮文庫

河合俊雄「解説」河合隼雄（河合俊雄編）（2015）『「出会い」の不思議』創元こころ文庫

三輪敬之・西洋子・河合俊雄「場への信頼—共に在ること、創ること—」（シンポジウム記録）『箱庭療法学研究』2，8（1）99-130.

河合俊雄（2016）「門馬論文についてのコメント」『学習院大学大学院臨床心理学研究』第10号。

鎌田東二

論文

鎌田東二（2015）「分子の脱自——宮沢賢治のトーテミズム，その墮落と飛行」佐藤泰正（編）『宮沢賢治の切り拓いた世界は何か（梅光学院大学公開講座論集63）』笠間書院。

鎌田東二（2015）「戸隠の山と水のコスモロジー」『戸隠信仰の諸相』戸隠神社。

鎌田東二（2015）『『人文学』と『日本研究』と『和』の思想』『日本研究』第16輯，国立釜山大学校日本研究所。

鎌田東二（2015）『『古事記』（712年編纂）出雲神話における須佐之男命と大国主神の治癒と平和を生み出す生命思想と霊性』韓中日国際シンポジウム「生命と平和、治癒と霊性から見た退溪学」大会論文集，嶺南退溪学研究院・陶山ソソビ文化修練院（韓国）。

鎌田東二（2015）「息絶えぬ原始の看取り」月刊『MOKU』2016年1月号，MOKU出版。

鎌田東二（2016）『『和の国』の原点と未来』『天河太々神楽講社通信』14，天河大辨財天社。

鎌田東二（2016）「神道とは何か？——ユーラシア・環太平洋交響楽としての神道」竹本忠雄（監修）『霊性と東西文明 日本とフランス——「ルーツとルーツ」対話』勉誠出版。

Kamata, T. (2016) Shinto Research in Japan and its Questions and Contributions to the Humanities. *Zygon: Journal of Religion and Science*, 51(1), 43-62.

Kamata, T. (2016) "Shinto Religion and Japanese Civilization" Targowski, A., Juri Abe, J. & Hisanori Kato, H. (Eds.) *Japanese Civilization in the 21st Century*, Nova Science Publishers, 67-78.

鎌田東二（2016）「身心変容技法と霊的暴力——宗教経験における負の感情の浄化のワザに関する総合的研究」『身心変容技法研究』5，京都大学こころの未来研究センター。

鎌田東二（2016）『『こころの練り方』探究事始めその六——遠藤周作と石牟礼道子の『汎神論』』『モノ学・感覚価値研究』10，京都大学こころの未来研究センター。

著書

鎌田東二（企画・編）（2015）『講座スピリチュアル学第3巻 スピリチュアリティと平和』BNP。

鎌田東二（監修）（2015）『図説 地図とあらすじでわかる！ 山の神々と修験道』青春出版社。

鎌田東二，一条真也（2015）『満月交遊 ムーンサルトレーター（上・下）』水曜社。

鎌田東二他（共著）（2015）『身体の知——湯浅哲学の継承と展開』BNP。

鎌田東二（企画・編）（2015）『講座スピリチュアル学第4巻 スピリチュアリティと環境』BNP。

鎌田東二（企画・編）（2015）『講座スピリチュアル学第5巻 スピリチュアリティと教育』BNP。

鎌田東二他（共著）（2016）『宗教の壁を乗り越える——多文化共生社会への思想的基盤』ノンブル社。

鎌田東二（2016）『世直しの思想』春秋社。

鎌田東二他（共著）（2016）『火山と日本の神話——亡命ロシア人ワノフスキーの古事記論』桃山堂。

鎌田東二（2016）『世阿弥—身心変容技法の思想』青土社。

鎌田東二（企画・編）（2016）『講座スピリチュアル学第6巻 スピリチュアリティと芸術・芸能』BNP。

鎌田東二（2016）「こころのワザ学と日本文化」吉川左紀子，河合俊雄（編著）『こころ学への挑戦』創元社，73-100.

講演

鎌田東二「ササノヲカの時代」『ササノヲの到来——いのち，いかり，いのり』展（北海道立函館美術館，函館市）2015.4.11.

鎌田東二「アジア共同体論——アジア的思维方式から考えるアジア共同体の未来」（国立順天大学校，韓国）2015.4.22.

鎌田東二「東北のスサノヲ, 東北とスサノヲ」『スサノヲの到来——いのち, いかり, いのり』展 (山形芭蕉記念館, 山形市) 2015.7.25.

鎌田東二「スサノヲと場所の力——渋谷の地と氷川神社とスサノヲ神話のコスモロジー」『スサノヲの到来——いのち, いかり, いのり』展 (渋谷区立松涛美術館, 東京都) 2015.9.6.

鎌田東二「さよならトークライブ」(恵文社一乗寺店 COTTAGE, 京都市) 2016.3.25.

メディア掲載

鎌田東二「京都現代藝苑2015と北野天満宮『悲とアニメ展』 伝統の上に新たな表現 鎮魂供養の思い込めて」徳島新聞, 2015年4月1日.

鎌田東二「天災の国日本と人災の国韓国 文化共同体の実現目指し 良好な関係構築必要」徳島新聞, 2015年5月1日.

鎌田東二「基地の島と神の島——『久高オデッセイ』三部作完成」徳島新聞, 2015年6月1日.

インタビュー記事「挽歌の宛先 祈りと震災(50) 歌ならきつと一つに 言葉の意味を超え被災者の心に深く」河北新報, 2015年6月10日.

鎌田東二, 金泰昌(対談)「韓人と日本人の対話・協働・開新が始動 日本の霊性とハンの霊性」未来共創新聞(オフィス21), 2015年6月22日

鎌田東二「春日大社と国宝本殿特別公開 白磐座が放つ神秘力 霊性考え直すきっかけに」徳島新聞, 2015年7月1日.

鎌田東二「死生観の今と昔——いのち・自然・ものがたり」『兵庫・生と死を考える会会報』61, 2015年7月16日.

大重潤一郎(監督) 鎌田東二(製作)「大重潤一郎監督の記録映画『久高オデッセイ』第三部風章, 完成」毎日新聞, 2015年7月20日.

鎌田東二「秘められた声を聞く 未来を切り開くために 安保法案強行採決の愚と神の島のいのちのメッセージ」徳島新聞, 2015年8月1日.

鎌田東二「誕生と死と再生——北海道旭岳と福島からのいのちの挑戦」徳島新聞, 2015年9月1日.

鎌田東二「『神』としての火山活動 荒ぶる自然をおそれる」大分合同新聞(夕刊), 2015年9月14日.

鎌田東二「平成は兵制か? 『乱世』に突入と直感 『平和に成る』道求め行動」徳島新聞, 2015年10月1日.

鎌田東二「大学と学問の未来 創造性の発現 喫緊の課題 論文以外の表現可能」徳島新聞, 2015年11月2日.

鎌田東二「韓国儒学の道徳・生命・霊性・礼楽 連携に基づく『美学』 未来倫理となり得る思想」徳島新聞, 2016年1月4日.

鎌田東二「翁童論と幼老包括ケア 老人と子ども対関係 生死のエッジ生きる存在」徳島新聞, 2016年2月1日.

鎌田東二「二つの最終講義 詩歌は希望見いだす 悲しみや怒り浄化の力に」徳島新聞, 2016年3月1日.

ラジオ出演

鎌田東二「アール・ブリュットをきっかけに人の営みを考える」『glow——生きることが光になる』KBS京都ラジオ, 2015年10月16日・23日(21:30~21:55).

映画製作

大重潤一郎(監督) 鎌田東二(製作)(2015)『久高オデッセイ第三部 風章』.

内田由紀子

論文

内田由紀子(2015)「日本の若者の幸福感と文化的基盤——個人主義と関係志向の狭間で」『現代の社会病理』30, 57-67.

笹川果央理, 竹村幸祐, 内田由紀子(2015)「自己価値の随伴性と従業員の心理的健康」『ストレス科学研究』30, 131-137.

Park, J., Uchida, Y., & Kitayama, S. (2015) Cultural variation in implicit independence: An extension of Kitayama et al. 2009. *International Journal of Psychology*, 2015, Online Version DOI:10.1002/ijop.12157.

Hitokoto, H. & Uchida, Y. (2015) Interdependent Happiness: Theoretical Importance and Measurement Validity. *Journal of Happiness Studies*, 16, 211-239. DOI:10.1007/s10902-014-9505-8.

Uchida, Y., Kanagawa, C., Takenishi, A., Harada, A., Okawa, K., & Yabuno, H. (2015) How did the media report on the Great East Japan Earthquake? Objectivity and emotionality seeking in Japanese media coverage. *PLoS One*, 10(5):e0125966. DOI:10.1371/journal.pone.0125966.

京野千穂, 内田由紀子, 吉成祐子(2015)「援助行動に対する話者の認知が授受補助動詞テモラウ・テクレルの使用に与える影響——質問紙調査による分析」『社会言語科学』17(2), 56-67.

長岡千賀, 内田由紀子(2015)「原子力発電所の定期検査における労働職場環境のストレスと精神的健康の構造——放射線管理員と非破壊検査員を例とした予備的検討」『計画行政』38(2), 33-44.

Morling, B., Uchida, Y. & Frentrup, S. (2015) Social support in two cultures: Everyday transactions in the U.S. and empathic assurance in Japan. *PLoS One*, 10(6):e0127737. DOI:10.1371/journal.pone.0127737.

Uchida, Y., & Norasakkunkit, V. (2015) The NEET and Hikikomori spectrum: Assessing the risks and consequences of becoming culturally marginalized. *Frontiers in Cultural Psychology*, 6, 1117. DOI:10.3389/fpsyg.2015.01117.

Savani, K., Wadhwa, M., Uchida, Y., Ding, Y., & Naidu, N. V. R. (2015) When norms loom larger than the self: Susceptibility of preference-choice consistency to normative influence across cultures. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 129, 70-79.

内田由紀子(2015)「未来への展望 問われる幸福の指標の活用——幸福を支える集合的要件」『CEL:Culture Enrgy and Life』110, 38-43.

Ford, B. Q., Dmitrieva, J. O., Heller, D., Chentsova-Dutton, Y., Grossmann, I., Tamir, M., Uchida, Y., Koopmann-Holm, B., Uhrig, M., Floerke, V., Bokhan, T., & Mauss, I. B. (2015) Culture shapes whether the pursuit of happiness predicts higher or lower well-being. *Journal of Experimental Psychology: General*, 144(6), 1053-1062. DOI:10.1037/xge0000108.

Ogihara, Y., Fujita, H., Tominaga, H., Ishigaki, S., Kashimoto, T., Takahashi, A., Toyohara, K., & Uchida, Y. (2015) Are common names becoming less common? The rise in uniqueness and individualism in Japan. *Frontiers in Psychology*, 6, 1490. DOI:10.3389/fpsyg.2015.01490.

竹村幸祐, 内田由紀子(2015)「漁業コミュニティの社会関係資本と水産業普及指導員の『つなぐ』役割」『水産振興』574, 1-49.

Ishii, K., & Uchida, Y. (2016) Japanese youth marginalization decreases interdependent orientation. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 47(3), 376-384. DOI:10.1177/0022022115621969.

Boiger, M., Uchida, Y., Norasakkunkit, V., & Mesquita, B. (2016) Protecting autonomy, protecting relatedness: Appraisal patterns of daily anger and shame in the United States and Japan. *Japanese Psychological Research*, 58(1), 28-41. DOI:10.1111/jpr.12096

Uchida, Y., & Oishi, S. (2016) The happiness of individuals and the collective. *Japanese Psychological Research*, 58(1), 125-141. DOI:10.1111/jpr.12103.

Tsai, J. L., et al (9 / 14 authors). (2016) Leaders' smiles reflect cultural differences in ideal affect. *Emotion*, 16(2), 183-195. DOI:10.1037/emo0000133.

Choi, E., Kim, Y., & Uchida, Y. (2016) The folk psychology of happiness in Korea. *Korean Journal of Culture and Social Issues*, 22(2), 165-182. DOI:10.20406/kjcs.2016.05.22.2.165.

著書

Uchida, Y., Ogihara, Y., & Fukushima, S. (2015). Interdependently achieved happiness in East Asian cultural context: A Cultural Psychological point of view. In Trommsdorff, G & Assmann, W. R (Eds.), *Engaging in interdisciplinary research. Quality of life in cultural context.* (pp.217-229). Universitätsverlag Konstanz, UTB., Germany.

Uchida, Y., Ogihara, Y., & Fukushima, S. (2015). Cultural construal of wellbeing: Theories and empirical evidence. In Glatzer, W., Camfield, L., Moller, V., & Rojas, M. (Eds.), *Global Handbook of Quality of Life: Exploration of Well-Being of Nations and Continents.* (pp. 823-837). Springer Netherlands. DOI: 10.1007/978-94-017-9178-6_38 [peer-reviewed book chapter].

内田 由紀子 (2016) 「文化とところ——ところへの社会科学的アプローチ」 吉川左紀子, 河合俊雄 (編著) 『ところ学への挑戦』 創元社, 193-219.

学会発表

Uchida, Y., Ogihara, Y. & Fukushima, S. What constitutes a good life? Cultural variation in the emotional patterns of happiness and well-being. Bi-Annual Conference of the International Society for Research on Emotion (Genova, Italy) 2015.7.8.

Uchida, Y. The happiness of individuals and the collective (「発達・感情・幸福感——比較文化心理学の最前線」) 日本心理学会第79回大会ワークショップ (名古屋国際会議場, 名古屋市) 2015.9.22.

内田由紀子「ところに及ぼすマクロな影響を測る——心理・社会・文化への量的アプローチ」日本心理学会第79回大会シンポジウム (名古屋国際会議場, 名古屋市) 2015.9.24.

竹村幸祐, 内田由紀子, 福島慎太郎「共有される文化と生業——マルチレベル分析による検討」日本心理学会第79回大会 (名古屋国際会議場, 名古屋市) 2015.9.24.

荻原祐二, 内田由紀子, 楠見孝「自信を失う日本人——日本における自尊感情の経時的変化」日本心理学会第79回大会発表論文集, 54. (名古屋国際会議場, 名古屋市) 2015.9.24.

Uchida, Y., Takemura, K., & Fukushima, S. "How do we construct happiness and social capital? Evidence from community research in Japan." 13th Meeting of German-Japanese Society for Social Sciences in Cooperation with the German Institute for Japanese Studies (DIJ) "Trust and Risks in Changing Societies" (Tokyo, Japan) 2015.10.9.

Fukushima, S., Uchida, Y., & Saizen, I. "Effects of trust on the risk reduction of common resource management: Multilevel analysis on rural communities in Japan." The 13th Meeting of the German-Japanese Society for Social Sciences German Institute of Japanese Studies (Tokyo, Japan) 2015.10.9.

Ogihara, Y., Uchida, Y. & Kusumi, T. "Does individualization of culture bring risk of being isolated in Japan? A Cultural Psychological Perspective." The 13th Meeting of the German-Japanese Society for Social Sciences, German Institute of Japanese Studies (Tokyo, Japan) 2015.10.9.

Ogihara, Y., Uchida, Y. & Kusumi, T. Are people giving more unique names to their dogs? Rising uniqueness and individualism in Japan. 日本グループ・ダイナミックス学会第62回大会 (奈良大学, 奈良市) 2015.10.11.

Uchida, Y. "Interdependent happiness and wellbeing." International Conference on Gross National Happiness (Paro, Bhutan) 2015.11.4.

Fukushima, S., Uchida, Y., & Takemura, K. "Collective Happiness in Japan." International Conference on GNH (Paro, Bhutan) 2015.11.5.

富永仁志, 阿部修士, 内田由紀子「私たちはどのようにして利己的な行動を抑制しているのか? —行動実験から考えられる経路とその神経基盤についての展望—」 日本人間行動進化学会第8回大会 (総合研究大学院大学, 神奈川県葉山町) 2015.12.5.

Tominaga, H., Abe, N., & Uchida, Y. How do we inhibit our self-interest? The effect of cultural values on the Behavioral Inhibition System (BIS)- SPSP Preconference Advances in Cultural Psychology (at the 17th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology) (San Diego, CA, USA) 2016.1.28.

Ogihara, Y., Uchida, Y., & Kusumi, T. Losing confidence over time: Temporal changes in self-esteem in Japan. The 17th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology (San Diego, CA, USA) 2016.1.29.

講演

内田由紀子「日本における幸福観の多層性: 企業・組織風土との関わり」 第47回京機サロン (大阪市) 2015.4.27.

Uchida, Y. Culture, happiness, and social capital (Stanford University, Department of Psychology, Cultural psychology lab, USA) 2015年 5月.

Uchida, Y. Agency matters: Agentic independence and non-agentic interdependence Culture and clinical psychology perspectives for the KOKORO well-being studies (Kyoto University, Kyoto) 2015年 6月.

Uchida, Y. Culture, happiness, and social capital: Macro-micro function of cultural agency (K.U. Leuven cultural psychology lab, Kyoto) 2015年 7月.

内田由紀子「企業経営と幸福度を考える」 (鼎談) 第24回四国地区経済同友会交流懇談会 (高知市) 2015.9.4.

内田由紀子, 上野泰治, 宮本百合 You were always on my mind: The importance of "significant others" in the attenuation of retrieval-induced forgetting in Japan 日本心理学会第79回大会優秀論文賞授賞式 (名古屋市) 2015.9.21.

内田由紀子「日本文化における社会関係——日本人の意識、感情、関係性からの考察」 パナソニック株式会社先端研フロンティア講座 (パナソニック大阪本社, 門真市) 2015年10月.

内田由紀子「日本における幸福感」 パナソニック株式会社先端研フロンティア講座 (パナソニック大阪本社, 門真市) 2015年10月.

内田由紀子「地域の幸福と健康を考える——社会心理学からのアプローチ」 京都大学徳島講演会 (徳島市) 2015.12.19.

内田由紀子「ところのきずなのインターフェース——集合的幸福へのアプローチ——」 京都大学ところの未来研究センター研究報告会2015 (京都大学, 京都市) 2015.12.20.

内田由紀子「地域の幸福・個人の幸福」 ミラックセミナー2015セッション「幸せな地域のデザイン」 (東京都) 2015年12月

福島慎太郎, 内田由紀子, 竹村幸祐「漁村におけるつながりの醸成に資する水産業普及指導員の役割」 平成27年度第2回水産業普及指導員研修会 (水産庁, 東京都) 2016.2.4.

福島慎太郎, 内田由紀子, 竹村幸祐「農村におけるつながりの価値・機能について」 農林水産政策研究所セミナー (農林水産政策研究所, 東京都) 2016.2.10.

内田由紀子「経営者と幸福感」 第7回京機ビジネスクラブ (大阪市) 2016.2.26.

内田由紀子「若者の心の『閉ざされ』と『開かれ』」 Workshop with Krzysztof Wodiczko (横浜国立大学, 横浜市) 2016年 3月

内田由紀子「社会心理学から見た若者を巡る課題について」(内閣府, 東京都) 2016年3月.

メディア報道

内田由紀子「幸福観」NHK総合(データなび) 2015年6月27日放送.

Uchida, Y. Silent cafes attract solo Japanese in search of peach (The Telegraph) 2015.9.10.

荻原祐二・内田由紀子「名前 読み方で個性 人気の漢字で自由自在」毎日新聞, 2015年10月24日.

荻原祐二・内田由紀子「赤ちゃんの名前 読み方で個性競う? 制限の少なさ背景に 京大調査」日本経済新聞(夕刊), 2015年10月22日.

荻原祐二・内田由紀子「ひろと、やまと、つばさ…すべて大翔くん 京大調査 読み方で個性 増加」読売新聞(夕刊), 2015年10月22日.

荻原祐二・内田由紀子「悠真くん、お名前どう読むの? 漢字は同じでも読み方で個性 京大が研究」朝日新聞, 2015年10月22日.

荻原祐二・内田由紀子「04~13年の名づけ傾向、京大解析 漢字の読みで独自性 個人主義化を示唆」京都新聞, 2015年10月22日.

荻原祐二・内田由紀子「名前に個性的読み増加、京大調査 個人主義化を示唆」共同通信, 2015年10月22日.

荻原祐二・内田由紀子「子どもに個性的な名前つける傾向」KBS京都テレビ(newsフェイス), 2015年10月28日放送.

荻原祐二・内田由紀子「子どもに個性的な名前つける傾向」KBS京都テレビ(京都新聞ニュース), 2015年10月28日放送.

荻原祐二・内田由紀子「そうだったのか! 日本人の名前~データで探る名前の未来」NHK総合(データなび, 世界の明日を読む), 2015年11月28日放送.

受賞

内田由紀子 日本心理学会優秀論文賞(論文: Uchida, Y., Ueno, T., & Miyamoto, Y. You were always on my mind: The importance of "significant others" in the attenuation of retrieval-induced forgetting in Japan. *Japanese Psychological Research*, 2014, 56, 263-274.) 2015年9月.

内田由紀子 *Frontiers in Psychology*, Most viewed Psychology articles in October 2015 (3rd place among 228 articles; Ogihara et al. (2015) に対して) 2015年11月.

社会活動

文部科学省安全・安心科学技術及び社会連携委員会委員.

農林水産政策研究所客員研究員.

ドイツ日本研究所顧問.

土佐経済同友会GKH委員会.

Psychologia, Special issue Guest editor (with Kosuke Takemura) "Regional studies".

阿部修士

論文

阿部修士 (2015) 「不正直さの個人差を生み出す脳のメカニズム」『*Clinical Neuroscience*』33(2), 159-161.

Ito, A., Abe, N., Kawachi, Y., Kawasaki, I., Ueno, A., Yoshida, K., Sakai, S., Matsue, Y. & Fujii, T. (2015) "Distinct neural correlates of the preference-related valuation of supraliminally and subliminally presented faces." *Human Brain Mapping*, 36(8), 2865-2877.

Nishiguchi, S., Yamada, M., Tanigawa, T., Sekiyama, K., Kawagoe, T., Suzuki,

M., Yoshikawa, S., Abe, N., Otsuka, Y., Nakai, R., Aoyama, T. & Tsuboyama, T. (2015) "A 12-week physical and cognitive exercise program can improve cognitive function and neural efficiency in community-dwelling older adults: a randomized controlled trial." *Journal of the American Geriatrics Society*, 63(7), 1355-1363.

Kawagoe, T., Suzuki, M., Nishiguchi, S., Abe, N., Otsuka, Y., Nakai, R., Yamada, M., Yoshikawa, S. & Sekiyama, K. (2015) "Brain activation during visual working memory correlates with behavioral mobility performance in older adults." *Frontiers in Aging Neuroscience*, 7, 186.

阿部修士 (2015) 「嘘つきと正直者の脳のメカニズム」『*心理学ワールド*』71, 13-16.

Kajimura, S., Kochiyama, T., Nakai, R., Abe, N. & Nomura, M. (2015) "Fear of negative evaluation is associated with altered brain function in nonclinical subjects." *Psychiatry Research: Neuroimaging*, 234(3), 362-368.

著書

阿部修士 (2016) 「こころ学の実現に向けて——脳研究の視点から」吉川左紀子, 河合俊雄(編著)『こころ学への挑戦』創元社, 47-71.

解説

阿部修士 (2015) 『モラル・トライブズ 共存の道徳哲学へ(ジョシュア・グリーン著)』の解説, 岩波書店, 485-490.

講演・学会発表・ワークショップ等

西口周, 山田実, 谷川貴則, 積山薫, 川越敏和, 鈴木麻希, 吉川左紀子, 阿部修士, 大塚結喜, 中井隆介, 青山朋樹, 坪山直生「教室型運動介入と日々の身体活動量介入の複合型運動プログラムによる認知機能, 脳活動改善効果——無作為化比較対照試験」第50回日本理学療法学会(東京国際フォーラム, 東京都) 2015.6.5.

Kajimura, S., Kochiyama, T., Nakai, R., Abe, N. & Nomura, M. "Transcranial direct current stimulation modulates effective connectivity within default mode network." 21st Annual meeting of the Organization for Human Brain Mapping 2015, (Honolulu, USA) 2015.6.14-18.

Ito, A., Abe, N., Kawachi, Y., Kawasaki, I., Ueno, A., Yoshida, K., Sakai, S., Matsue, Y. & Fujii, T. "Distinct neural correlates of preference of supraliminally and subliminally presented faces." 21st Annual meeting of the Organization for Human Brain Mapping 2015, (Honolulu, USA) 2015.6.14-18.

阿部修士「MRI画像研究と神経心理学によるヒト脳機能の研究」日本認知心理学会ベーシックセミナー(東京大学本郷キャンパス, 東京都) 2015.7.3.

上田竜平, 蘆田宏, 阿部修士「前頭前野・報酬系の活動が「無分別な恋愛行動」の個人差を説明する」第17回日本ヒト脳機能マッピング学会(毎日新聞オーバルール, 大阪市) 2015.7.2.

伊藤文人, 阿部修士, 河地庸介, 川崎伊織, 上野彩, 吉田一生, 境信哉, 松江克彦, 藤井俊勝「闕上・闕下呈示された顔に対する選好の神経基盤」第38回日本神経科学大会(神戸コンベンションセンター, 神戸市) 2015.7.28.

Kawagoe, T., Suzuki, M., Nishiguchi, S., Abe, N., Otsuka, Y., Nakai, R., Yamada, M., Yoshikawa, S. & Sekiyama, Y. "Working memory and functional mobility association was mediated by a deficit-compensation neural activation pattern." 第38回日本神経科学大会(神戸コンベンションセンター, 神戸市) 2015.7.30.

阿部修士「正直さと不正直さを支える脳のメカニズム」日本心理学会第79回大会(国際賞講演)(名古屋国際会議場, 名古屋市) 2015.9.23.

上田竜平, 蘆田宏, 阿部修士「眼前前頭皮質の活動が「無分別な恋愛行動」の個人差と関わるか? ——リスク行動傾向による説明」日本心理学会第79回大会(名古屋国際会議場, 名古屋市) 2015.9.22.

柳澤邦昭, 重宗弥生, 中井隆介, 阿部修士「将来の死の想起がもたらす時間優先の報酬選好」日本心理学会第79回大会(名古屋国際会議場, 名古屋市) 2015.9.23.

柳澤邦昭, 阿部修士, 嘉志摩江身子, 野村理朗「自尊感情がもたらす死の不安緩衝効果の神経機構」日本グループ・ダイナミクス学会第62回大会(奈良大学, 奈良市) 2015.10.11.

Kawagoe, T., Suzuki, M., Nishiguchi, S., Abe, N., Otsuka, Y., Nakai, R., Yamada, M., Yoshikawa, S. & Sekiyama, Y. "A deficit-compensation brain activation pattern common to working memory and functional mobility in older adults." Society for Neuroscience's 45th Annual Meeting, (Chicago, USA) 2015.10.17-21.

Suzuki, M., Kawagoe, T., Nishiguchi, S., Abe, N., Otsuka, Y., Nakai, R., Yamada, M., Yoshikawa, S. & Sekiyama, Y. "Neural correlates of working memory for face and location in advanced aging." Society for Neuroscience's 45th Annual Meeting, (Chicago, USA) 2015.10.17-21.

柳澤邦昭, 嘉志摩江身子, 重宗弥生, 中井隆介, 阿部修士「メント・モリと時間選好の関係——fMRIによる検討」日本社会心理学会第56回大会(東京女子大学, 東京都) 2015.10.31.

Nishiguchi, S., Yamada, M., Sekiyama, K., Kawagoe, T., Abe, N., Otsuka, Y., Aoyama, T. & Tsuboyama, T. "Multimodal exercise improves cognitive function and brain activation efficiency in older adults." 68th Annual Scientific Meeting of the Gerontological Society of America, (Orlando, USA) 2015.11.18-22.

富永仁志, 阿部修士, 内田由紀子「私たちはどのようにして利己的行動を抑制しているのか? ——行動実験から考えられる2つの経路とその神経基盤についての展望」日本人間行動進化学会第8回大会(総合研究大学院大学, 神奈川県葉山町) 2015.12.5-6.

梶村昇吾, 河内山隆紀, 中井隆介, 阿部修士, 野村理朗「経頭蓋直流刺激によるマインドワンダリング抑制メカニズムの解明」平成27年度包括脳ネットワーク冬のシンポジウム(一橋大学, 東京都) 2015.12.17-19.

Tominaga, H., Abe, N. & Uchida, Y. "How do we inhibit our self-interest? -The effect of cultural values on the Behavioral Inhibition System (BIS)-" 2016 SPSP preconference, Advances in Cultural Psychology, (San Diego, USA) 2016.1.28.

Ueda, R., Yanagisawa, K. & Abe, N. "Why do some people engage in immoral love? : A neural predictor of individual differences in immoral love." The Third CiNet Conference; Neural mechanisms of decision making; Achievements and new directions, (脳情報通信融合研究センター, 吹田市) 2016.2.3-5.

阿部修士, 柳澤邦昭, 伊藤文人「消極的な嘘の神経基盤」第18回日本ヒト脳機能マッピング学会(京都市) 2016.3.7-8.

米田明, 上田竜平, 蘆田宏, 阿部修士「報酬獲得場面と損失回避場面における正直さの神経基盤」第18回日本ヒト脳機能マッピング学会(京都大学桂キャンパス, 京都市) 2016.3.7-8.

梶村昇吾, 河内山隆紀, 中井隆介, 阿部修士, 野村理朗「マインドワンダリングの制御におけるデフォルトモードネットワーク内有意向結合機能の非対称性」第18回日本ヒト脳機能マッピング学会(京都大学桂キャンパス, 京都市) 2016.3.7-8.

阿部修士「正直さと不正直さの神経基盤」第131回大阪大学大学院生命機能研究科交流会(FBSコロキウム)(大阪大学, 吹田市) 2016.3.16.

上田竜平, 柳澤邦昭, 阿部修士「浮気行動傾向を脳と潜在的姿勢から予測する——社会神経科学による検討」第5回超異分野学会関西大会(オムロン京都センタービル啓真館, 京都市) 2016.3.19.

メディア報道

阿部修士「もう一人のあなた 嘘の構図(4)」産経新聞, 2015年4月5日.

阿部修士「文系、理系って何?」読売中高生新聞, 2015年5月29日.
阿部修士「京人 嘘の研究 脳科学で挑む」産経新聞, 2015年7月6日.

熊谷誠慈

論文

Kumagai, S. (2016) Bonpo Abhidharma Theory of Five Aggregates, Journal of Indian and Buddhist Studies, 64(3), 150-157.

熊谷誠慈 (2016) 『『こころ』の文献学的研究の総括および展望』『こころの未来』15, 44-47.

熊谷誠慈 (2016) 『『心』と『こころ』——文献学的手法に基づくこころ学の構築』吉川左紀子, 河合俊雄(編著)『こころ学への挑戦』101-128.

著書

熊谷誠慈 (2016) 『『心』と『こころ』——文献学的手法に基づく『こころ学』の構築』吉川左紀子, 河合俊雄(編著)『こころ学への挑戦』創元社, 101-128.

熊谷誠慈(印刷中). 「ボン教の歴史的概要」『仏教史研究ハンドブック』法蔵館.

研究発表・講演等

熊谷誠慈「政治と宗教は共存可能か? (ブータン社会における仏教思想の応用例を中心に)」連続ミニ・シンポジウム「八思」を学ぶ第1回「科学と宗教の対話」京都大学大学院総合学生存学館(思修館)(京都大学, 京都市) 2015.5.29.

Kumagai, S. Achieving Happiness through Wisdom, TED x Kyoto University (Kyoto University, Kyoto) 2015.6.7.

Kumagai, S. History and Current State of Sakya School in Northern Bhutan, 4th International Seminar for Young Tibetologists (University of Leipzig, Leipzig) 2015.9.8.

熊谷誠慈「ボン教アピダルマに影響を与える仏教思想——五蘊説を中心に」日本印度学仏教学会第66回学術大会(高野山大学, 和歌山県高野町) 2015.9.19.

Kumagai, S. Buddhist Psychology for Happiness and Wellbeing, 6th International Conference on Gross National Happiness (Ugyen Pelri Palace, Paro) 2015.11.6.

熊谷誠慈「チベット・ブータンにおける精神性と公共性」霊性研究フォーラム—スピリチュアリティと公共性—第6回研究大会(山荘京ヶ岳, 上越市) 2015.10.4.

畑中千紘

論文

畑中千紘 (2015) 「象徴性の弱い夢をみる中学生との面接——深みから出ることについての考察」『臨床ユング心理学研究』1(1), 49-60.

学会発表

畑中千紘「大学生の室内画にみる現代の意識」日本ユング心理学会第4回大会(京都文教大学, 宇治市) 2015.6.7.

Hatanaka, C. "Consciousness of Japanese youths today: Analysis of Rorschach test and Room-Drawing-Test" International symposium: Culture and Clinical Psychology Perspectives for the KOKORO Well-being Studies, (Kyoto) 2015.6.14.

Hatanaka, C. "Transformation of Jungian psychotherapy in the age of the loss of individual boundary and self-reproduction" Fourth Joint Conference of the

IAAP and th IAJS (Yale University, USA) 2015.7.9-12.

Hatanaka, C. "The dreams of a woman who lacks her self-centered mind" Dr. Giegerich Dream Seminar (Berlin, Germany) 2015.8.15-16.

皆本麻実, 畑中千紘, 梅村高太郎, 井芹聖文, 土井奈緒美, 長谷川藍, 田附紘平, 松波美里, 岡部由菜, 粉川尚枝, 鈴木優佳, 河合俊雄, 田中康裕『『発達障害』とは見立てられない子どものプレイセラピー(1)——発達障害と診断される要因とプレイセラピーの特徴』日本箱庭療法学会第29回大会(東北福祉大学, 仙台市) 2015.10.10-11. 田附紘平, 松波美里, 鈴木優佳, 皆本麻実, 畑中千紘, 梅村高太郎, 井芹聖文, 土井奈緒美, 長谷川藍, 岡部由菜, 粉川尚枝, 河合俊雄, 田中康裕『『発達障害』とは見立てられない子どものプレイセラピー(2)——三事例のプロセスの検討から』日本箱庭療法学会第29回大会(東北福祉大学, 仙台市) 2015.10.10-11.

畑中千紘「身体的違和感を訴える女性の夢の展開——外的な語りとイメージの関連に着目して」日本箱庭療法学会第29回大会(東北福祉大学, 仙台市) 2015.10.10-11.

Hatanaka, C. "The dreams of a woman in her 30's who diagnosed as autism spectrum disorder" (Dr. Giegerich Dream Seminar, Berlin Germany) 2016.2.10-11.

その他

ゲリー・L・ランドレス, スー・C・ブラットン(著)小川裕美子, 湯野貴子(監訳)(2015)『子どもと親の子どもと親の関係性セラピー(CPRT)』日本評論社, 9章・19章の翻訳.

Hatanaka, C. (2015) "Are Today's Students Indecisive?: A comparative study of psychological tests spanning ten years" *Research Activities*, 50(3), 30.

畑中千紘(2016)「こころを知り、こころとつきあう仕事とは」『金沢大学附属高等学校《同窓生による特別授業》の記録』39, 43-64. 講演日:2015.3.14.

清家理

論文

清家理, 櫻井孝, 住垣千恵子, 武田章敬, 遠藤英俊, 鳥羽研二(2015)「認知症介護におけるセルフヘルプ人材育成プログラム開発研究——多職種協働一歩によるアクションリサーチ」*Journal of the Sugiura Memorial Foundation*, 4, 60-61.

Seike, A., & Yoshikawa, S. (2015) Learn, no matter how old you get and be active throughout your entire life! From Kyo-machiya. *Why Research Kokoro Now? Kyoto University Research Activities*, 5(3), 14-15.

Seike, A. (2015) Addressing the Challenge of a Super-Aged Society. *Why Research Kokoro Now? Kyoto University Research Activities*. 5(3), 32.

清家理(2016)「特集:患者さんの疑問から最新研究まで徹底解説!糖尿病と認知症のふかへい関係(3)不安を解決!認知症なんでもQ&A 医療スタッフの疑問編」『糖尿病ケア』13(1), 56-61.

Seike, A., Sakurai, T., Sumigaki, C., Takeda, A., Endo, H. & Toba, K. (2016) Verification of Educational Support Intervention for Family Caregivers of Persons with Dementia. *Journal of the American Geriatrics Society* 64(3), 661-663.

学会発表・講演

清家理「認知症介護におけるセルフヘルプ人材育成プログラムの開発研究——多職種協働一歩によるアクションリサーチ」第3回杉浦地域医療助成報告(東京都)2015.7.9.

清家理「介護って何?」「孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発」プロジェクト『くらしの学び庵』初級第3期第6回(京町家・風伝館, 京都市)2015.7.22.

清家理「認知症における医療保健福祉政策——政策の学びが腑に落ちるために必要なLesson」(信州大学)2015.7.23.

清家理「家族・介護者のケア——ケアに励む人のココロが枯れたり、根腐れしたりしないために」第2回老人保健施設管理医師研修会(第II期)(AP東京八重洲通り, 東京都)2015.9.12.

清家理「介護者の介護負担軽減へのアプローチ——段階的教育支援プログラム開発研究(国立長寿医療研究センター版)より」「認知症診療ホットトピック 認知症医療・介護の現在と未来」第34回日本認知症学会学術集会(リンクステーションホテル青森, 青森市)2015.10.4.

清家理「ココロの学問で“ココロの象使い”になれる?——心理学・社会福祉学・医学からアプローチしてみる」総合学科学目「産業社会と人間」学問研究講演会(兵庫県立須磨友が丘高校, 神戸市)2015.10.23.

清家理「認知症における意思決定支援の課題」京都府医師会(京都)2016.1.19.

清家理, 大久保直樹, 藤崎あかり, 武田章敬, 遠藤英俊, 鳥羽研二, 櫻井孝「国立長寿医療研究センターもの忘れセンターにおける『認知症をもつ人、家族のための学びの場づくりの歩み』」日本医療研究開発機構 脳とこころの研究第1回公開シンポジウム「脳と心の時代 認知症等の克服に向けて」第一部ポスターセッション(よみうり大手町ホール, 東京)2016.2.27.

清家理「臨床知を政策に還元するために——認知症のアクションリサーチからの提言」京都市役所(京都)2016.3.10.

清家理「認知症ケアは九転十起——認知症の方および家族介護者と共に学んだ日々より」第11回認知症フォーラム(ウインクあいち, 名古屋市)2016.3.16.

清家理「くらしの中からできること——京町家プロジェクト『くらしの学び庵』より」国立長寿医療研究センター公開講座「最期までよりよく生きるために必要なこと——今日から私ができること」(大府市役所, 愛知県)2016.3.24.

清家理「介護って何?」「孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発」プロジェクト『くらしの学び庵』初級第4期第6回(京町家・風伝館, 京都市)2016.3.26.

清家理「くらしの学び庵総括——こころ・からだ・くらしの学びの足跡」「孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発」プロジェクト2015年度シンポジウム(稲盛財団記念館, 京都市)2016.3.27.

社会活動

平成27年度老人保健健康増進等事業「認知症の早期診断, 早期対応につながる初期集中支援チーム設置・運営に関する調査研究事業」外部委員.

社会貢献人材育成事業プロジェクト企画・運営(吉川左紀子と協働)「孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発」プロジェクト, くらしの学び庵.

平成27年度京都府看取り対策プロジェクトACP推進ワーキング委員.

上田祥行

論文

市村賢士郎, 上田祥行, 楠見孝(2016)「課題動機づけにおける困難度情報が課題努力に及ぼす影響」『心理学研究』262-272.

上田祥行, 野村理郎(2016)「顔の認識——個別から関係性の中へ」『児童心理学の進歩 2016年版』2-26.

Ueda, Y., Tominaga, A., Kajimura, S. & Nomura, M. (2016). Spontaneous eye

blinks during creative task correlate with divergent processing. *Psychological Research*, 80(4),652-659. DOI: 10.1007/s00426-015-0665-x

著書

Nakayama, M., Ueda, Y., Taylor, P.M., Tominaga, H. & Uchida, Y. (2016) (in press). Cultural psychology as a form of memory research. In T. Tsukiura & S. Umeda (Ed.), *Memory in Social Context: Brain, Mind, and Society*.

学会発表, ワークショップなど

Kanaya, K., Ueda, Y., Tochiya, H. & Yokosawa, K. "The correspondence between neutral voice and face is mediated by common perceptual properties." Vision Sciences Society 15th Annual Meeting (St. Pete Beach, USA) 2015.5.18.

Higuchi, Y., Ueda, Y. & Saiki, J. "Variability during learning facilitates generalization in contextual cueing." Vision Sciences Society 15th Annual Meeting (St. Pete Beach, USA) 2015.5.19.

Ueda, Y., Kurosu, S. & Saiki, J. "Intensity of visual search asymmetry depends on physical property in target-present trials and search type in target-absent trials." Vision Sciences Society 15th Annual Meeting (St. Pete Beach, USA) 2015.5.20.

Fujino, M., Ueda, Y., Mizuhara, H., Saiki, J. & Nomura, M. "Effects of two types of Mindfulness Meditation on brain functional connectivity." Mind and Life Summer Research Institute 2015 (New York, USA) 2015.6.14.

上田祥行「アンサンブル処理によって生じる単純接触効果」日本認知心理学会第13回大会（東京大学，東京都）2015.7.4.

Higuchi, Y., Ueda, Y. & Saiki, J. "Variability induces generalization in implicit learning of spatial configuration." Satellite symposium of the 38th annual meeting of the Japan Neuroscience Society (Kyoto, Japan) 2015.8.1.

樋口洋子, 上田祥行, 齋木潤「学習時の変動が潜在学習の般化に及ぼす影響」日本心理学会第79回大会（名古屋国際会議場，愛知県）2015.9.22.

上田祥行「脳機能イメージングと遺伝子多型からみた認知制御メカニズムの個人間変異」日本心理学会第79回大会シンポジウム「制御機構の認知神経科学——平均特性と個人間変異の統合に向けて」（名古屋国際会議場，愛知県）2015.9.23.

市村賢士郎, 上田祥行, 楠見孝「課題動機づけと努力に及ぼす遂行結果の影響」日本心理学会第79回大会（名古屋国際会議場，愛知県）2015.9.24.

Ueda, Y., Kikuno, Y., Yamamoto, H. & Saiki, J. "Inferior parietal lobules plays an important role in individual differences in executive function: a study with fMRI and SNP." Society for Neuroscience 2015 Annual Meeting (Chicago, USA) 2015.10.17.

Watabe, M., Ueda, Y., Kato, T.A., Shinada, M. & Yamagishi, T. "Gender difference in the performance of cheater-detection in social exchange: An eye-tracker study." Society for Neuroscience 2015 Annual Meeting (Chicago, USA) 2015.10.17.

Kanaya, K., Ueda, Y., Tochiya, H. & Yokosawa, K. "Factors mediating the correspondence between unfamiliar faces and voices." Psychonomic Society 2015 Annual Meeting (Chicago, USA) 2015.11.21.

Ueda, Y. "Visual summary and the mere exposure effect." Psychonomic Society 2015 Annual Meeting (Chicago, USA) 2015.11.21.

上田祥行「注意を向けなくても要約された視覚情報が記憶される」日本基礎心理学会第34回大会（大阪樟蔭大学，東大阪市）2015.11.29.

Higuchi, Y., Ueda, Y. & Saiki, J. "Flexible implicit learning of variable spatial configurations" 2016 annual meeting of Korean Society for Cognitive and Biological Psychology (Jeju-do, Korea) 2016.1.21.

上田祥行「グループの平均表情知覚の正確性」日本心理学会「注意

と認知」研究会第14回合宿研究会（名古屋市）2016.3.13.

熊切俊祐, 上田祥行, 齋木潤「顕著性とアンサンブル情報の眼球運動への影響」日本心理学会「注意と認知」研究会第14回合宿研究会（名古屋市）2016.3.13.

鎌倉裕介, 上田祥行, 齋木潤「シーンの意味と構造が眼球運動に与える効果——写真画像とノイズ画像の比較研究」日本心理学会「注意と認知」研究会第14回合宿研究会（名古屋市）2016.3.13.

受賞

日本心理学会第79回大会優秀発表賞.

日本基礎心理学会第34回大会優秀発表賞.

日本認知心理学会第13回大会優秀発表賞「総合性評価部門」.

柳澤邦昭

論文

Yanagisawa, K., Abe, N., Kashima, E. S. & Nomura, M. (2016) Self-esteem modulates amygdala-ventrolateral prefrontal cortex connectivity in response to mortality threats. *Journal of Experimental Psychology: General*, 145(3), 273-283.

学会発表

柳澤邦昭, 重宗弥生, 中井隆介, 阿部修士「将来の死の想起がもたらす時間優先の報酬選好」日本心理学会第79回大会（名古屋国際会議場，名古屋市）2015.9.23.

柳澤邦昭, 阿部修士, 嘉志摩江身子, 野村理朗「自尊感情がもたらす死の不安緩衝効果の神経機構」日本グループ・ダイナミックス学会第62回大会（奈良大学，奈良市）2015.10.11.

柳澤邦昭, 嘉志摩江身子, 重宗弥生, 中井隆介, 阿部修士「メント・モリと時間選好の関係——fMRIによる検討」日本社会心理学会第56回大会（東京女子大学，東京都）2015.10.31.

阿部修士, 柳澤邦昭, 伊藤文人「消極的な嘘の神経基盤」第18回日本ヒト脳機能マッピング学会（京都大学，京都市）2016.3.7.

●**2015年10月14日** こころの思想塾「現代の経済・経営を考える」1期第2回(於:稲盛財団記念館3階大会議室)。講師・オーガナイザー:佐伯啓思(センター特任教授/京都大学名誉教授)。1期受講者数22名。

●**10月17日** 「支える人の学びの場 先生のためのこころ塾2015」第1回(於:稲盛財団記念館3階大会議室)。講義:乾敏郎(追手門学院大学心理学部教授/京都大学名誉教授)「円滑なコミュニケーションを支える脳機構」、村井俊哉(京都大学大学院医学研究科教授)「『社会性』という観点から心の健康について考える」、実践報告:小川詩乃(京都大学人間・環境学研究科 日本学術振興会特別研究員PD)・田村綾菜(愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所リサーチレジデント)。グループディスカッション、講師とのQ&A。司会:吉川左紀子。受講者数45名。

●**10月20日** 第6回ブータン文化講座「輪廻のコスモロジーとブータンの新しい世代」(於:稲盛財団記念館3階大会議室)。講演:西平直(京都大学大学院教育学研究科教授)。司会:熊谷誠慈。参加人数98名。

●**10月22日** 第40回身心変容技法&ワザ学・こころ観合同研究会(於:稲盛財団記念館3階大会議室)。発表1:大田俊寛(埼玉大学非常勤講師)「『人間を殺傷しうる人間』の問題～イニシエーションの本質と宗教的暴力」、発表2:田口ランディ(作家)「意識変容体験の負の側面」、[全体討論]コメンテーター:島菌進(上智大学グリーンケア研究所所長)。司会:鎌田東二。

●**10月24日** 「支える人の学びの場 先生のためのこころ塾2015」第2回(於:稲盛財団記念館3階大会議室)。講義:乾敏郎「認知機能の発達とその脳内機構」、岩宮恵子(島根大学教育学部教授・臨床心理士)「子どもたちの心を縛るもの:『イツメン(いつものメンバー)』と『ぼっち』から考える」、実践報告:加藤寿宏(京都大学大学院医学研究科准教授・作業療法士)。グループディスカッション、講師とのQ&A。司会:吉川左紀子。

●**10月28日** こころの思想塾「現代の経済・経営を考える」1期第3回(於:稲盛財団記念館3階大会議室)。講師・オーガナイザー:佐伯啓思、講師:内田由紀子。

●**11月** 上田祥行助教が日本基礎心理学会第34回大会で優秀発表賞を受賞。発表題目:「注意を向けなくても要約された視覚情報が記憶される」。

●**11月7日** 「支える人の学びの場 先生のためのこころ塾2015」第3回(於:稲盛財団記念館3階大会議室)。講義:乾敏郎「体で学ぶ神経機構:潜在学習」、村上公也(キマヤ

ズ塾塾長)「笑顔・考える・つながる授業づくり——目からウロコの教材・教具」、実践報告:高畑脩平(奈良県総合リハビリテーションセンター作業療法士)。司会:吉川左紀子。

●**11月8日** 「支える人の学びの場 医療専門職のためのこころ塾2015」第1回(於:稲盛財団記念館3階大会議室)。講義:乾敏郎(追手門学院大学心理学部教授/京都大学名誉教授)「認知、感情と身体性:感情の役割とその神経機構」、熊田孝恒(京都大学情報学研究科教授)「実行系注意と自己統制のメカニズムとその発達・障害」、事例報告:寺尾智樹(埼玉県立小児医療センター作業療法士)。グループディスカッション、講師とのQ&A。司会:吉川左紀子。受講者数50人。

●**11月11日** こころの思想塾「現代の経済・経営を考える」1期第4回(於:稲盛財団記念館3階大会議室)。講師・オーガナイザー:佐伯啓思、講師:金井一頼(大阪商業大学総合経営学部教授/大阪大学名誉教授)。

●**11月21日** 「支える人の学びの場 医療専門職のためのこころ塾2015」第2回(於:稲盛財団記念館3階大会議室)。講義:乾敏郎「言語・非言語コミュニケーションの神経機構」、船曳康子(京都大学人間・環境学研究科准教授)「『治す・つきあう』のバランスとその支援」、事例報告:草野佑介(京都大学医学部附属病院作業療法士)。グループディスカッション、講師とのQ&A。司会:吉川左紀子。

●**11月25日** こころの思想塾「現代の経済・経営を考える」1期第5回(於:稲盛財団記念館3階大会議室)。講師・オーガナイザー:佐伯啓思。

●**11月26日** 第41回身心変容技法&ワザ学研究会(於:稲盛財団記念館3階大会議室)。発表1:野村理朗(京都大学教育学研究科准教授)「負の感情の浄化にかかわる考察——心理・神経・遺伝学の立場から」、発表2:魚川祐司(著述、翻訳家)。司会:鎌田東二。

●**11月29日** 「支える人の学びの場 医療専門職のためのこころ塾2015」第3回(於:稲盛財団記念館3階大会議室)。講義:乾敏郎「共感脳と発達障害」、松見淳子(関西学院大学文学部教授)「地域に根付く子どもの発達支援:実践と研究の一体化」、事例報告:小松則登(愛知県心身障害者コロニー中央病院作業療法士)。グループディスカッション、講師とのQ&A。司会:吉川左紀子。

●**12月** センターの取り組み及び研究者の活動を特集した外国向け冊子『Kyoto University Research Activities』(Vol.5 No.3 Dec 2015/京都大学)発行。

●**12月3日・4日** fMRI解析セミナー「脳領域間結合解析基礎編 + SPM 豆知識」(於:

稲盛財団記念館3階大会議室)。講師:河内山隆紀先生(株式会社ATR-Promotions. 脳活動イメージングセンタ)。司会:阿部修士。参加人数37名。

●**12月10日** 第42回身心変容技法&ワザ学・こころ観合同研究会「声と音の力と身心変容」(於:稲盛財団記念館3階大会議室)。発表1:山崎広子(音・人・心研究所代表)「声の力と身心変容について」、発表2:小松正史(京都精華大学教授)「聴覚が司る無意識の身心変容——音育と音デザインの事例紹介。司会:鎌田東二。

●**12月14日** 群馬県立太田東高校1年生20名がセンターを訪問。鎌田東二教授、阿部修士准教授によるレクチャーを受講し、連携MRI研究施設を見学。

●**12月20日** 京都大学こころの未来研究センター 研究報告会2015「からだ・こころ・きずな」(於:稲盛財団記念館3階中会議室/ポスター会場:大会議室)。開会の挨拶:吉川左紀子、研究報告1:船橋新太郎「動物の脳からヒトのこころを探る」、研究報告2:鎌田東二「こころのワザ学——こころはどこにあり、どのように現れるのか? 日本研究の立場から」、研究報告3:内田由紀子「こころときずなのインターフェース:集積的幸福へのアプローチ」、[ディスカッション]ディスカッサント:広井良典(千葉大学法政経学部教授)、堀智孝(京都大学特任教授・白眉センタープログラムマネージャー)、閉会の挨拶。司会:内田由紀子。参加人数61名。

●**12月20日** 京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門2015年度研究報告会「身体からこころを問い直す」(於:稲盛財団記念館3階大会議室)。センター長挨拶:吉川左紀子、来賓挨拶:丸山登(公益財団法人上廣倫理財団事務局長)、上廣こころ学研究部門の取り組み紹介:鎌田東二、研究報告1:門前斐紀「芸術からこころを問い直す」、研究報告2:梅村高太郎「心身症からこころを問い直す」、研究報告3:カール・ベッカー「介護からこころを問い直す」、[部門研究者による全体討論]モデレーター:熊谷誠慈、ディスカッサント:清家理、畑中千紘、福島慎太郎(青山学院大学総合文化政策学部助教)、閉会の挨拶:河合俊雄。司会:阿部修士。参加人数97名。

●**12月24日・25日** こころの未来 脳科学集中レクチャー2015「こころを創発する脳と身体」(於:稲盛財団記念館3階大会議室)。講師:大平英樹(名古屋大学大学院環境学研究科教授)。司会:阿部修士。参加人数101名。

●**2016年1月16日** 「くらしの学び庵:孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発

研究プロジェクト]初級4期目第1回(於:風伝館/京都市上京区)。講義:青山朋樹(京都大学大学院医学研究科)「毎日できる運動で衰え知らず!」、意見交換会。司会:清家理。共催:公益財団法人信頼資本財団、後援:アミタグループ、京都市、京都市教育委員会、京都信用金庫、京都大学大学院医学研究科人間健康科学専攻、京都大学医学部附属病院、国立研究開発法人国立長寿医療研究センター、文部科学省 地(知)の拠点整備事業(50音順。以下、同タイトル初級4期の共催、後援はすべて同じであるため記載省略)。

●1月28日 第43回身心変容技法&ワザ学・こころ観合同研究会「身心変容技法としての短歌と俳句のワザ学」(於:稲盛財団記念館3階小会議室1)。発表1:堀本裕樹(俳人)「我が俳句における身心変容」、発表2:安藤礼二(多摩美術大学芸術人類学研究所准教授・評論家)「折口信夫における短歌と身心変容」。司会:鎌田東二。

●1月30日 「くらしの学び庵:孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究プロジェクト」初級4期目第2回(於:風伝館)。講義:吉川左紀子「健やかなこころで暮らす知恵」、意見交換会、よろず相談会。司会:清家理。

●2月4日 こころの思想塾「民主主義と政治を考える」2期第1回(於:稲盛財団記念館3階小会議室1)。講演とディスカッション。講師・オーガナイザー:佐伯啓思。2期受講者数29名。

●2月9日 第44回身心変容技法&ワザ学・こころ観合同研究会(於:稲盛財団記念館2階225号室)。発表1:忠岡経子(英国プリマス大学トランス・テクノロジー研究所博士課程)「共鳴~隻手の声:認識における共鳴の役割、観想的経験からのアプローチ」、発表2:岩崎美香(明治大学大学院博士課程)「日本人の臨死体験と臨死体験後に迎える過程——20事例における質的研究の結果から」。司会:鎌田東二。

●2月13日 「くらしの学び庵:孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究プロジェクト」初級4期目第3回(於:風伝館)。講義:荒井秀典(国立長寿医療研究センター)「老化と病気の予防で錆知らず!」、意見交換会。司会:清家理。

●2月15日 第45回身心変容技法&ワザ学・こころ観合同研究会(於:稲盛財団記念館2階225号室)。発表:奥井遼(日本学術振興会海外特別研究員・パリ第5大学)「遊びと学び——サーカス学校のアーティスト養成の冒険」。司会:鎌田東二。

●2月18日 こころの思想塾「民主主義と政治を考える」2期第2回(於:稲盛財団記念館3階小会議室2)。講演とディスカッション。講師:佐藤一進(京都精華大学芸術学部准教授)、講師・オーガナイザー:佐伯啓思。

●2月25日 こころの思想塾「民主主義と政

治を考える」2期第3回(於:稲盛財団記念館3階小会議室2)。講演とディスカッション。講師・オーガナイザー:佐伯啓思。

●2月21日 鎌田東二教授退職記念講演会・シンポジウム(於:京都大学芝蘭会館稲盛ホール)。(第一部 鎌田東二教授退職記念講演)センター長挨拶:吉川左紀子、講演者紹介、講演:鎌田東二「日本文化における身心変容のワザ」、パフォーマンス(石笛・横笛・法螺貝他)。(第二部 シンポジウム)「日本文化とこころのワザ学」イントロダクション、講演:島菌進(上智大学グリーンケア研究所所長)「道の思想と日本宗教史」、講演:河合俊雄「心理療法とこころのワザ学」、講演:奥井遼「身心変容とアート教育——フランス国立サーカス学校の現場から」、(総合討論)ディスカッサント:鎌田東二、島菌進、河合俊雄、奥井遼、コメンテーター:広井良典、司会:熊谷誠慈。参加人数200名。

●2月27日 「くらしの学び庵:孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究プロジェクト」初級4期目第4回(於:風伝館)。講義:幣憲一郎(京都大学医学部附属病院)「毎日できる栄養管理で病気知らず!」、意見交換会、よろず相談会。司会:清家理。

●2月29日・3月1日・2日 2015年度こころの科学集中レクチャー「こころの謎——脳科学からの挑戦」(於:稲盛財団記念館3階大会議室)。講師:北山忍(センター特任教授・ミシガン大学心理学部教授文化・認識プログラム所長)、杉浦元亮(東北大学加齢医学研究所・災害科学国際研究所准教授)、渡邊克巳(早稲田大学理工学術院教授)。司会:内田由紀子。参加人数35名。

●3月 センターの教授、准教授らが執筆した共著「こころ学への挑戦」が創元社より刊行。

●3月 第1回京都こころ会議シンポジウム「こころと歴史性」(2015年9月13日開催)を書籍化した『こころ』はどこから来て、どこへ行くのか』が岩波書店より刊行。

●3月 阿部修士准教授がNPO法人ニューロクリアティブ研究会・2015年度研究者支援「創造性研究奨励賞」2等を受賞。受賞研究テーマ:「道徳的意思決定に与える創造性の影響——認知神経科学的研究」。

●3月3日 こころの思想塾「民主主義と政治を考える」2期第4回(於:稲盛財団記念館3階小会議室2)。講演とディスカッション。講師・オーガナイザー:佐伯啓思。

●3月3日 第46回身心変容技法&ワザ学・こころ観合同研究会(於:稲盛財団記念館3階大会議室)。発表1:阪上正巳(国立音楽大学教授・精神科医)「身心変容技法としての音楽療法」、発表2:中田英之(練馬総合病院漢方医学センター長・産科医)「東洋医学治療と音 気滞、瘀血を動かす音」、発表3:上馬場和夫(帝京平成大学教授・インド医学研究・医師)「伝統医学の頭部へのアプローチにより惹起されるASC(変性意識状態)」、コメ

ンテーター:稲葉俊郎(東京大学医学研究科助教・循環器内科医・未来医療研究)。司会:鎌田東二。

●3月5日 船橋新太郎教授退職記念講演会(於:稲盛財団記念館3階大会議室)、センター長挨拶:吉川左紀子、来賓挨拶:久保田競(京都大学名誉教授)、講演者紹介、講義:船橋新太郎「前頭連合野との35年」、花束・記念品贈呈:吉川左紀子、カール・ベッカー、畑中千紘。司会:阿部修士。参加人数83名。

●3月12日 「くらしの学び庵:孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究プロジェクト」初級4期目第5回(於:風伝館)講義:高岸達哉(京都信用金庫業務部業務課)「老後の備えて?アリとキリギリス物語」、意見交換会。司会:清家理。

●3月26日 「くらしの学び庵:孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究プロジェクト」初級4期目第6回(於:風伝館)。講義:清家理「介護って何?」、意見交換会、よろず相談会、修了式。司会:清家理。

●3月27日 「孤立防止のための自助・互助強化プログラム開発プロジェクト2015年度シンポジウム:超高齢社会を心地よく生きるために必要なこと」(於:稲盛財団記念館3階大会議室)。開会挨拶:吉川左紀子、くらしの学び庵総括:清家理「こころからだ・くらしの学びの足跡」、くらしの学び庵特別講義1:荒井秀典(国立長寿医療研究センター副院長)「いきいき毎日を過ごすために必要な健康づくり」、くらしの学び庵特別講義2:櫻井孝(国立長寿医療研究センターもの忘れセンター長)「認知症と診断されたら——医療者と本人、家族が共に考えたいこと」、くらしの学び庵特別講義3:三宅聖子(東京都渋谷区障害者福祉センター施設長)「よりよく生きるための笑・唱・掌」、京都市よりみなさまへ:西川保子(京都市保健福祉局長寿社会部長寿福祉課担当課長)、京都府よりみなさまへ:山本勇人(京都府健康福祉部高齢者支援課担当課長)、くらしの学び庵Q&A編「心地よく生きるために今日からできること」。回答者:荒井秀典、櫻井孝、三宅聖子、西川保子、山本勇人、清家理、司会:吉川左紀子、閉会挨拶:松林公蔵(東南アジア研究所教授)。主催:京都大学こころの未来研究センター、後援:京都市、京都市教育委員会、京都地域包括ケア推進機構、京都府、国立研究開発法人国立長寿医療研究センター、文部科学省 地(知)の拠点整備事業(50音順)。参加人数122名。

●3月28日 第7回ブータン文化講座「ブータンの仏教と祭り ニマルン寺(中央ブータン)のツェチュ祭」(於:稲盛財団記念館3階大会議室)。講演者:今枝由郎(前フランス国立科学研究センター・研究ディレクター)。司会進行:熊谷誠慈。参加人数約100名。

●3月31日 学術広報誌『こころの未来』第15号刊行。

編集後記

自分や自分の周囲のことにばかり関心が向かっていた学生時代。40年以上前になります。当時、公共政策という言葉はあまり聞かず、政治や経済にもほとんど興味がありませんでした(反省)。学生時代の私が本号を読んだとしたらどんな感想を言うのか聞いてみたい、と遠い目になっています。(吉川左紀子)

今回から編集担当に加わらせていただいたが、実質的に私がやったことは座談会への出席と拙い短文の執筆のみで、すべては前任の鎌田東二先生がアレンジされたものである。テーマ設定でのご配慮とともに、内容の充実ぶりにただ感服するばかりであり、この場を借りて感謝の意を表したい。(広井良典)

2016年4月に着任し新しく本誌編集委員になりました。次号は私の専門とする現代美術、アートをテーマとした特集を編集中です。美術の「いま」を見据えた論考に加え、多彩な活動を繰り広げるアーティストへのインタビュー、初の海外取材などを行いましたので、ご期待ください。(吉岡 洋)

私が編集委員を拝命したのが2013年の11号からなので、丸3年以上が経過したことになる。月日が経つのは本当に早い。本号からは広井先生・吉岡先生ともご一緒させていただくことになった。新たなテイストの入った『こころの未来』、多くの方に手に取っていただければと思う。(阿部修士)

今年度より公共政策学がご専門の広井教授、芸術学がご専門の吉岡教授が編集委員に加わられた。本号には広井編集委員の専門である公共政策学の研究者から実務家まで、幅広い論考が載録されている。本号を通じて、公共政策の重要性と課題が広く再認識されることを切に祈念する。(熊谷誠慈)

本誌の編集体制が新しくなり、特集の幅もさらに広がり、深まることと思います。いつもながら、刊行が大幅に遅れ、執筆者の方々はじめ関係者のみなさまにご心配、ご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。(原 章)